

---

# 武の頂を目指して

木暮閣下

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

武の頂を目指して

### 【Nコード】

N5821S

### 【作者名】

木暮閣下

### 【あらすじ】

“武の頂”とは何なのか？

父の遺言を胸に、闘いの才能がない少年はただひたすらに“武の頂”を目指して進む。

主人公設定

随時更新

9 / 27 更新 (前書き)

本編の進行に合わせて更新します

## 主人公設定

随時更新 9 / 27 更新

第7話 更なる高みで 終了時点

<名前>

カイジ

<身長>

158cm

<体重>

48kg

<容姿>

黒髪の刈り上げ（ストリートファイターのリュウみたいな髪型）

黒目、目付きが鋭い

目以外は平凡な顔だち

<服装>

濃紺の武道着の上下、白のアンダーシャツを着ている

<その他>

ストイックな性格、基本的に武術のことしか考えていない。

闘いの才能はない、悟空たちが8ヶ月で得た身体能力をカイジは数年かけて手に入れた。

ただし成長に関しては限界がなく、時間とやる気があればどこまで

も強くなれる。

温厚な性格ではあるが、敵と認識した相手には容赦しない。  
精神的安定感がなく、本能にまかせて暴走することもある。

<カイジの立場について>

亀仙人の弟子になったカイジですが、今のところ亀仙流を習う予定はありません。

カイジの使うカイセン流は亀仙流を基本にしているとはいえすでに別物なので亀仙流の技も使う予定はありません。

11/9/27 追記

以下第32話以降のネタバレ注意

### 第32話 3年ぶりの再会 開始時点

<容姿、服装など>

基本的に変わりません、そのままです。かくなりました。

身長は悟空以上ヤムチャ未満、詳細な数字は控えます、というのも原作のキャラクターたちの身長が公式資料とどう見てもマッチしないからです。故に文章で表現する際も描写に非常に困ります。ということで大ざっぱな情報だけ出しときます。

第33話から亀仙流の道着を着用。

<その他>

カリン様との修業で精神的な成長を遂げた、基本的に理性的な性格。イメージ的には神様との修業後の悟空のような性格。

父親が探し求めていた“武の頂”とは何なのかを己の人生を通して探っている。

闘いの才能云々はカイジの出生の秘密やら両親の秘密やらに大きく関わっている、がまだ明かしません。

カイジ自信は占いババの宮殿である程度の情報は父親から聞かされている。

心の中にもう一人の自分及びカイジの戦闘本能そのものを名乗る

キー二 という存在がいるが、その詳細な設定もまだ秘密。キー二の出番はまだありません。

13才 旅立ち（前書き）

初投稿です。

よろしくお願ひします。

11/09/17 加筆修正



## 13才 旅立ち

オレ、カイジが生まれ育ったのは都から遠く離れた小さな村だった。

田舎ではあるが農耕・畜産業に適した土地で生活に不自由はなかった。

武術を始めたのは父親が武術家だったから、親の背を見て子は育つとは正にこのことで、物心がついたときには武術は生活の一部と化していた、その父はとんでもなく強かった。

その拳は岩をも砕き、鍛え上げられた肉体は鋼よりも硬かった、そんな父の姿に当時のオレは子供ながらに強烈に憧れた。

なんでも若い頃父は、ある高名な武術家の下で修行していたらしく、オレに課す修行もそれを真似したものらしい。

朝は全力疾走での牛乳配達、

昼間は素手で畑を耕し、

夕方は八木の攻撃を避ける修行、背中のやたら重い貝殻は亀の甲羅の代用らしい、ワケわからん。

修行を始めた当初はからかわれてると思い、オレは真剣に武術を

学びたいのだ、と血気盛んなオレは父に殴りかかることもままあった。

その度に父はオレを地面に叩きつけてこう言った、

「ひよつこのくせになあーにをナマイキいつとるか！！ 体力作りもできとらんで武術が教えられるわけねえじゃろ！！！」

父は修行の時だけ何故か仙人口調になるクセがあつた、師の影響らしい。修業時代の父もとても武術の修業とは思えない雑用の数々に不満を覚えては師匠に抗議し、その度叩き伏せられていたそうだ。

ともあれ、その修行を数年間続けたオレは結構強くなった、無論まだまだ未熟ではあるが。

少なくとも大人を含めた村の男でオレに勝てる奴はいなかった、父を除いてはの話だが。

父曰く、オレには武術の才能はそれほどないが、同時にオレの身体には無限の可能性があるらしい。

無限の可能性、何とも抽象的で曖昧な表現であろうか、オレが余り理解できていないのに気付いたのか、父は直ぐに噛み砕いた説明をしてくれた。

「お前が強くなるには人の何倍もの努力が必要じゃろう、しかしお前は努力すればするだけ強くなる！！ 険しい道のりじゃが、諦めなければいずれば武の頂にとどくやもしれん！」

よつするに、オレの力の限界は天井知らずだが、オレの上達速度は他の人と比べて非常に緩やか、ということらしい。

男に生まれた以上、誰よりも強くなりたいという欲求は人並みにある。その可能性がオレにもあると言うのなら、努力しないわけがないだろう。

険しい道を約束された将来に、漠然とした不安を覚えつつも、日夜修業に明け暮れる日々は続いた。

その頃、父は不治の病を患い床に臥していた。

発症から数ヶ月、病は恐るべき速さで父の身体を蝕んだ。いつしか足腰は衰え、修業どころか立つこともままならなくなった父は、一日のほとんどの時間を布団の中で過ごすようになっていた。

父はオレの修行を最後まで見れないことを非常に悔いていた、父にとってオレは息子であると同時に最初で最後の弟子でもあった。

そしていよいよ命が尽きようという時に父はオレに言った、

「カイジよ……武の頂を目指したくば……我が師…武天老師様を訪ねろ。

必ずや…お前の力に……なってくれるはずだ。

父は…草葉の陰から…お前を……見守ろう……」

物心つく前に母を亡くしたオレにとって唯一の肉親であった父はこうして逝った。

人望のあった父の死に村の人たちはとても悲しみ、村を挙げての葬儀が執り行われた。そして父の亡骸は村全体を見渡せる丘に埋められた。

斯くしてオレは父の遺言を胸に村を旅立った。

武の頂はオレの夢であり、亡き父の夢でもある。  
絶対に叶えてみせる。

まずは遺言に従い、父の師であり、武術の神といわれる武天老師様を探そう。

オレは武天老師様の情報を求めて武の祭典、天下一武道会が行わ

れるパイヤ島に向かった。

そこで自分の人生を大きく変えることになる人物と出会つとも知らずに。

13才 旅立ち（後書き）

母親は主人公が生まれてすぐ死んでいます。







|| || || || || || || ||

試合会場に近づくにつれ妙な歌が聞こえてきた。

「歌？ 武術の大会のはずだが……」

およそ武術を競う大会に相応しいとは思えない歌だ。

不思議に思いながらも会場へ急ぐ。

会場に着いたオレの目に飛び込んできたのは、武舞台の上で踊る妙な老人と自分と同年代か少し下くらいだと思われる尾を生やした少年だった。

「（な、なんだあの2人組は！？ ぶ、武術家なのか！？）」

呆然とするオレをよそに歌い踊り続ける妙な2人。

『オそろっちゃうぜ村祭』

ハイハイカモン

おいらのトラクター 』

勘にさわる歌を極力聞かないようにしながらその様子を眺めていたオレは、彼らの動きに妙な既視感を覚えた。

(似ている…父の動きに……)

彼ら、とくに老人の踊りの所々に在りし日の父の幻影が重なった。

昔から踊りと武術には密接な繋がりがあるというし、偶然とは思えない。

『センキューー!! センキューー!!』

(そしてあのウザさも父に通ずる所がある……まさか……!)

『だっ第5試合はじめーっ!!……!』

いつの間にか踊りは終わっていたようだ。

オレは武舞台の上を食い入るように見つめた。

自分の予想に確信を得るために。

## 闘いの空気

結論から言えばオレは確信を得ることができた。

妙な老人改め、ジャッキーさん、そしてその対戦相手であるクリンという少年からも父の動きと似た部分が見えた。

父の武術は武天老師様がひらく流派、亀仙流を基本としている。

その動きと似ているということはつまり、彼らも亀仙流の関係者である可能性が高い。

しかも2人はとんでもない達人だった。とくに老人の方は父に匹敵する実力を持っているように感じる。

オレは自分の心が高揚するのを感じた。

今の自分では到底敵わない相手、でも試してみたい、闘ってみたい。

自然と足は選手の控え室にむかっていた。

自分の暴走に気づくほどオレの頭は冷静じゃなかった。

〃 〃

( ジャッキー Side )

執拗に正体を探ってくるヤムチャとかいう青年を追い払い

控え室に戻ったワシを待っていたのは、やたらと鬨気を撒き散らす少年だった。

「(全く最近の若いのは…)(ワシに何かようかの?)」

少年は答えない、見る限り悟空やクリリンとさして変わらぬ外見だが、その目から正気の色はうかがえない。

「(やれやれ…)(サインなら後にしてほしいんじゃが? それとも写真かの? それな「武天老師殿とお見受けする」ムウ… : 失礼な奴じやのう」

こちらの言葉を無視して少年は続ける。

少年は俯き気味だった顔をあげた、どこか見覚えのある顔つきだった。

「手合わせ願いたい」

スツと少年は構えた、その構えはかつての弟子によく似ていた。

「（あの構え……なるほどのう……）いいじゃろう、我が弟子に代わり、この武天老師がお主を正気に戻してやるう」

ワシの言葉を聞き終わらぬうちに少年は弾丸のように飛びかかってきた。

〓 〓

(カイツジSide)

気がつくと辺りは夜になっていた、どうやらここは武道会場の医務室らしい。

そしてオレの眠るベッドの傍にはサングラスをかけた老人が立っていた。

「ふむ、正気に戻ったようじゃの」

その声を聴いてまどろんでいた意識が一気に覚醒する。

「そ、その声は武天老師様！？その姿は一体……」

「うむ、これがワシの普段の姿じゃ。武術家ジャッキー・チュンは弟子たちを騙す仮の姿じゃ」

老師様曰く弟子たちの向上心を伸ばすためらしい

「奴らは未熟じゃからの……、そしてそれはお主にも言えることじゃ、カイジよ」

「な！？なぜオレの名を！？」

「ほっほっほ、お主の父カイドウの若い頃にそっくりじゃ、わからぬはずなかるうて」

父は以前武天老師様にオレが生まれたことを報告したことがあるらしい

それからオレは父の遺言に従い老師様を訪ねたことを説明した。

老師様は弟子入りを快く受け入れてくれた。

父の死を知った老師様は「どいつもこいつも師より先に逝きおつて……………」と寂しそうに呟いていた。

オレが暴走した理由も教えてもらった、

どうやらオレは老師様とクリリン君との鬪いの気にあてられたらしい。

「鬪いの空気にあてられ我を失うとは情けない!! お主はまず精神修行をみっちり積むことから始めよ!!……!!」

「はい!!… よろしくお願いします!!……!!」



そんなことをしている内にいつの間にか随分と時間が経っていたらしい、

老師様は時計を見て驚いて、

「おっと、もうこんな時間か。連れを待たせてるんじゃない、そろそーじいちゃーん！ーん！！！！オラもう背中と腹がくっついちまいそーだぞ！！！！」……行こうかの」

医務室に入ってきたのは、あの尾を生やした少年だった。

少年は不思議そうな顔で尋ねてくる

「おめえ誰だ？」

「オレはカイジ、新しく武天老師様の弟子になった者だ」

「むてん……？ ああ、亀仙人のじつちゃんのことか、オラは悟空！！ 孫悟空だ！！！！ よろしくな！！！！」

## 聞いの空気（後書き）

ランチがあるのでギャルを連れてこいとは言わない。

## 鉄人カイドウ

老師様に食事に誘われたので、是非ともオレはついていった。例によって無一文であるオレにとっては非常にありがたい話だ。

老師様のお連れさんは皆若く、初対面のオレを歓迎してくれるくらい気の良い奴らばかりだった。

とくにクリリンとヤムチャとは武術に関する話題が尽きなかった、2人の武術に対する真摯な姿勢には共感を覚えた。

また、クリリンがオレより年上だということにはひどく驚いた。思わず小さい、と呟いてしまい睨まれた。スマン

ブルマさんはとてもハキハキした人だ、村にはいなかったタイプの女性なので戸惑った。そもそも村に若い女性なんていなかったのだが。

でも話してみるととてもいい人で話している内に、見たこともない母の影を重ねてしまい、少し泣きそうになった。

ウーロンとプーアルは面白い奴らだった、変化とかいう技で色々なものに化ける様はまさに圧巻。

ただウーロンが

彼女はいるのかとか、

女性経験はあるのかとか

やたら下世話なことを言ってくるのが鬱陶しいことこの上ない。何度も言うが村には若い女性なんていなかったのだ。

そして悟空だが、

実はまだ話しかけていない、話すチャンスがないのだ。

というのもコイツ、食べるのをやめないのだ。

レストランに入って1時間、何かに憑かれたかのように食い続けている。

店のオーナーは呆然としており、食事代を払う老師様は顔が青ざめている。

オレも結構食べる方だが、これはどう見ても異常だ。

50人前は食べているんじゃないか……。

店の食材が尽き、ようやく悟空の食事が終わったところで、老師様はあらためてオレの紹介を始めてくれた。

「こやつはカイジ、かつてワシの弟子だったカイドウの忘れ形見じゃ」

「カイドウ!? カイドウって、あの鉄人カイドウですか!?!」

クリリンがやたらでかい反応を示す。

オレの父親はそんなに有名人だったのか?

オレの様子に気づいたのか、ヤムチャが気を利かしてくれ、父さんの逸話を語りはじめた。

「オレも知っているぞ、鉄人カイドウ……なんでもある村を襲った岩なだれをその身一つで受けきり無傷で生還したことからつけられた異名らしい……」

「岩なだれを生身で!? どんな神経してんのよその人!?!」

ブルマさんの言うことがもつともだ、およそ常人の理解を超えている。自分の父親ながら信じられない…。

「鉄人カイドウは武天老師様の弟子だったのか……やっぱり武天老師様はすごいや！」

クリリンが尊敬の眼差しをおくる、

老師様はもつと敬えと言わんばかりに得意気な表情だ。

そんな話をしていたら今まで黙っていた悟空が突然立ち上がった。

「おめえつええんか！！　なあなあオラと闘ってみねえか！！」

名案だと言わんばかり満面の笑みで提案する。

「闘つって孫くん！？　さっき武道会が終わったばかりじゃない！！」

驚き呆れるブルマをよそに悟空はカンペキにやる気になっている。一方オレも満更でもない気分だ。

武天老師様の弟子で天下一武道会準優勝…、ぜひとも闘ってみた

い。

すると老師様がほっほっほと笑いながらこう言った。

「おもしろそうじゃの、しかし今日はもうおそい、明日の朝武舞台借りてやってみるのはどうじゃ?」

それもそうだと上がっていたテンションを一旦落ち着ける、時刻は既に10時を回っている。  
外は真っ暗で電灯がなければ互いの顔が見えないほどだ。

「うん…わかった!! 明日やろう! 約束だかな!!」

悟空も納得したようだ。

こうしてオレは明朝悟空と対戦することになった。

V S 孫悟空

武舞台の上でオレと悟空は向かいあっていた、自分でも驚くほど心が落ち着いてるの感じる。

悟空は悟空でやたらニコニコしている、闘うのが楽しみで仕方がないといった表情だ

「随分楽しそうだな、悟空」

「へっへっへ、おめえがどんな闘い方するのか早く見てえぞ！」

「こちとら初の実戦だ、あまり期待してくれるなよ」

オレは狩りなどで動物と闘ったことはあるが、人、しかも同じ武術家と闘うのは始めてのことだ。

「ウエッホンー!!」

老師様が咳払いをして皆の注目を集める。



「ルールは天下一武道会と同じじゃ、急所攻撃は禁止で、10カ  
ウントKOかリングアウト、または相手にまいったと言わせたほう  
の勝ちじゃ。……………では両者用意はいいかの？」

「いいよ」

「いつでも」

「では……………始め……………!!!!」


まず仕掛けたのはカイジ、開始の合図と同時に飛び出し悟空の側  
頭部めがけて蹴りを放つ。

「速い……………!!!!」

「えっ！？ なにっ！？」

驚くのも無理はなかった、カイジの蹴りの速度は大会優勝者であるジャッキー・チュンのそれよりも速く見えたのだから、ブルマにいたってはその影すら見えていない。しかし、

バシイイイイイン……！！！！

乾いた音が辺りに響く、それはカイジの蹴りが悟空の手のひらで止められた音だった。

「……なっ！？」「」

音にならない驚きの声がもれる。

悟空が素直に蹴られることはないだろうと誰もが思っていたが、まさか片手で止めるとは想像していなかったのだ。

「（悟空のやつ昨日のワシとの試合でまた一段と腕を上げたようじゃの、あの速度の蹴り、以前のやつなら受けれなんだ）」

「シッ！……！！」

すかさずもう一方の足で蹴りを放つカイジ、その顔に動揺は見られない。

悟空はそれを上体を大きく反らすことで躲し、その勢いを利用したバク転で一度間合いを広げた。

5 mほど間合いをあけた状態で悟空が口を開く。

「ひえ〜！！ たまげたスピードだなあ！！ オラもうちよいでもらいそうだったぞ！！！！」

「よく言う、お前のほうがよっぽど速いじゃないか」

悟空とカイジはニツと笑いあう、まだまだ小手調べということを互いに理解している笑みだった、

「じゃあ今度はオラの番だね、いくよ！！」

言うやいなや地面を蹴り、弾丸のようなスピードでカイジに迫り機関銃のような拳の嵐を放つ悟空、その攻撃速度もやはり昨日の悟空の比ではない。

だがカイジも負けてはいなかった。

「あれは……、避けているのか!？」

拳の弾幕の中を少しずつ、だが確実に悟空へと近づいていくカイジ、その顔にダメージを受けた様子は無い、

「やはり親子よのう、あの闘いかた父親そっくりじゃわい」

カイジの父・カイドウを知る武天老師は、かつての弟子の面影を強く残す少年を見てほくそ笑む。

「どういうことですか武天老師様!？ 鉄人カイドウはその強靱な肉体で名を馳せた武術家じゃ……」

何か知っている様子の武天老師にクリリンが興奮した様子で訊ねる。

その顔にはカイジの想像以上の実力に対する驚きが浮かんでいる。

「身体の頑強さなど飾りにすぎん、ヤツの本当の戦闘スタイルは常軌を逸した回避能力と鋭い蹴り技を主体とした亀仙流の亜流、名づけて……」

パシイイイイイン……！！！！！！

再び響く乾いた音、しかし今度の蹴りは、

「カイセン流じゃな」

悟空の米神を捉えていた。

## 決着

「イテテテ……、やるなあカイジ」

カイジの蹴りで武舞台の端まで吹き飛ばされた悟空はよろよろと立ち上がった。

さすがの悟空でもあれほどの蹴りを食らえばダメージは避けられない。

しかしながらその顔にうかんでいるのは焦りではなく、満面の笑みだった。

今まで見たこともないタイプの武術家であるカイジと闘うのがよほど楽しいと見える。

一方のカイジも喜色満面といった表情だ。

カイジは己の武術家としての心が喜びに打ち震えるの感じていた。

先程の回避能力、そして悟空を捉えた蹴りは正真正銘カイジの全力だった。

それを食らいながらも立ってくる悟空を見てカイジは他者と互い

の武を競い合うことの素晴らしさを初めて知るのだった。

トンッ、トンッ

悟空はおもむろにその場で小刻みにステップを踏み始めた。

何かを確かめるようにしばらくそれを繰り返したあと、

悟空は再びニッと笑った。

「おめえの本気、見してもらったかな……………今度はオラのとっておきを見せてやる！！！！」

言葉と同時に飛び出かした悟空は武舞台上を縦横無尽に動き回る。

「クッ！！！！（何が狙いだ！？）」

悟空の意図が読めず、武舞台中央でその姿を必死に目で追うカイジ。

それを嘲笑うかのように徐々に徐々にスピードを上げていく悟空。

いよいよカイジの目でも動きを捉えきれなくなってきた時、突如悟空はその姿を武舞台上から消した。

「消えたっ!?!」

直後背後に殺気を感じたカイジは、その方向に蹴りを放つ。

しかしその鋭い蹴りが切り裂いたのは悟空の残像だった。

「っ!?! (この技は!?!)」

ジャッキー・チュンとクリリンの試合を観戦していたカイジはその技 残像拳には見覚えがあった。

クリリンの二の舞に遭わぬようさらに半回転して背後の本体を捉えるべく蹴りを放つ。しかし、

「また残像だっ!?!」

捉えたのはまた残像、

決勝戦を見逃したカイジは悟空が放つ多重残像拳の存在を知らなかった。



「じ、悟空はっ！！？」

慌てて悟空の姿を探すカイジ、しかしやはり武舞台の上にその姿は見当たらない。

「空だ！！！」

クリリンが空を見ながら叫ぶ、その視線の先には確かに悟空がいた。

何かを包むように両手を腰の辺りに構えるという一見奇妙な体勢でこちらに落ちてくる悟空をカイジは戸惑いがちに見ている。

（何だあの構えは？）

空中の悟空が叫ぶ、

「これがオラのおきだあ！！！！波ああああー！！！！」

悟空の両手から放たれる眩い光、

視界いっぱい広がる光を見ながらカイジの意識は遠のいていった。

## 更なる高みで

目を覚ますと見覚えのある景色が広がっていた。つい昨日見た景色だ。

どうやらまた武道会場の医務室に厄介になっただらしい。

まさか2日連続で気絶するはめになるとは思わなかった。

傍に置いてある時計を見れば時刻は10時すぎ、悟空と闘っていたのが7時頃だから、オレは3時間ほど気絶していたようだ。

辺りに人の気配はない、まさか置いてきぼりということはないと思っので、オレは皆をさがすべく医務室をあとにした。

〃 〃

「お、気がついたか」

武道会場の入り口には悟空以外のみんなが揃っていた。

「悟空は？」

「もう飛んでっちゃったわよ。ほらあそこ、見える？」

ブルマさんの指さす方向を目で追うと、遠い雲の隙間にどんどん小さくなるオレンジ色の胴着が見えた。

「あれが筋斗雲……」

心の透きとおった者のみが乗ることを許される、仙人の雲 - - 筋斗雲、話には聞いていたが実際に見てみるとますます不思議な乗り物だ。

話を聞くと悟空は祖父の形見を探す旅に出たらしい、

オレが目覚めるのくらい待てなかったのか。

(……薄情なやつめ)

何とも微妙な気分になっていると、クリリンが話しかけてきた。なんでも悟空から伝言を預かっているらしい。

「オラは今よりうんと強くなるからカイジももっともつと強くなれ！！　そんで絶対もつかい闘おう！！」だってさ、悟空のやつすげえ楽しそうだったぜ」

その言葉に一瞬あっけにとられる。直後に笑いがこみ上げてきた。

「たった1日の付き合いで随分と気に入られたもんだな」

「まあ悟空は前から変なヤツだからな」

「すつごく強くなってたけど、頭の方はあんまり成長しなかったみたいね」

この中では付き合いが一番長いらしいウーロンとブルマの言葉で辺りは笑いに包まれた。

そんな中オレは更なる高みで、

より武の頂に近いところだ、

悟空と再び闘うことを心に誓った。

||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||

オマケ

ブ「あっ!!!」

ヤ「どうしたんだブルマ?」

ブ「……………ない」

ブ「ない? 何か無くしたんですかブルマさん?」

ブ「……………飛行機のカプセルが……………ない」

「「「「「えっ」「」「」」

亀「な、何をしとるんじゃお主は!!」

ク「そうですよ!!ボクたちどうやって帰ればいいんですか!!」

ブ「う、うるさいわね!! 美人にだって失敗はあるわよ!!  
そうだまだカイジ君の飛行機があるじゃない!!」

カ「えっ? オレここまで海を泳いで来たんで乗り物なんて持つ  
てませんよ?」

「「「「「エッ?」「」「」」

聖地カリンへ（前書き）

後書きを読んでくれるとありがたいです。

時系列のズレに関する言い訳が書いてあります。



## 聖地カリンへ

悟空とカイジの試合から2週間が過ぎた。

無事に武天老師への弟子入りを果たしたカイジだったが、現在彼の姿はカメハウスにない。

亀仙流の修行を数年前から続けていたカイジは身体能力に関しては悟空やクリリンに勝るとも劣らないほどで、武天老師からしても特に教えることはないという状態だった。

しかしつい最近まで故郷の村から一度も出ることのなかったカイジには実戦経験が皆無と言っていい程なかった。

悟空との試合をみてそれに気づいた武天老師はカイジに一枚の地図を渡した。

「残念じゃがワシではあまりお主の力になれないようじゃ。」

さらに強くなりたくばそこに向かうといいじゃろっ、とっておきの修行場じゃ。

そこに行けば実戦経験はもちろんのこと、お主の精神的な弱ささえなんとかなるやもしれん」

渡された地図には小さな文字で「聖地カリン」と書いてあった。

〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃

「この辺りかな……………」

武天老師にもらった地図を頼りに旅をしていたカイジは、2週間かけてようやく目的地付近と思われる森の入り口に辿りついた。見上げると天までとどく巨大な塔が見える。

「あそこに行けということか……………」

小さく呟いてカイジは深い森に足を踏み入れた。

カイジにとってこの2週間は驚きの連続だった。

見たこともない生物や景色、

食べたこともない料理、

これらの経験だけでもカイジにとってこの旅は実りのあるものだと  
言えた。

もちろんその間も鍛錬を欠かさない、普段と異なる環境というものはカイジの修行に良い刺激を与えていた。

しかしそんな旅の中、カイジは度々物足りなさを感じていた。

確かに花は美しい、

しかし彼らは拳を放つことは出来ない。

大地からは雄大な生命の息吹を感じる、  
だがそれらが人の形を為し自分に襲いかかってくることはない。

頬を撫でる風が気持ちいい、でも暴風のような悟空の拳の弾幕を抜けるのはもっともっと刺激的な時間だった。

カイジはどうしようもなく闘いに飢えていた。

悟空との試合で互いの武を競い合うことの楽しさを知ったカイジには、それまでの日常がどうにも退屈なものに思えて仕方なかった。

この感情こそ武天老師が危惧していたカイジの危うい一面だった。彼は武道会場で目にしたカイジの暴走状態を決して楽観視していなかった。

これまで俗世間から離れて育ったカイジの武に対する気持ちは、刺激的な世界に触れることで半ば暴走状態に陥っていたのだ。

それを見抜いた武天老師は、放って置けば私利私欲のために力を奮う暴徒になりかねないと考え、己のもう一人の師であり人の心に関する深い知識を持つ仙猫カリンに出来たばかりの弟子を託すのだった。

|||||

森の中を高い塔に向かってひたすら歩くオレはある異変に気付いた。塔に近づくとつれ妙な匂いが強くなっていたのだ。

「これは……火薬の匂いか？」

更に森を進むと匂いの原因と思われるピストルの薬莢や戦闘機の残骸といった物も見つかった、  
確かな戦闘の跡にオレは自分の闘争心に火がつくのを感じた。心の内で歓喜の声をあげながら警戒を強める。

52

塔のふもとから少し離れた位置でオレは警戒網に引っかかる微弱な気配を感じた、数は2つ。

オレは本能の赴くまま矢のように飛び出した、

標的との距離を一気に10mまで縮める。

相手もようやくオレの接近に気付いたようだがもう遅い、

オレはそのから空きの頭に渾身の踵落としを

「あれっ？おめえカイジじゃねえか」

叩き込む寸前に、標的の一人 孫 悟空が発した言葉を耳にし、無理矢理攻撃を中断した結果、不様に地面を転がることとなった。

## 聖地カリンへ（後書き）

補足

原作だと天下一武道会終了から悟空がカリンに着くまで

わずか2日しか経ってません。

筋斗雲に乗る悟空に対して徒歩のカイジが2日でカリン塔に行くのはムリがある。

しかしどうしてもここで悟空と合流してカリン様に会っておきたい  
！！

ということので2日を2週間に延ばすことにしました。

元からカイジとの試合で悟空の出發も1日遅れてるしいいかと  
思ってやりました。

どうもすいません！！

## カリン塔のカリン様（前書き）

今回から少しずつ文量を増やします、書き方も少し変えました。

それにもなって更新速度もおちるかもしれません。

試行錯誤しながらやっています。



## カリン塔のカリン様

「はははっ！！ なにやってんだおめえ？」

「つつつるさい！！ 咄嗟のことだったんだからしょうがないだろー！！」

「はははははっ！！！！ ありっ？ そっぴや何でカイジがここにいるんだ？」

「悟空こそ、じいさんの形見さがしに行ったんじゃないのか？」

しばらくしてようやく笑い終わった悟空とオレ、そして頭に羽根飾りをつけた少年 - ウパの3人はお互いの状況を説明しあった。

この2週間退屈な旅をしていたオレに対して悟空は、首が吹っ飛んでも動く人間やら、体がブヨブヨで攻撃がきかない化け物、あげくの果てには超能力を使うオカマとかいうふざけた存在と闘っていたらしい。しかもそいつらは世界一の軍隊 - レッドリボン軍と呼ばれる存在らしい。

「何でそんなに狙われているんだ？」

「あいつらもドラゴンボールを狙ってるんだ！」

「ドラゴンボール？」

「これだよ」

悟空の手の中には星が四つ入った黄色い球があった。  
何でもこのドラゴンボール、世界に7つだけ存在して全て集めるとあらゆる願いを叶えてくれる龍が出てくるらしい。にわかには信じられないが世界一の軍隊が欲しがってるというぐらいだから事実なのだろう。

「なんでお前はそんな物集めてるんだ？」

「この星が四つ入ったやつがじいちゃんの形見なんだ、でも今はウパの父ちゃんを生き返らすために全部集めようとしてるんだ！」

ウパの父親はついさっき襲われたレッドリボン軍からの刺客によって殺されてしまったらしい。視線を移せばすぐそばに何かを埋め

たような土の山がある、おそらくその中に眠っているんだろう。一瞬一ヶ月前に死んだ父の顔が頭の中によぎりもの悲しい気持ちになる。

「ん？ どうかしたかカイジ？」

「いや、何でもない。それでこれからどうする気なんだ？話を聞く限りその桃白白とかいう殺し屋また来るんだろう？今のままじゃ勝てないだろ。」

「大丈夫だ！！ この塔のてっぺんに行けば強くなれんだ！ そ  
うだろウパ？」

「はいっ！！ カリン塔のてっぺんには仙人様がいて力を何倍にもしてくれる薬をくれるって昔から言われているって父上が教えてくれました！！」

途方もない話だがそれが本当なら武天老師様がオレをここに向かわせた理由も説明がつく。力を何倍にもする薬があるかどうかは疑問だが、それを持っているといわれる仙人には興味がある、亀仙人と呼ばれる武天老師様はとても強かった、もし本当に仙人と呼ばれる存在がこの塔に住んでいるならぜひ闘ってみたい。

「オレも登っていいか？ 少し興味がある」





ほどタフなやつだ。

「こっちじゃ上まであがってこい」

しばらくするとこの建物の上の階から声がした。悟空はすぐに声の下に向かったようだが、まだ動けそうにないオレはしばらく休んでから行くことにした。

「おいっカイジ、起きろって！」

オレを呼ぶ悟空の声に従い目をあける、どうやら眠っていたらしい。さすがに塔にしがみつきながらじゃ十分な睡眠をとれていなかったようだ。悲鳴をあげる体に鞭打ちなんとか身を起す。

「ほらっ、これ食べえ！」

そういつて渡されたのは小さな豆。

「なんだこれは？」

「これを食べれば元気になれんだ、オラもさっき食ったから本当だぞ！」

確かにさっきまでオレほどではないが疲れきっていたはずの悟空がここまで元気なのはおかしい、食べてみる価値はありそうだ。

変化は劇的だった疲れきっていたはずの体には活力があふれ、ほんやりとしていた思考は一気に鮮明なものに、おまけに空腹感までなくなっている。すさまじい薬だ。これほどのものを作れるというなら仙人と呼ばれるのも頷ける。

「起きたのならお主もあがってこんかい」

再び上から声が降ってくる、この声の主が仙人か。

どのような人物なのか、オレは期待に胸を膨らませながら階段を上った。

上の階でオレたちを待っていたのは杖を右手（右前足？）に持ち2本足で立つ猫だった、他には誰もいない。

(まさか…この猫が…?)

一瞬呆然とするオレ。そんな内心を悟ったのかその猫のオレへと向ける視線が一気に鋭くなった。

ゾクッ

「っ!?(なっ、何だいまのは!?)」

一瞬で心の隅から隅まで全てを見抜かれた気がした。いや事実見抜かれたのだろう。オレの前に立つ仙人の面白そうにゆがめられた顔が何よりの証拠だ。

「フウム、お主なかなか面倒なものを飼っているようじゃのう、いやむしろそちらが本質かな…:~?」

言ってる意味がよくわからない、面倒なもの?オレの本質ってなんだ?

「あなたの…名は…?」



「わしはカリン、仙人のカリンじゃ」

なるほどさすが仙人を名乗るだけはある、その小さな体からは武天老師様を超える胆力が感じられた。

そんなことを考えていると突然悟空がカリン様に飛びかかり、その杖で打ち払われた。

「何をしてるんだ悟空？」

「あいつが持つてる壺にすごい薬が入ってるんだ！ でもあいつが飲ましてくれねえんだよ！！」

「当たり前じゃ、ありがたい薬をそう簡単に飲めると思っな」

確かにその通りだ、しかしこちらにも譲れないものがある。時間もそれほどあるわけでもない、いつまた件の殺し屋が現れるかわからないのだから。

「悟空、手を貸すか？」

「ほっほっほ、わしはかまわんよ2人できて取れるものならな」

「いやいらねえ!! オラゼツタイ一人で取ってやる!!」

かくしてカリン様との長い鬼ごっこが始まった。

## 才能（前書き）

少しだけ書くのに慣れてきたかな？

## 才能

悟空はこの2週間で相当力をつけていた、動きを見ればわかる、オレと闘った時とは段違いのスピードだ。

また随分と差を広げられたらしい。

しかしそんな悟空をもつてしてもカリン様を捉えることはできなかった。

オレはこと回避に関しては悟空をも凌ぐ自信がある。そんなオレから見てもカリン様の身のこなしは常軌を逸していた。

カリン様は速い、単純な動きはそこまででもないが、何より状況判断の速さがずば抜けていた。

悟空が飛び出すために足に力を入れた瞬間にはすでに動き出し、飛び出した時にはその体は手の届かないところまで逃れている。

悟空も緩急をつけてフェイントをいれたり、残像拳を使ったりと工夫をこらしていたが、心を読むと言われるカリン様には通じなかった。

その間オレもただぼーっと見ていたわけじゃない。オレはオレで

2人の動きから盗めるところは盗もうと躍起になっていた。特にカリン様の動きはオレの武術に通ずるところがあるので、強くなるためには一瞬たりとも見逃すことは許されない。

そうこうしてる間に悟空がペタリと倒れこんだ。

「ハアッ…ハアッ…」

「なんじゃもうバテたのか？」

「ムリもない、ここは下よりずっと空気が薄い」

標高何千メートルというところで動き回っていたのだ、疲れない方がおかしい。

「ハアッ…クソッ…、なっ、なあここまで登ってきたのオラたちがはじめてか…?」

「いいやお前たちがはじめてじゃない。3百年ほど昔にもう1人だけのぼれたやつがおった」

3百年、たしか武天老師様の年齢もそのくらいだと聞いた、おそ

らく老師様は以前カリン様の下で修行を積んだのだろう、そしてオレをここに導いた。

「そのもう1人だけのぼれたというやつは、お前の師匠じゃ」

（やはりそうか！）

「え！？ それどういうこと！？」

「お前の動きを見ていればわかる、お前の師匠は武天老師じゃろ」

「じゃあ亀仙人のじいちゃんも昔ここにきたのかっ！？ ここでふしぎな水を飲んでもっと強くなったのかっ！？」

「そっじゃ」

すると悟空がぐるりとこちらを振り向いた。

「カイジは気づいてたんか！？」

「オレは武天老師様にここに行けと言われたからな、おおかたの

予想はついてたさ」

「ふん、あやつめ、人のことを勝手に話したうえに面倒なやつまで寄越しおつて。お主のことはこの小僧の相手が終わった後にしてやる、待っておれ」

「……………」

オレとカリン様の言葉に呆然とする悟空、それほど衝撃的な話だっただろうか？

「ひょっとしておまえ…すぐくらいやつなのか…？」

「やっとわかったかこれからはカリン様とよべ！」

悟空はカリン様がとんでもない存在だということによつやく気づいたようだ。まああの外見じゃ騙されても仕方がないとは思つが。

ところで、武天老師様がかつてこの塔を登りその水飲んだというなら少し気になることがある。

「質問してもいいですか？」

「なんじゃ？」

「武天老師様はその壺を奪うのにどれほどの時間かかりましたか？」

「あつ！ オラもそれ気になるぞ！！」

カリン様はすつと3本の指を立てた。3日、いや3週間か？

「すげえ3分か！？」

「いや3年じゃ」

「さ、3年っ！？」

武天老師様が3年、カリン様の凄さを見せつけられた気分だ。





そしてそれは同時にオレの唯一のアドバンテージが失われる瞬間でもある。ムダな動きがなくなった悟空と、オレはまともに闘える気がしなかった。

自分に才能がないことをオレは本当の意味で理解していなかった。武術を始めてから今まで、自分と比較する相手なんていなかったし、村ではオレに敵うやつなんて大人でもいなかったから才能の有無なんて関係ないと思っていたのかもしれない。

まざまざと見せつけられる。悟空はきつと天才なのだろう。

この2週間、オレは少しでも強くなったのだろうか。

オレが1歩進んでいる間に悟空はいったい何歩進むのだろうか。

3つの頃から始めた武術、誰よりも努力をしてきたつもりだ、悟空よりも。  
空よりも。

全てを捧げてきた、5才になった頃にはすでに武術のことしか考えていなかった。

8才で自らの非才を伝えられてもめげなかった。

人生のための武術は気づけば武術のための人生になっていた。

それでも努力は必ずしも報われるとは限らない。

オレは本当に武の頂にとどくのだろうか。

父の亡骸に誓った思いすらばやけてくる。

才能の差というものはオレが想像していた以上に大きく、そして残酷だった。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || ||  
|| || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

(カリん様Side)

「むっ?」

尻尾の小僧に塔をもつ一度登らせてる間にもう1人の相手をしてやろうと振り向くとどうも様子がおかしかった。

「目が濁っているぞ小僧、若い者のする顔とは思えんな」

「.....」

「重傷じゃな、全く面倒な」

「…………おれは…」

「心を読ませてもらうぞ」

面倒なのでやつ声を遮って心を読む。

武術に捧げた人生、報われない努力、才能の有無、亡き父への誓い、見失った己の道

小僧の心の中は暗鬱とした気持ちに満たされていた。今まで描いていた理想と現実の差にどうしようもなく打ちのめされたらしい。

「ふむ、本当に面倒な小僧じゃ。しょうもないことばかり考えおって、人間としてんでなっくらんわい」

せっかくしごいてやろうと思ったのに全くつまらん。



「っ！？ 何ですかこれは!？」

「心を映し出す神の水じゃ、その中に飛び込めば己の内面世界に潜ることが出来る」

「……内面世界……」

「少々荒療治じゃが……歪に育ってしまったお主の心を正すにはちよつとやそつとのことじゃムリそうじゃからの」

カリンにも仙人としての矜持というものがあつた。カイジが実力でカリン塔を登ってきた以上それなりの待遇をするのが800年以上仙人を名乗ってきたカリンのプライドだつた。

「しかし……おれは……」

「ええい！いいから行ってこい!!」

ドガッ

なお洩るカイジに痺れをきらしたカリンは鋭い蹴りを放ち、無理矢理カイジを内面世界に送り出した。



360度どこを向いても何も無い、上を見上げててもオレが通ってきたはずの入り口は見当たらなかった。

「…オレにどうしろって言っただよ……」

「オレと闘えばいいんだ」

突如真後ろからかけられた声に反射的に回し蹴りを放つ、しかしその声の主は上体をギリギリまで反らすことでオレの蹴りを避けた。

「ご挨拶だなあ、オ、オイ……」

不快感を煽るような口調で話すそいつは、ゆっくりとこちらに顔を向けた。オレはその顔に見覚えがあった、ありすぎるほどに。

「……………オレの…顔？」

「よおカイジい、初めまして俺もカイジだ」



オレは目の前にいるオレとそっくりな存在にただただ戸惑うのだ  
った。

才能（後書き）

主人公がナイーブすぎかな、

まあしょうがない。

内面世界の闘い（前書き）

注 この小説はブリチが原作じゃありません

## 内面世界の闘い

対峙する全く同じ姿形をした2人の少年は対照的な反応をしめす。

一方は驚愕に目を見開き、もう一方は愉快げに口角をつりあげている。

夢か幻か、確かな現実であることを後ろ手につねった腿の痛みが訴えていた。

.....

「お前は何者だっ!?!」

「おいおいそりゃねえよカイジい、俺たちはいつつも一緒だったじゃねえか」

「戯言を言うなっ!?!?!」

「戯言じゃねえよ、雨の日も風の日も、どんな辛い時だって共に過ごした、そうだろ?」

目の前のオレにそっくりな男は飄々とした様子で、そしてやはり不快感を煽るような口調でわけのわからないことを言う。

オレは共に過ごした存在など覚えがない、ましてや同じ顔、以前会ったことがあるなら忘れるわけがない。

そこまで考えた時ある事実を思い出した。

今オレはオレの内面世界にいるんだ…

この世界はオレの心を基につくられている、だとすれば目の前のこいつは…、

「オレ自身……なのか？」

ニヤリと笑う相手、

「お前自身……間違っちゃいないな、今はまだ（……）それでいい」

「今はまだ？」

「ああ、今はまだなあ……」

意味深な言い方だがこれ以上答えは返ってきそうにない。話を進める。

「何故お前と闘わなければならない」

「なぜえ？ 聞かなきゃわからねえか？」

嘲るような笑みでこちらを見てくる。

はつきり言って思い当たる節がない、口にすべき答えが見つからず沈黙で返す。

「はっ！ 本当にわからねえとはな、とんだお気楽野郎だぜ」

心底呆れたといった様子で深い溜め息を吐かれた。他でもない自分自身から謂われのない失望の念を向けられるとは、何とも奇妙な体験である。

「お前が全然ダメだからさ、覚悟、誇り、信念どれもこれも脆すぎる」

「……………」

反論が見つからない、ついさっき自分の無能ぶりを痛感したばかりなのに見つかるはずもない。

「身体が泣いてるぜえ、自分の心の脆弱ぶりになあ」

まるで演説するよつにやつは話し続ける。

「もっと動けるのに、もっと闘えるのに、……わかるか？お前じやこの身体を使えこなせないってことだ」

確かに自分が完璧だなんて思っちゃいない、この身体を使えこなせていないのかもしれない、しかし

「俺だつて嫌だ、周りから自分がこんなシヨボくてクソみたいな奴と同じだと思われていると思うと我慢ならねえ！！」

「つるさいつー！！！！！！」

いい加減ガマンの限界だった。

「オレは精一杯努力してきた！！　いつだって自分を限界ギリギリまで追いこんできたっ！！！！　それじゃ足りないっていうのかわ！！！！！！」

「精一杯い？　限界ギリギリだあ？　そんなこと言ってるからダメなんだてめえは！！」

「なん…だと……」

「俺たちに限界なんてねえ、精一杯なんててめえが勝手に線引きしただけだろうが！」

「っ…！！お前にオレの何がわかるっていうんだ！！！！」

「何だっかわかるさ、自分で言っただじゃねえか、オレはお前だつて。普段はお前が表に出てるだけで俺はいつだってお前の中から見ていた」

「表？」

「意識の表層のことさ、今までお前が居た場所、そしてこれからは俺の居場所だ」





回避からのカウンターや技のキレで闘う表のカイジに対して“もう1人のカイジ”の攻撃は荒々しく、お世辞にも洗練されているとは言えない、しかしそれは表のカイジの攻撃より速く、重く、圧倒的だ。

「……………クソッ!!」

苦し紛れに放った蹴りはいともたやすく避けられ、大きな隙さらすことになった。

(ヤバイッ!!)

咄嗟に急所である頭部を腕でガードする。

「……………グッ!!」

ガードした右上段蹴りを無理矢理振り抜かれ、大きく後退する。カイジの瞳には驚愕の色、

「俺の強さに驚いているようだなあ…カイジイ……………」

ニタアと醜悪な笑みを浮かべる“もう一人のカイジ”、間を置かず飛び出す。

再び急接近する両者、繰り広げられる攻防はやはり表のカイジが劣勢だった。

超近距離から放たれる拳と蹴りの弾幕、文字通り紙一重で避ける、今度は苦し紛れの攻撃を放つ余裕などなかった。

必死の様子で避けるカイジとは対照的に“もう一人のカイジ”は楽しそうに笑いながら攻め続ける。かつて闘った悟空も闘いの最中に笑みを浮かべることがあったが、“もう一人のカイジ”が浮かべる笑みからは悟空のそれにはない邪悪な気配が感じられた。

その笑みがカイジの焦燥感をよりいっそう煽る、すでに頭の中は疑問符でいっぱいだった。

なぜこんなに速い？

なぜこんなに重い？

目の前のこいつがオレと同一の存在であるならば、

なぜオレより強い？

ただでさえ攻めこまれている状況で冷静さを失うことは何よりも避けなければいけないこと、しかし混乱の極みにいるカイジには自分の心をコントロールすることは到底できなかった。

武天老師が危惧していた実戦経験のなさが驚異となってカイジに降りかかった瞬間だった。

怒濤の攻めに為す術もなく身体中を打たれ吹き飛ばされるカイジ、何とか受け身をとるがダメージの色はごまかせず、立ち上がることができずに片膝をついた状態で荒れる心を落ち着けようとする、しかしすかさず“もう1人のカイジ”が追撃をしかけてくる、息をととのえる暇さえない。

また一方的な闘いが始まる。

拳や蹴りが肉を打つ鈍い音が真つ白な空間に響く、カイジは体中痣だらけで、顔は腫れ上がり原型をとどめていない、それでも幸か不幸か意識だけは残っていた。カイジに残された最後のプライドが

気絶するのを許さなかったのかもしれない。

“もう1人のカイジ”の蹴りが顎をとらえる、形だけの腕のガードは完全に下がり体中が隙だらけになる。

非情の拳が水月に突き刺さる、たまらず地面に倒れ込むカイジ、しかしその目にはまだ光が宿っており、意識が失われてないことを証明していた。

“もう1人のカイジ”は横たわるカイジに言い聞かせるように語りかけてくる。

「そっぴや言い忘れてたがなあ……、俺はお前の中の戦闘本能そのものでなあ、お前より強くて当たり前なんだよ」

「お前が……使っているのは……武術では……ない……ただの……暴力だっ！！ そんなものに……強さなど……宿らないっ！  
！ 宿るはず……ないんだ……！！！！」

「武術なあ？ 俺は武術家じゃねえ、ただの戦闘者だ。だいたい……今のてめえが武術家を名乗れるのか？」

「……………っ！！！！」

凶星だった、カイジはついさつき自分の才能の限界に絶望し、武術に対する真摯な気持ちを失いつつあった。それを正確に読み取った“もう一人のカイジ”は畳みかけるように大声で叫び始める。

「それでいいさ！！ やめちまえっ！！ 武術なんててめえの足枷にしかならない、そんなもんに囚われているからてめえは強くなれねえんだっ！！！！」

「……………違う」

「何が違うっ！！ 現にお前は、俺たちは！！ 何年もの時間を武術に捧げたっ！！！！」

“もう一人のカイジ”にとって武術はもはや自分の成長を妨げる害悪でしかなかった。

数年前カイジが父より武術を習い始めた頃はそうではなかった、カイジが強くなるうとするのは“もう一人のカイジ”にとってもうれしいことなので、その手段である武術の存在は歓迎すべきものだった。

たとえその成果が微々たるものであったとしても少しでも強くなれているのであれば、不満も押し殺せた。

しかし

「何が残った!! 武術はどうしようもない才能の差を埋めることはできなかつた!!」

孫悟空との邂逅は彼の武術に対する不信感を決定的なものとした、長い時間をかけてほんの少しの成長しか生みださなかつた武術を呪つた、彼もまたカイジと同じように才能の差というものを甘く見ていたのだ。

「武術じゃ……武術じゃ“武の頂”にとどかねえんだよ!!」

「……っ! 違つっ!……!!」

決して許容できない言葉を聞きカイジが力を振り絞り叫ぶ。

自分を貶されるのはいい、しかし武術そのものを貶されるのはカイジにとって決して許してはいけないことだつた、それを許してしまえば武術に生涯を捧げた父カイドウを否定することになる。

ポロポロの体に鞭を打ち立ち上がる、全身が悲鳴を上げる、それでも倒れるわけにはいかない。

「……断じて……違つ……!!」

噛みしめるように、自分に言い聞かせるように、言葉を紡ぐ。

「お前は……はき違えている……“武の頂”とは……強さの頂点と  
いう意味では……ない」

“もう1人のカイジ”の言葉で思い出す、いつの間にか自分も忘れていた父の言葉を。

「そして……武術は……ただ強くなるための……道具なんかじゃ……ない  
……！」

完全に立ち上がるカイジ、痛みからくる全身の震えは治まり、その瞳にはかつてないほどの強い光が宿っている。“もう1人のカイジ”はその雰囲気圧倒され動くことも喋ることもできない。

「確かに武術で得た力は相手を打倒しその上に使われる、でもそれだけじゃない。武術を修める真の目的は、自分を含めたみんなを幸せにすることだ」

綺麗事かもしれない、しかしカイジはこの父の教えを疑う気にはならなかった。

古くは武天老師の師・武泰斗から始まり、武天老師、カイドウを通じて脈々と伝えられてきた教えがまた新たな世代へ受け継がれた



瞬間だった。

「オレにはまだ“武の頂”が一体どんなものなのかはわからない、本当にとどくものなのかもわからない」

もしかしたら“もう一人のカイジ”が言うとおり“武の頂”とは最強の存在のことを言うのかもしれない、しかしカイジは父が、先人たちが追い求めてきたものはそんなものではないと心のどこかで確信していた。

スツと構えをとる、気づけば受けた傷は癒えていた。

ここはカイジの内面世界、この世界での強さとはすなわち心の強さ、父の教えを受け継いだカイジは完全にこの世界におけるイニシアチブを“もう一人のカイジ”から奪いさつていた。

今のカイジはこの世界の神、全てが自由自在だ。

「知りたいんだ、父が、全ての武術家たちが追い求めてきたものが一体何なのか。そのためにもここでお前に負けるわけにはいかな  
い」

放つのは生前父が最も得意としていた奥技、幼い頃一度だけ見してもらったその技は目を瞑るだけで瞼の裏に再生されるほどカイジの脳裏に鮮烈に焼き付いていた。

腰を落としどっしりと構え体中の気を高める、するとカイジの全

身が白く発光し始める。

「行くぞ!!!」

白い光をまき散らしながら突進するカイジ。

「……っ……終わらねえ……終わってたまるかぁー!!!」

“もう1人のカイジ”は気力を振り絞り動きだす、迫り来るカイジに放つの無数の追尾性エネルギー弾、カイジにとっては見たこともない攻撃避けられるはずもない、そう思った、しかし

「疾ときこと風の如く」

カイジの体は急加速しエネルギー弾の壁の前で掻き消えた。白い光の軌跡をたどり上を見上げるとそこには追いつがるエネルギー弾を圧倒的スピードで攪乱し誘爆を誘うカイジの姿。あっという間にその全てを片付け再び“もう1人のカイジ”に迫る。

「クソがつ!!!」

至近距離まで近づかれた“もう1人のカイジ”は先ほどまでカイジを痛めつけていた拳と蹴りの弾幕をお見舞いする。

「徐<sup>しず</sup>かなること林の如く」

ことごとく避ける、完全に死角から放った拳さえ当たらない。焦った“もう1人のカイジ”は元々荒い攻撃がさらにおおざっぱなものとなる、当然それは大きな隙を生む。

「しまっ……!!」

「侵<sup>おか</sup>し掠<sup>かす</sup>めること火の如く」

気づいたときにはもう遅い、襲いかかってくるのは普段のカイジのそれより数段重く、速い攻撃の数々、“もう1人のカイジ”は一瞬でさつきまでのカイジのような姿に。

「……っ……まだだっ!!まだ俺は負けてねえ……!!……!!」

残る全ての力を込めて攻撃を仕掛ける“もう1人のカイジ”。

「フラッシュバスター……!!……!!……!!……!!」





上今回はしたがってやる」

「ああ、わかった」

この世界の闘いで自分が武術を続ける意味を再確認したカイジは、“もう1人のカイジ”がある程度は認めるくらい強い心を手にしていた。

「この世界でできたことが現実でできないはずがねえ、わかってるな？」

「大丈夫だ、問題ない」

「ならいい……」

お互いに話すことがなくなる、一時的に和解したとはいえ基本的に相容れない性格なのだ。

「…じゃあもう行く、じゃあな“もう1人のオレ”」

「キーニだ」

「？」

「俺の名はキーニ、お前のもう1つの名だ覚えておけ」

「もう1つの名…？ それって……」

その言い回しに違和感を覚えどっぴり意味なのか聞こえなかったと  
きカイジの意識は急速に現実世界に引っぱられた。

薄れゆく意識の中、この世界にはいずれもう一度訪れることにな  
りそうだとカイジは確信に誓い予感を感じていた。

内面世界の闘い（後書き）

風林火山……全身の気を高めることで、戦闘力を一時的数段上げる技。

別名：なんちゃって界王拳

人の身でこの技を編み出したカイジの父ちゃんはす

いじり…

P・S 祝・エルシャダイ発売！！！！



## 新しい生き方（前書き）

今回からカイジは少し堅さがとれてきます。

## 新しい生き方

都から遠く離れた田舎の村、時刻は真夜中を過ぎた頃。ほとんどの村人が寝静まる中、村の中心部から少し離れた場所に建てられた家から仄かな灯りがもれていた。

中にはベッドに横たわる片腕のない女性、そしてその傍らに立つ男性の2人、いや男性の腕に抱かれる生後間もないと思われる赤ん坊をいれると3人の人間がいた。

名前は決めたか、と男性が聞く、

「…………お前は？」

男勝りの口調で聞き返す女性、その鋭い目付きや凜々しい雰囲気  
が口調に違和感をあたえない。

もちろん、と自信満々といった様子で答える男性、よほど自分の  
考えた名前に自信があるらしい。

「ははっ…………、私ももう決めてある。私たちの子にふさわしい名  
を…………」



ばしょうがない。

そもそも重要な夢って何だよ、と思い直し頭を切りかえる。

横たわっていた体を起こす、目の前には大きな瓶があった。カリン様がオレを蹴り入れた瓶だ。どうやらカリン塔に戻ってこれたらしい。

体を見てみると、内面世界でボロボロになったはずの胴着が何事もなかったかのようにそこにあった。

内面世界での出来事は現実世界に物理的影響を与えないようだ。

さて、これからどうしようか。

粗方自分の状況が整理できて落ち着くと、これからのことに思考が向かう。

武の頂を目指す、これは決定事項だ。

そのためにも武術の鍛錬、この2つは言わば最低条件。大事なのはその後だ、ただただ鍛錬を重ねてもきつと武の頂にはとどかない。もしそうなら父さんだつてとどいたはずだ。

何か足りない、その何かがわからない。

物？ 経験？ そもそも武の頂とは何なのか？強さの頂点じゃない……気がする。

思考が混乱する、今のオレにはこの問題は難しすぎる、考えるだけで頭がクラクラする。

少し頭を冷やそうと、そばにあった普通の水が入った瓶から柄杓で水を掬い飲む。

よく冷えた水が心を落ち着ける。

「やったーっ！！！！ つぼとつたぞーっ！！！！！！」

突然上の階から聞こえてきた大声に、油断していたオレは飛び上がるほど驚いた。

カランツと音をたてて床に落ちる柄杓。

「むっ？ おーい小僧、帰って来たのなら上に来て挨拶せんかい」

柄杓の出した小さな音を聞き逃さなかったカリン様が声をかけて

くる。

待たせるわけにはいかない。

オレは急いで階段をあがった。

- - -  
- - -  
- - -

「あつカイジ！！ ほらっ！ オラついにカリン様からつぼとつたぞー！」

上の階に行くと、件の水が入った壺を持った悟空が上機嫌で迎えてくれた。

案の定、この短時間でカリン様から奪い取ることに成功したらしい。

「2人とも中々やるのう……、3日で超聖水を手にした尻尾の小僧も、同じく3日で己の内面世界から帰還を果たした目付きの悪い小僧も…あっぱれじゃ」

「3日っ！!?」

オレが自分の内面世界で闘っている間に、現実世界では3日も時が進んでいたらしい。

まさか時の流れがずれているとは…、内面世界にいたのはオレの体感時間では3時間ほど、現実世界では3日…。

もしもう1人のオレ“キーニ”に負けて、長い時間あの世界に閉じこめられていたら………背筋が寒くなった……。

「危なく浦島太郎になるところだった……」

勝ててよかった、心からそう思う。

「なあなあ、そついやカイジは今までどこにいたんだ？ないめんせかいつて何だ？」

悟空が尻尾をゆらゆら揺らしながら不思議そうに訊ねてくる。

「にゃっはっは！ この小僧、カイジもお主と同じように修行してたということじゃよー！」

愉快そうに笑うカリン様、悟空もその説明だけで納得したようである。楽しげな雰囲気誘われて一緒に笑い出す。

そんな中オレはカリン様に初めて名前で呼ばれたことに感動していた。

自分より遥か高みにいる人物に認められたようでたまらなくうれしかった。

- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -

ひとしきり笑ったあと、悟空は自分が急いでいたことを思い出した。

「飲んでいいんだろ!？」

「もちろんじゃ、飲むがよい」

ゴクゴクと豪快にあおる、今のところ変わった様子は見られない。そもそも力を何倍にもする水なんて懐疑的にならざるをえない。

「.....?」



全て飲み干したようだが未だに変化はない、悟空も不思議そうな顔をしている。

「なあ……べつにどつってことねえような気がするぞ……」

悟空が確かな疑問を口にする。

時間差で効果が出るものなのか、それともやはり超聖水なんてまやかしのなか。

「体が頑丈になったとか、頭が良くなったとかは？」

闘いにおいて頭脳はかなり重要だとオレは思う。どんなに体を鍛えても、それをしっかりと使いこなせなければ意味ないし、劣勢の時作戦を考えることもできない。

「体はなんともねえし、頭は…オラよくわかんねえ…」

まあ…悟空に関してはそれを感覚的に理解している節があるので何とも言えないが……。

「そりゃそうじゃろ、超聖水はなんてことないただの水じゃ」

「えーっ！？ひ、ひでえ！オラのことだましたのか！？」

「まあそんなもんだろ、リスク無しで強くなれる水なんて都合がよすぎるしな。」

最初から怪しいとは思っていたからそれほど驚きはなかった。

それにこの3日間は悟空にとっても無駄じゃなかったはずだ、もちろんオレにとっても。

「悟空、どうやってカリン様から壺を奪ったんだ？まさか寝込みを襲ったわけじゃないだろ？」

「オラそんなことしてねえよ！インチキしねえで正々堂々やっただんだ！カリン様すげえ速くて身軽だから、オラめちゃくちゃがんばっ……………あ……………」

どうやら悟空も気がついたようだ。

「やっと気がついたか、カリン塔をのぼったりおりたり…、そしてこのワシからつばをうばうこと…、すべて力を倍増するため…の修業だったのじゃよ」

最初の日、オレが見ていた時は悟空の手はカリン様の体を掠るこ  
とさえなかった。この3日間の修業はまさしく力を倍するほどのも  
のだったのだろう。

「さあ下界において修業の成果をためてこい！」

「ああ！！ ありがとう！！ カリン様！！！」

下界か、オレはどうするかな……

このままここで修業するのも良いかもしれない、いや武天老師様  
に報告に行くのが先か…

いずれにしてもどうにかして武の頂に辿りつく方法を探さなけれ  
ば。

オレが再び思考の渦に吞まれようとしていたとき、今まさに塔か  
ら下りようとしていた悟空が突如足を止めこちらを向いた。

「何だ悟空？」

何か思いついたようで、階段にかけた足を戻しこちらに向き直る。

「カイジもいっしょにドラゴンボール探しにいかねえか？」

悟空といっしょにか、どうするかな…。

「行くがよい、考えすぎのお主には悟空との旅は良い刺激になる  
じゃろっ」

考えすぎ……、たしかにそうかもしれない。

「それにお主は生き急いでる節がある、その若さでの。人生は長い、目的のためだけに生きるにはな」

オレは生き急いでいるのか…。

武の頂に至ることがオレの目的、そのために生きる人生。

今まではそれでよかった、でも今では味気ないものに感じなくもない。

「一区切りついたらまた来るがよい、そのときは鍛えてやるわ」

ここまで言われてしまったら行くほかない。それに悟空とともに行けば得がたい経験を数多くできる気がする。

「わかった、オレも行くよ」

「やったー！ きつと楽しいぞー!!」

「にゃっはっは！ そっじゃお主に良いものをやるっ。少し待っておれ」

そう言ってカリン様は塔の端に歩いていく、いったい何をくれるというのだろう。

「筋斗雲よーい!!!!」

「「きつ、筋斗雲!?!」」

空のむこうから現れたのはとんでもなく大きな黄色い雲。

「すげえ〜！ でっかい筋斗雲だ!!なんでカリン様も筋斗雲もってるんだ!?!」

悟空が大はしゃぎしながら訊ねる。自分のものより数十倍、数百倍の大きさをもつ筋斗雲に興味津々といった様子だ。

「お主の筋斗雲は元々ワシがその昔武天老師にくれてやったもので、ほれカイジすぎなだけもってけ」

とカリン様は言うが、筋斗雲は心の清い者のみが乗ることを許される雲、はたしてオレに乗れるのか？

もし乗れなかったら地面まで一直線、笑えない……………。

「そのようなことにはならんよ、お主なら乗れるはずじゃ」

どうやらまた心を読まれてしまったらしい、いや怯えが顔に出たのか？

とにかくカリン様が保証してくれたんだ信じてみよう。

恐怖を振り切るように床を気持ち強く蹴って飛び移ってみる。

ポフッ

足が雲に触れると同時に一気に沈んだ、と思ったら途中で止まりオレの体は柔らかな感触に迎えられた。

「の、乗れた……!!」

正直死ぬかと思ったが何とか乗ることができた、オレは存外に真つ当な人間らしい。

「びびりすぎじゃぞお主、ありがたく受け取れ」

「は、はいありがとうございます!」

実際とても助かる。筋斗雲を駆る悟空と行動をとるなら高速で動く乗り物は必要不可欠、そういう意味では同じ筋斗雲の上ないものだ。

「よかったなあカイジ! よしっまずは桃白白をたおしてドラゴンボールを取り返さなきゃ!」

殺し屋・桃白白、悟空が負けた男、決して侮れない相手だが今の悟空なら問題ないだろうと思う。

「ふむ、そやつならすでにこちらに向かつておるぞ、しかも後ろにもう1人連れておる」

「いゝい!? こんなところから見えるんか!?!」

悟空が驚くのも無理はない、ここから地上まで数千メートルはある、文字通り千里眼の持ち主だ。

「仙人ならできて当然じゃ」

心底当たり前のように言うカリン様。

仙人ならできるといふなら武天老師様も千里眼の持ち主なのだろうか……………それは少し不味い気がする。

「いつ急がなきゃ!! ……ん? もう1人いんのか?」

「おそらくは弟子じゃろう、服装のセンスが似ておる」

服装のセンス……………。

「なぐに、これで2対2じゃ。各々修業の成果を存分に発揮せい」





そうやってボンヤリと塔を見上げていると、すぐそばの地面に突  
然何かが突き刺さった。

「あ！……！」

現れたのはこの前の殺し屋。

「き、きたな父上のカタキ……！」

こいつは父上を殺した、絶対に許せない！

「例のボールがまだひとつ残っていたはずだ……だせ」

やっぱり悟空さんのボールをねらってる、そんなことさせるもん  
か！

「まあまあ師匠、相手は子どもですよ？ もっと優しく言わない  
と」

ボクが斧を投げようと思いつきり腕を振りかぶったとき突然もう  
1人の男が現れた。

2人とも同じ服を着ている、いや新たに現れた男の服は胸元の字が「殺」から「死」に変わってる。

「なあ坊や、ボールはどこだい？ お兄さんに教えてくれないかなあ？」

「いやだ！！ だれが教えるもんか！！」

振りかぶった斧をそのまま投げる、でも首を少し傾げるだけで避けられてしまった。

「まったく危ないなあ……もう一度だけ聞くとよ、ボールはどこだい？」

「絶対言うもんか！！」

「そうか……残念だ……」

目の前から男の姿が消えたと思ったら、突然首をつかまれた。

「う……く……！！」

「「こっちが下手に出てりゃいい気になりやがって……ぶち殺してやる」

いきなり雰囲気ががらつと変わった。

男はどこまでも冷え切った目をしている。

「死ね」

一瞬の浮遊感、高速で流れていく見慣れた風景、ボク…死んじやうのかな。

目を開けると迫り来る堅い塔。

父上………！！

もうダメだと思ったとき、

「筋斗雲！！！！」

待ちわびた声が聞こえた。



「わかった、あいつは任せる」

「よし、行くぞー!!」

.....

地上に下りたオレの前に男が近づいてくる、どつやらあちらもそれぞれ闘う相手を決めたらしい。

「はあゝまたガキの相手かよ、最近のガキはしつげが悪いんじゃないかねえの?」

ため息を吐きながらこちらを見る男、完全にこちらをなめきった態度だ。

「気を引き締めてくれないか?」

「ああん?」

「油断した相手を倒してもつまらないからな……」

男の表情が変わる、気怠げな顔から冷徹な顔へ。

「へえ……、お前名前は……？」

「カイジだ。試したいことがあるんだ、簡単に倒れてくれるなよ」

気分が高揚する、オレは相手を挑発するように笑みを浮かべてやった。

「クククッ……俺は灰茶々（はいちやちや）、仲よくやるっぜ」

初めての殺し合いが始まる。

## 新しい生き方（後書き）

オリジナル敵キャラ出現！

灰茶々（はいちゃちゃ）

桃白白の弟子、柔らかな顔つきに似合わず残忍な性格。服装は師匠とお揃いで胸に「死」のマーク。結構強い。

名前は色縛りってこと以外はてきとー。

中国語読みだと灰茶々（ふいちゃちゃ）かな？多分……。

はいちゃちゃの方が好きなのでこっちにしました。



## 理想の体現（前書き）

説明文多くてなんだかg d g dになってしまいました……

## 理想の体現

闘う前から気力が充実しているのを感じる。かつてないほどにオレは集中している。

深い呼吸をするたびに視界は広がり、自分の感覚は鋭敏になっていく。

目を瞑る、辺りに気を感じる。

正面に1つ大きくて邪悪な気、少し離れた場所に更に大きな気が2つ、そして空中に小さな気が1つ。

それぞれ灰茶々、悟空、桃白白、ウパの気だ。

オレはいつの間にか気を知覚できるようになっていたらしい。

そしてもう1つ、自分の中に大きな気を感じる。

オレの中のキーニが力を貸してくれているのを感じる。

力が湧いてくる、あの内面世界での闘いがオレのたがを外したよ  
うだ。

オレが勝手に決めた限界は突き破られ、もはや遮るものはない。  
武の頂、そのスタートラインにようやく立てた気がした、後は登る  
だけだ。

目を開ける、正面には越えるべき最初の壁、迷いはない。





灰茶々との激しい攻防の中、カイジはその思考の大半を気のコントロールに割いていた。

気のコントロールとは、カイジが内面世界で学んだ気による身体強化術である。

内面世界でカイジが使った“風林火山”はその完成形、全身の気を爆発的に高め一定時間だけ自分の全力を大きく越える力を使うことができる。

今使っているのは初歩の初歩、身体中の気を各部位に分配し強化する技。素早く動きなければ足に、敵を打ち倒したければ拳に、状況に応じて気を巡らす。

灰茶々が繰り出した体重の乗った踵落としを気を集めた右腕で受ける。

激しい攻撃を気を纏った手足でガード、それが間に合わなければより強い気で被弾箇所を強化。

非常に繊細な技術を必要とする作業だが、攻撃を見切ることにはカイジが得意中の得意とすること、さして問題はない。

“風林火山”は現実世界では使えない。

使うにはまだまだ実力が足りない。

内面世界は心の強さがものをいう世界、不屈の心があれば己の理想を体現できる世界。

“風林火山”はカイジの理想なのだ。

理想と現実の差は恐ろしいほどある、それでもカイジは諦める気など微塵もなかった。

『この世界でできたことが現実でできないはずがねえ』

キーニが、己の“力”の象徴がそう断言したのだ。

やれないはずがない、今は無理でもいずれ絶対にとどく。

迫る灰茶々の鋭い蹴り、腕のガードも足のガードも間に合わない。

脇腹に突き刺さる、カイジの表情に変化はない。

気を知覚できない灰茶々はわけがわからないといった様子で、再び距離をとる。

「……………てめえ……………本当に人間か……………？」

その問いに思わずニヤリと笑うカイジ。

「ただの人間じゃないさ……“鉄人”だ」

“理想”の名前で心を高める。

最初の一步は先ほど踏み出した、早くも二歩目だ。

「オレは何事も形から入るタイプなんだ」

灰茶々にとっては唐突で意味のわからない言葉、怪訝な表情で距離を保つ。

「思いや誓いを言葉にするのは大切なんだぜ……？」

「わけがわからねえ……薄気味悪いガキだ……」

灰茶々の中のカイジの評価が生意気なガキから薄気味悪いガキにかわった。

「ウォーミングアップはここまでだ……本気で殺す……！」





拳のラッシュで正面に意識を集中させてから、しなるような蹴りで後頭部に一撃。標的の意識を刈り取り二度と目覚めさせない必殺の一撃。

一瞬の静寂の後、何事もなかったように拳を返してくるカイジ、それを捌きながら後退する灰茶々、

先ほどからこれの繰り返しである。

気による身体強化はカイジに防御の面での圧倒的アドバンテージを与えたが、攻撃に関して言えば両者の格闘技術の差は如何ともしがたく、カイジは灰茶々の巧みな攻撃に翻弄されていた。

一方の灰茶々はだんだんとカイジの不可解な防御力のタネに気づき始めていた。

灰茶々と桃白白の使う技にどどん波というものがある。

どどん波とは身体中のエネルギーを指先一点に集め敵に放つ、格闘とはまた毛色の違う技だ。

エネルギーを一点に集める、その技術を応用すればあるいは人智を超えた防御力を手に入れることも可能かもしれない。



たらない。

再び距離をあけて睨みあう、すると灰茶々は何故か動きを止めて突然笑いだした。

「クツクツク……、なるほどなるほど」

何かを確認するように拳を握っては開く動作を繰り返す。

そこでようやくオレはヤツの気の変化に気づいた。

「……気が……動いてる……!!!!」

拳を握るたびにそこに気が集まり、開けば霧散する。明らかに気のコントロールをしている動きだった。

驚くオレに醜悪な笑みを浮かべる灰茶々。

「こいつは見えそうだ……なあカイジくんよあ……」

詰まれた、正直そう思った。

ヤツが気のコントロールを会得したのであれば、今のパワーバランスは一気に崩れる。

地を這うような低い姿勢で灰茶々が迫る。

低い位置から放たれる右のアップパーを気で強化した左腕で受ける。

ズシリと重いパンチに体が浮きあがる、さっきまでとは威力が段違いだ。

浮いた体に迫るのは打ち下ろすように放たれる左拳、右手のガードが間に合うが空中では踏ん張ることもできず吹き飛ばされた。

一瞬の浮遊感の後に背中に鈍い痛み、どうやら木にぶつかっただしい。拳を受けた右手の痺れが攻撃の威力を物語る。

新しい生き方、最初から躓くなんてなんとも自分らしい。

追撃を警戒してすぐに体を起こす、幸い灰茶々は新たな力に酔っているようで愉快そうに自分の手を見つめている。

「冗談抜きで大ピンチだ、アイツの意識がこちらに向く前に何か作戦を……」

『カウンターだ』

「……は？」

頭に聞き覚えのある、というより毎日聞いている自分の声が聞こえた。

『ヤロウはまだ気の扱いに慣れてねえ、スピードと回避技術で翻弄して重いカウンターをかましてやれ』

「……キーニか？」

思わぬ助言者に呆気にとられる。

『簡単に死んでくれるなよ、お前が死ねば俺も死ぬんだ』

文字通り一心同体なわけだ、なんとも奇妙な激励の言葉だ。

『見た限りスピードだけはこちらが勝っている、気で強化すればの話だがな』

「しかし…オレも気の扱いに慣れているとは言えないんだが……」  
「だいたい気を使い始めたのはついさっきである、慣れるはずもない。」

『今回は俺がフォローしてやる、……少し余裕もできたしな……』

「余裕…？ 何の話だ？」

『集中しろ、来るぞ』

「あつ、おい話しを……っ！？」

深く追求しようとしたらいつの間にか灰茶々が接近していた。  
振るわれる拳に込められた気は当たれば致命傷になりかねないほど凄まじい。

『森に誘い込め…！』

キーニの声に従い森に逃げ込む、ヤツの拳はオレの背後の木を殴り倒した。

『今だ…！ 足に気を込めろ…！』

言われるがままに足に気をまわす、キーニのフォローのおかげか

足に纏った気は先ほどと比べて段違いに力強く感じる。

『スピードで攪乱して大振りを誘え、その時が最大のカウンターチャンスだ』

「わかった！」

奇しくもその作戦はオレがキー二を倒したときのものと同じだった。

灰茶々の周りを高速で動き続ける、遮蔽物が多く薄暗い森の中ではオレの影を捉えるのさえ難しいはずだ。

ヤツが拳を振るうたびに轟音が響く、空気が揺れる。

それらが捉えるのは辺りの木々や地面のみ。  
その事実にはヤツは苛立ちを隠せない様子だ。

(このまま大振りを誘う……!!)

作戦通りに進んでいる、そう思った直後想定外の事態が起きた。

灰茶々が標的を周りの木々に絞ったのだ。

これまで以上の勢いで木が倒れ始める、地の利が失われていく。

ものの数十秒で辺りは見渡しのいい空間になってしまった、少なくとも10m四方に身を隠せるようなものはない。

そしてヤツの目は完全にオレの姿を捉えている。

「やっと見つけたよカイジくん……小賢しいまねしやがって、バラバラにしてやるよ!!」

またヤツの気の流れが変わる、今度は右手の指先に全ての気が集まっている。

逃げることはできない、背中を向けた瞬間閃光に貫かれる自分が想像できた。

受けるしかない。

「どどん波ぁーっ!!!!!!!!!!」

カイジは知るよしもないが、このとき放たれたどどん波は通常のものとは比べものにならないほど巨大なものだった。

眩い光を放つ巨大な気のかたまり、それを前にしながらもオレは



冷静な思考を保っていた。

この類いの攻撃を受けるのは3回目になる、1回目は気絶、2回目は無傷、3回目は……

『きたぞ、カウンターチャンスだ』

気づけば世界が変わっていた、  
モノクロの世界でオレの目が捉えたのは目の前の光を構成する気  
の波、

自然と理解する、その波がオレを進むべき場所へ導いてくれると、  
体が動きその波に乗る、

気の流れに逆らわずに進む、

たしかこの技は、

『「ふもんとうこう巫門遁甲」』

敵の気を読み取り進むべき方位を見極める技、風林火山に次ぐ父  
の奥義の一つ。

目の前には無防備な背中、まさかここまで“理想”を体現できるとは思わなかった。

どうせなら最後までやりきろう。

モノクロの世界は終わりを告げ、ヤツも背後のオレに気づくがもう遅い。

「りゃあっ！……！」

ダメージよりも相手を吹き飛ばすことに特化した蹴り、空気を切り裂くように飛んでいくヤツの体、

それに一気に追いつき渾身の踵落として地面に叩きつける、

「がっ……！？」

苦しそくに息を吐く灰茶々、何が起きているかもわかっていないようだ。

止めだ……！！

地面で跳ね返って浮いたヤツの体に本日最大の一撃をお見舞いする、

「鬼殺・不動拳」

ありつたけの気を込めた全身全霊のボディブロー、  
アバラを砕く感触を拳に感じながら振り抜いた。

再び吹き飛ぶ灰茶々、その体は木々を薙ぎ倒しながら飛んでいき、  
カリン塔に当たることにようやく止まった。

一瞬の決着、



「ふう……」

一度ゆっくりと息を吐く、その場で数度屈伸をして体の調子確かめてから、オレはカリン塔に向かった。

カリン塔に着いてまずオレの目に入ったのは俯けに倒れて動かない灰茶々の姿。気を感じるから生きているのは確か、どうやら気絶しているらしい。

視線を移せば情けない顔で悟空に命乞いする桃白白。  
必死なのはわかるが、半裸で子どもに土下座するムキムキのオッサンはどうしようもなく気持ち悪かった。

「あつカイジ、おめえも勝ったんか」

悟空が倒れている灰茶々の体を横目に見ながら言う。

「ああ…ギリギリだったけどな…」

本当にギリギリだった、キー二の助けが無ければ死んでいただろう。

そのキー二は闘いが終わってから一言も喋らない、普段は基本的に喋る気はないらしい、さっき喋ったのもオレの…自分の命を守るためだったのだろう。

「ところで……これはいったいどういう状況なんだ…?」

「それがよお……」

「たのむこのとおりだっ……もう二度と悪いことはしないっ……!」

悟空が戸惑うのを見るとこそとばかりに懇願してくる。

「なあ……ど……どっする……?」

悟空がオレと木の陰に隠れるウパに訊ねる。

オレとして正直反対だ、もう何もしないなんて信じられない。

しかし今回一番傷ついたのは父親を殺されたウパだ、まずは彼の意見を聞きたい。



(だめだっ…間に合わないっ…!!!)

襲い来る衝撃に備えようとしたとき、

「しゃがめえー………っ!!!!」

地面に飛び込むようにして伏せる。

風を切る音とともに頭の上を何かが通過した。

カンッ　カンッ

甲高い音が2回響く

次の瞬間襲いかかってきた、耳をつんざくような轟音と爆風を必死に耐える。



薄く目を開けると周りのテントや木と一緒にウパが吹き飛ばされるのが見えた。

「うわああーっ!!!!」

「ウパっ!!」

咄嗟に気で足を強化、加速して回り込みなんとかキャッチするがそのまま吹き飛ばされてしまう。

「グウツ!!」

背後にカリン塔が迫るこのままじゃつぶれたトマトになってしまう。

「……筋斗雲————っ!!!!」

腹の底から叫ぶ、すると背中に柔らかい感触、どつやら間に合ったらしい。

そのまま筋斗雲の上で爆風が収まるまで耐える。

ようやく爆風が収まり目を開けると空には煙が立ちこめるばかりで桃白白たちの姿はなかった。

あの爆発を間近で受けたんだ、生きてはいないだろう。

「やったーーーーっ！！！！」

喜ぶ悟空の手にはいつも持ち歩いている赤い棒、あれで爆弾をはじき飛ばしたのだろう。

「よおーーーーーし！！！！ カイジ行こう！！ ドラゴンボールを全部集めるんだ！！！！」

たった今闘いが終わったばかりなのに出發を提案する悟空。

まあ悟空は無傷なようだし、オレも仙豆で回復してるから体力的問題は無いが……。

「待ってるよウパ!! 絶対お前の父ちゃんを生き返らせてやるからな!!」

「はいっ!!!!」

「……ははは……」

意気込む悟空を見てみると自分が馬鹿らしくなった。

カリン様にも言われたじゃないかオレは考えすぎだって、

「んっ? どうかしたかカイジ?」

それにこれは悟空の旅だ、

「何でもない、すぐに出発しよう」

オレはおとなしくついて行くことにしよう。

## 理想の体現（後書き）

巫門遁甲：敵の気を読み取り進むべき方位を見極める技

元ネタ シャーマンキング

鬼殺・不動拳：全力全開のボディブロー

元ネタ 餓狼伝説 KOF

巫門遁甲は相手の気の攻撃を避ける技だと思っていたら結構です。

正確には違うらしいんですけどこの小説ではそういうことをお願いします。

鬼殺・不動拳は餓狼伝説やKOFといった格ゲーにでてくる「ギース・ハワード」というキャラが使う技です。原作では必殺技ではありません

ちなみに気のコントロール云々はハンターハンターの念を参考にしました。

作者のアイデア不足の為、今後こういった元ネタのある技が増えそうです。

その都度後書きで紹介することにします。

## 突撃 レッドリボン軍

白い雲の間を突き抜けて空を飛ぶ、吹き抜ける風の感覚が気持ち良い。

空を飛ぶことがこんなに楽しいことだったなんて、

地上から数百m、黄色い雲の上で、オレは1人感動していた。

現在オレたちは一路レッドリボン本部に向かって雲を飛ばしている。

リーダーによるとそこに2つのボールが集まっており、ちょうどいいので一気に潰してやるつとということになったのだ。

このとんでもない作戦に思うことが無いわけではないが、意外と何とかなる気がしている。

悟空なら何でもできる、そんなことは思っていないが、世界一

とはいえただの軍隊にやられるとは到底思えなかった。

「……………あとどれくらいだ悟空？」

「うん……………もうちょい……………」

お互いほどよくリラックスできているのを感じる、入れ込みすぎるのは自分を追い詰めるのであまり良くない。

今から気を張っていたら本番を前に疲れてしまう。

そんな時、後方からジェットエンジンを燃やすような爆音が聞こえてきた。

悟空も気付いたようで振り返って後ろを見る。

虫のような形をした何かが猛スピードでこちらに迫っているのが見えた。

「何だあれ……？」

こちらの戸惑いを余所にそれはグングンと近づいてきて、ついにオレたちと並走し始めた。

「なんだおめえ？」

悟空も疑問の声を上げる。

近くで見るとそれが何らかの複雑な機械であることがわかった。生憎とオレたちではいつたいどんな機械であるかまではわからないが。

しばらく一緒に空を飛んでいると、一定間隔で点滅する赤い光がだんだん可愛く見えてきた。

そっと手を伸ばし触れようとする、





姿。

彼らは数日前、単身レッドリボン軍を追った悟空の安否を知ろうと躍起になっていた。

今はブルマが有り合わせの材料で作った、カメラ機能付き高性能探索機からの映像を待っていた。

「…いた!! 孫くんだわっ!!」

しばらくして映像を受信する液晶に映ったのはいたって元気そうな悟空の姿。

しかし探索機から送られてきた映像には悟空だけではなく、何故かカイジも映っていた。

「あれ? 何でカイジくんがいるの?」

ブルマが不思議そうに言う。

「大方旅の途中で出会ったのじゃろう、巡り合わせとは不思議なもんじゃ……」

亀仙人が感慨深げに呟く、サングラスに隠された視線の先には画面越しにこちらを見つめるカイジの顔。

「良い顔付きになりおったわ……カリン塔に向かわせたのは正解だったようじゃのお、結構！ 結構！」

画面に映るカイジの顔からは以前感じた危うさは見受けられなかった。

そのことに満足したのか愉快そうに笑いだす亀仙人。

その姿は普段とは違い、長い時を生きた仙人と呼ぶに相応しい姿だった。

「ひょっとしてあいつ……レッドリボン軍の本部にむかってるん

じゃないのか？」

2人の現在地とドラゴンボールの位置が表示された地図を見ると、突然ランチが呟いた。

「まさか…いくら悟空さんでもそんな無茶はしませんよ…」

ウミガメが自信なさげに言う。

「調べてみるわ!!」「」

慌てて端末を操作するブルマ、探索機を動かし2人の向う先へと飛ばす。

程なくしてカメラが映し出したのは巨大な要塞、柵引く旗には大きくRRレックドリックボーンの文字が刻まれていた。

「や…やっぱり……」

悪い予感が的中し、顔を青ざめるブルマ、同時に深い後悔を覚える。

目に浮かぶのは無惨に殺された弟のように思っている2人の姿。

何故あの時悟空を行かせた、

何故レッドリボンの怖さをもっとしっかり教えなかった、

齡16ながら実は責任感が人一倍強いブルマは心が締め付けられる思いだった。

ブルマの様子に暗くなる一同、皆が皆2人の状況が絶望的であるとわかっていた。

「それじゃ、援軍に行こうかの」

不意に亀仙人が呟いた、その言葉は沈黙する室内に不思議と響いた。

「え…ん…ぐん…？」

亀仙人の言葉に呆然と呟くブルマ。

「さすがに2人では敵しかろうて、助太刀してやろうではないかと言いつとるんじや」

まるでなんでもないことだと言わんばかりに続ける。

思えば彼だけは2人の無茶な行動に対しても動揺していなかった。

頼もしい物言いに漂う雰囲気が変わっていく

「へッ…あのレッドリボンが相手か…おもしれえ…」

ランチが愛用の銃をかがけて好戦的な笑みを浮かべる。

「私にも何かできるでしょうか？」

それに同調するようにウミガメが一步踏み出す。

「ほっほっほ、やるべきこととは誰にでもあるもんじゃ」

その言葉に頂垂れていたブルマも顔を上げる、その目には先ほどまでとは違う力強い光。

「行きましょ！ まだ2人も生きてるんだから！！」

立ち上がるブルマの頭からは不安、後悔、迷い、全てが消え去っていた。

まだ間に合う、まだ死んでない、絶望するにはまだ早い。

「ヤムチャたちも呼んで皆で行くのよー！！」



「ここからは別行動だ!! 死ぬなよ悟空!!」

「おう!! カイジもなっ!!」

効率を考えて突入したら別れて行動することは事前に決めていた、それ以外に作戦らしい作戦はない。

「よおー……し!!!! あばれるぞー……っ!!!!」

大声をあげながら突っ込む悟空、その声で偵察機にばれたようだが、元から隠れるつもりもないので問題ない。

背中の子 - 如意棒を引き抜き即座に偵察機を撃墜する、盛大な爆発は開戦の合図だ。

「突撃だー……っ!!!!」

勢いそのままに一番近い建物に向かう悟空、

「おおおおおおおおおおっ!!!!……!!!!」

それに続くようにオレも突撃する、飛んでくる弾をかわしながら、



敵の集まる広場のような場所に降り立った。

「侵入者だーっ！！！！！！！」

すぐさまオレを取り囲むレッドリボンの兵士たち、その数は20人ほど……全く問題ない。

一歩で正面の機関銃を持った男に接近、掌底を顎に打つ、続けざまに右、左と蹴りを放ち、一瞬で3人を昏倒させる。

「っ！？ う、うわああああ！！」

「お、おいやめる！！！！」

オレの動きが見えなかったのか、やつらに動揺が走り銃を乱射し始めた。

闇雲に発射された弾は味方に当たり更なる混乱を生んだ。

その中を飛び回り1人、2人と確実に倒す。



土が目に見えて減っていた。

「ゲフッ……………」

力が抜けてこちらに倒れてくる男を体を半歩分ずらして避ける、扉の影に隠れていたようだが、殺気がただ漏れではまるで意味がない。

「……………何だ…ここは…？」

扉をくぐった先には巨大なビーカーがいくつも立ち並ぶ部屋、ビーカーの中には見たこともない生物がそれぞれ入っていた。その中にはオレの手のひらくらいの大きさなのに、人間の大人並みの気を持ったやつもいたりして、かなり気味が悪かった。

カタ、カタカタカタッ

部屋の異様な雰囲気には圧倒されていたオレの耳にどこからか物音が聞こえた。

音の発生源をたどると、鍵のかかった小さな扉があった。中からは人の気配、この妙な研究をしている張本人かもしれない。

オレは意を決して扉を蹴破った。

武人の魂千まで（前書き）

戦闘描写がワンパターンな感じ……

精進します。

## 武人の魂千まで

「誰だっ！！」

扉の先には白衣を着た研究者風の男がいた。

「……お前もレッドリボンの一員か？」

念のため確認するが、ほとんど確信はしている。

その男の目はどす黒く濁っていて、とてもカタギの人間とは思えない。

「何い……ワタシを知らないのか？ ……ああなるほど、貴様が噂の侵入者か…忌々しい……」

男が目を細めこちらを睨んでくる、どうやら敵の1人ということの間違いないらしい。

体付きや佇まいから格闘技、あるいは何らかの戦闘技術を修めるようには見えない。

しかし警戒は解かない、男から感じる狂気のようなものがオレに警戒を解かせない。

いつでも動けるように油断無く構えるオレに対し、男はじりじりと後退りを始める。

後ろには階段、そしてその先には扉、あそこから逃げようとしているのだろう。

「貴様らは絶対に許さん……！！ いずれ絶対に殺してやる……！！」

その言葉からは深い憎悪、そして怒りを感じる。

こいつを逃がしてはならない、こいつを逃がしたらとんでもないことになる、直感的にそう感じた。

「逃がすと思っているのか……」

追い詰めたのはオレの方なのに冷や汗が流れる、対して男の顔には焦りの色がまるで見えない。

「逃げさせてもらつたぞ!」

男はこちらに背中を向けて一目散に走り出す。

「させるかっ!」

一歩で追いつき、その隙だらけの背中に拳を放とうとしたとき、オレの視界を黒い影が遮った。

「なっ!」

「はははっ、行け!! 人造人間9号!!」

目の前に現れたのは黒のライダースーツに身を包んだ、2mはあろうかという大男。

「最新の間人ベースの人造人間だ!! 貴様に勝ち目はない!!」

高笑いをあげながら階段を駆け上がる男、扉の前に立つとこちらを振り返った。



「ワタシはドクター・ゲロ！！ 孫悟空はいずれ必ず殺す！！  
貴様はここで死ね！！」

聞き捨てならない言葉を残して扉の奥に姿を消す男 - ドクター・  
ゲロ。

追いかけても目の前の男がそれを許さない。

無言で構えをとる男、隙のない構えだ、どうやら相当できるらしい。

「どいてはくれないようだな……」

全身に気を巡らせこちらも構えをとる。

ピリピリとした空気、相対してわかる男の強さ、どうやらドクター・ゲロを追いかけることはできそうにない、この男に背を向けたら一瞬で殺される。

緊張が最大限に高まったとき、外で一際大きな爆発が起きた。

互いにほぼ同時に地を蹴る、机や椅子などをはじき飛ばしながら、オレ達は部屋の中央でぶつかった。



「……………」

答えは返ってこない、9号は何も言わずにただ愚直にカイジに襲いかかってくる。だがやはりその動きは精彩を欠いたもので、たやすくカイジのカウンターの餌食になった。

部屋の端まで吹き飛ぶ9号、かなりの勢いで壁にぶつかり、そのまま突き破る。

崩れた壁の瓦礫の山に埋もれるがすぐに立ち上がり、また隙のない構えを取る。

カイジの予想はまさにその通りだった。

起動後間もない9号はまだ調整が済んでおらず、本来の実力の半分も出せてない状態だったのだ。

「そんな様でオレに勝てると思っているのか!! 退け!!!」

カイジはこれほどの武人との勝負をこんな形で迎えることに我慢がならなかった。

やるのなら互いに万全な状態、対等の条件で、そんなことを考えていた。



た。

いずれはかの有名な武天老師すら超える存在になるだろうと言われていた。

だが死んだ。

彼が20才になったある日、彼の自宅に現れたのは金髪の男。名が売れ始めてから、自分に挑みに来る人間は毎日のように相手にしていたので、彼は動じなかった。

それなりにできるようだが、彼からすれば問題なく勝てる相手だった。

だが殺された。

男の超能力とやりに動きを止められ、ナイフで心臓を一突き。

何の抵抗もできなかった。

気がつくとその彼の体は普通ではなくなっていた。

体の各所に埋められた機械、それに違和感を感じない自分、人から人造人間9号バケモノになった瞬間だった。

しかし彼は、9号は、それを悪くはないと思っていた。

かつての自分を遥かに凌ぐ力を宿した体、これがあれば今度こそ天下一に、“武の頂”に立てるかもしれない。

人としては終わったが、武人としては新たな始まりを迎えたのだ、9号はそう思った。

しかし彼を改造した張本人であるドクター・ゲロは言った。

『貴様はただの実験機、ワタシの研究を進化させるための踏み台にすぎない、長期稼働はできんよう造られている』

『貴様の稼働期間は1年限りだ』

信じられなかった、勝手に殺しておきながら残された時間は1年。その上、その時間すらもわけのわからない実験に捧げると言う。しかし逆らえない、体に埋め込まれた爆弾が命令に背くことを許さない。

愕然とした、9号は自分の運命を呪った、もはや“武の頂”を指すことはできない。

深い絶望を抱いたままわけのわからない実験に付き合う毎日、9号にとっては堪え難いものだった。

そんな折り訪れた初の実戦、それがこのカイジとの闘いだった。

ドクター・ゲロは9号の調整不足に気づいていた、その上で実戦投入した。

口では殺すと言っていたが、9号の投入は足止め、時間稼ぎの意味合いが強い。

残り稼働期間2ヶ月、ドクター・ゲロは9号を切り捨てたのだ。

9号もその事実気づいていたが、もはやどうでもいいことだった。

死の間際に訪れたこの闘い、神がくれたものだと思った。





その言葉に9号は目を見開き、体から発せられるプレッシャーがさらに増す。

「俺にとっては今この時が全てだっ！！！！！！！！」

大気が震える、血反吐を吐きながら、すさまじい形相で9号が吼える。

「俺と闘え、人間！！！！！！」

悲壮な思いを叫びながら迫る9号、そのプレッシャーに気圧されたカイジは為す術無く壁にたたきつけられた。

初めての直撃、あまりの威力にカイジは一瞬意識が飛ぶ、壁によりかかることで何とか体を支える。

「そんなものじゃないだろう人間！！！！ 本気を出せ！！！！」

こちらを睨みつけながら、なお叫ぶ9号。

「俺の人生の意味を教えてください！！！！」

その言葉尻からはどこか縋るような思いが感じられた。

「張りのある人生だったと！！ 生まれた甲斐があったと！！  
胸を張れるほどに！！」

狂ったように叫び続ける9号、いやもう確実に狂っている。

壁からゆっくりと体を離しながら、カイジは闘う覚悟を決めた。

これ以上見ていられなかったのもある、だが何よりも、どこか自分と似ている存在を狂気から解放したかった。

握っていた拳を開き、尖った刃物のような形に構える。

「オレの全力……受け取れ！！！！」

手足に大量の気を巡らせ一気に駆け出す、9号の拳では迎撃など不可能なスピードで。

部屋の中央で2人は相対する、9号の振り抜いた拳が捉えたのはカイジの残像、

一方のカイジはすれ違いざまに額、鼻、顎、水月、とおよそ人体の急所と言われる部分を正確に打突する。

止まることなくそのまま駆け抜ける、部屋の端まで駆け抜けてようやく、車のブレーキのような強烈な摩擦音をたてながらカイジは止まった。

「ししまこ針々舞・おしやのこ鬼遣」

轟音をたてて倒れる9号、どうやらかるうじて意識を保っているようだ。

カイジが放った技は常人ならたやすく葬ることができる技だったが、人造人間ゆえの頑丈さが功を奏した。

仰向けに倒れ伏した9号、その顔には狂気から解放された穏やかさと、どうしても悔いの残る人生に対する悔しさが混在していた。

そんな9号にカイジが歩み寄る。

「……まだ、満足できないのか……」

「無論……だ……納得……できるものか……!!」

言葉が途切れ途切れになる、9号の意識が飛びそうになっている

のだ。

9号が閉じそうになる臉を必死に開けてカイジを見る。

「人間……貴様の……名は……」

「カイジ」

「……カイジ……貴様は……俺の……永遠の宿敵だ……！！　いず  
れ……必ず蘇り……お前を倒しに……い……く……」

9号の意識が完全になくなった、カイジは何とも言えない感情に  
暗鬱とした表情を浮かべる。

口ぶりからしてこの男はもうすぐ死ぬ、これほどの武人があんな  
闘いを最後に。

苦虫を噛み潰したような表情になるが、カイジは振り返り、外へ  
と続く扉に歩を進めた。

いくら悩んでも自分ではどうすることもできない、その事実を認  
め、割り切ろう、そう決めたのだ。

……だが

「…っと」

考えに没頭していたカイジは、足下への注意が散漫となり瓦礫に躓いた。

その時、カイジの懐から小さな袋が落ちた。

それを拾おうとしたカイジの手がぴくりと止まった。

カイジはその袋の中身を思い出した、

思い出してしまった。

武人の魂千まで（後書き）

針々舞・鬼遣

元ネタ サムライスピリッツ

名前だけお借りしました、本家の技とは全然違います。

今回もわけわからん話になってしまいました。結構大事な回だったりします。

## 最後のドラゴンボールのありか（前書き）

導入的な話なので連続投稿しました。

## 最後のドラゴンボールのありか

「おーい、カイジー!!」

研究室から外へ出ると空から悟空が下りてきた。

いつの間にか銃声も爆音も騒ぎ声すら止んでいた。

周囲を見渡しても崩れた建物や気絶した人間しか見えない。

世界一の軍隊レッドリボン軍本部は、オレたち2人、実質ほとんど悟空1人の手によって陥落したのだ。

(しかし、危険な男を逃がしてしまった……)

ドクター・ゲロ、オレたちを殺すと言ったあの狂人はまだ生きて  
いる。



「ほらっ！ ドラゴンボールもめつけたぞ！」

「ハア〜……あのなあ……」

無邪気に笑う悟空を見ると、オレがすっかりしなければと強く思う。

「悟空、今回のことでオレたちは結構な恨みを買ったんだ、今後命を狙われることもあるんだぞ」

なにもドクター・ゲロだけではない、レッドリボン軍の下で私腹を肥やしていた連中なんかもオレたちを恨むだろう。

「問題ねえよ、オラ簡単には負けねえ、カイジだってそうだろ？」

楽観的な悟空、でもたしかに悟空を倒すのは難しい、レッドリボン軍だって敵わなかったのだから。

「……とにかく、ゲロという男には気をつける。 何をするかわからないヤツだ」

「そいつ、つえーのか!？」

「い、いやそういうわけじゃないんだけど……」

「なんだ、じゃあオライいや」

途端に興味を失う悟空、こいつの頭の中は闘いしかないのか……。

「頼むから名前だけでも覚えててくれ……」

「うん、わかった」

本当にわかっているのか非常に不安だが……とりあえずよしとしよ。

「それで、今から最後のボールを探しに行くのか？」

悟空の思考を先読みして訊ねる、こいつが基本的に休まないやつってことはもう知っている。

「それがよく、レーダーが壊れちゃったから、またブルマに直してもらわなくちゃいけねんだ」

「ブルマさんに？　じゃあ都に行くのか……」

次の目的地が決まったところで筋斗雲を呼び、空へと舞い上がる。

「西の都ってどっちだ？」

「多分あつちかな……？」

自信なさげに悟空が指を差す、信じていいものだろうか……。

「……まあ、なんとかなるか」

同じ地球にいるんだ、いつかは会える、そんな馬鹿なことを考えているオレがいた。

いつの間にかオレにも悟空の楽観的な考え方が移ってしまったらしい。

「……よし、行くつ悟空ー！ー」



「……………」

もつ色々台無しな気がする。

深いため息を吐き、気を取り直して筋斗雲を進めようとしたとき地上からオレたちを呼ぶ声が聞こえた。

「あれっ！？ カイジ、みんながいるぞ！！」

地上では天下一武道会で出会った面々、さらに銃を持った金髪の女性、そして何故かカメがこちらを見上げていた。

「ブルマさんもいる、悟空、レーダーを直してもらおう」

「おう！！ おーーい、みんなー！！！！」

みんなの声に従い、オレたちは地上に下りていった。

地上に下りたオレたちを待っていたのはブルマさんの抱擁だった。

オレも悟空も突然のことに驚いたが、ブルマさんの目の端に浮かぶ涙が見えたのでおとなしく受け入れた。

どうもオレたちがレッドリボン軍の本部に突撃したのを知っていたそうで、随分と心配をかけてしまったらしい、抱擁の後も説教をされた。横でクリリンとウーロンが笑っていたのが憎らしかった。

その後、助っ人に来たらしいみんなに闘いはもう終わったことを伝えたり、それを疑ったヤムチャがプーアルに確認に行かせたり、金髪の女性……ランチさんに突然目付きを褒められたりと色々あった。

そして今は武天老師様の家、カメハウスでブルマさんにリーダーを直してもらっているところだ。

「カイジよ、少しいいかの？」

リーダーを慣れた手つきで解体していくブルマさんをボンヤリと眺めていたら、老師様に話しかけられた。

「何でしょうか？」

「何、修行の成果を聞こうと思っての。……まあ、お主の顔を見ればだいたいわかるんじゃないかな」

そう言っつて老師様はサングラス越しにオレの顔をじっと見た。

「……ふむ、中々実りのある修行だったようじゃの。カリン様は息災じゃったか？」

元気すぎるくらいだったが、そのまま伝えるのは失礼か、と思いき直す。

「はい、悟空との旅が終わったらもう一度会いに行こうと思っ  
ています」

老師様はオレの答えに満足したようで、頑張るんじゃないぞ、と言っ  
て家の奥へと消えていった。

この旅が終わったらオレも超聖水の試練に挑戦しようと思っ  
てい  
る。

オレの力じゃ何年かかるかわかったもんじゃないが、やり甲斐は  
ある。

そんなことを考えていると、解体されるレーダーを食い入るよう  
に見つめていた悟空が突然情けない声を上げた。

何事かと訊ねると、レーダーに故障はなく、ボールはワニやカバ  
といった動物に飲み込まれ搜索不可能な状態らしい。

「ウンコといっしょにでるかもしれないぞ！」

ヤムチャがいきなり下品なことを口走る、ブルマさんいわく見た  
目好青年なのにたまにこういうことを言うのが残念すぎるらしい、  
ちよっと前まで盗賊だったらしいし、しょうがないとは思うが……。

ともかくレーダーで捉えられない以上、他の方法で探すしかない。

オレたちが必死に頭を振り絞っていると、老師様が道を示してく  
れた。

「占いババの宮殿に行けば、きっとそのドラゴンボールのありが  
を教えてくださいよ」

占いババ……、オレや悟空はもちろんのこと、他のみんなも聞い  
たことのない名前らしく疑問符を浮かべる。



話しを聞くとその人は占いで何でもわかる凄腕らしく、ドラゴンボールのありかなんてたやすくわかるだろう、とのこと。

「地図でみると……え……と……」

悟空もオレも地図は読めないのだが、ヤムチャが同行してくれるらしい。

なんでも悟空との旅で修行がしたいらしい、同じ理由でクリリンも同行を申し出た。

さらに心配だから、とブルマさん、悟空の修業の成果を見たい、と老師様が次々と申し出て、結局ランチさん、ウーロン、ウミガメさん以外の全員で向かうことになった。

オレと悟空は筋斗雲、他のみんなは飛行機にそれぞれ乗り込む。

「それじゃ、最後のボール探しにしゅっぱー……っ……！」

悟空のかけ声と共にオレたちはカメハウスを飛び立った。



占いババの試練（前書き）

だいたい原作通りです。

## 占いババの試練

「おっ！ あれじゃないか？」

地図を見ながらオレと悟空を先導するヤムチャが飛行機から顔を出し地上を指差す。

下を見るとそこには広大な砂漠に囲まれたオアシス、その中心に大きな建物が見えた。

「占ってくれるかな？」

「タダでは占ってくれないと思うけどな」

高度を落とす飛行機に従い、オレたちも地上に向かった。

「ひえ〜、立派な建物だなあ……」

クリリンのリアクションは決して大袈裟ではない、近くで見るとその建物はかなり高級そうな造りをしていた。

「もしかして占いババってすごく偉い人なの？ 服を直しといて良かったじゃない孫くん」

悟空の道着は度重なる鬪いで既にボロボロだったため途中の町で新調した。

その時、悟空が道の真ん中で素っ裸になろうとしたところを、ブルマさんが殴って止めるという事件もあったが、それは忘れよう。

「はいはい、ならんでくださいならんでください」

建物に近づくと笠をかぶった妙な生き物に先導された。

占いは繁盛しているようで、オレたちの他にも何人がが列をなしていた。

ただ、そこに並んでいる人たちが、もれなく筋骨隆々な男たちなのが気になってしょうがない。

一筋縄にはいきそうにないと1人思っていると、建物から1組の男女が出てきた。



「ど、どうなってるんだ？」

そしてついに声が聞こえなくなった、しばらくすると暗くてよく見えない建物の奥から、こちらに向かってくる足音が聞こえる。

だれかがゴクリとのを鳴らす音が聞こえる、だんだん姿が見えてきた……。

「「「なっ!?!」「」」

現れたのは満身創痍の先ほどの男たち、全員が骨折したり、1人で歩けなかったりと無事なものはいない。

「さあおまちどうさまでした〜」

さっきの妙な生き物がオレたちを案内する、それに素直についていったのは悟空とオレ、そして武天老師様だけだった。他のみんなは二の足を踏んでいるようだ。

「い、今の連中はどうしたんだ？」





「お二人はどういったご関係なんですか？」

クリリンがみんなの気持ちを代弁して訊ねてくれた。

「占いババはわしの姉じゃよ」

「……なっなんですって!?!?!」

何てキャラの濃い姉弟だ……、武天老師様の姉っていったい何歳なんだろう……。

その後占いしてもらったための説明を受けた、1000万ゼニー払うか、5人の選手と闘って勝つか、当然オレたちは後者を選び、占いババによって建物奥の武舞台に案内された。

ちなみに1000万ゼニーと聞いた時、ブルマさんが払うと言ったのだが、さすがに申し訳ないし修業にもならないので断った。

闘いは5対5の勝ち抜き戦で行われるらしい、こちらはクリリン、ヤムチャ、オレ、悟空の順番で4人で挑むことになった。

「さあ、はじめろぞい。そっちは誰からやるのじゃ？」

「ボクがいきましょうー!!」

クリリンが自信満々といった表情で前に出る。

「クリリンがんばれ!!」

「悟空の出番はないんじゃないかな？ オレ1人で5人ぜんぶやっつけちゃったりして」

武天老師様との試合で実力は知っているが少し油断しすぎじゃないか？

「懐かしいな、天下第一武道会をおもいだす」

「何を言ってるんだ、まだあれから2週間くらいしか経ってないぞ」

オレのツツコミは華麗にスルーされてしまった。あまりに濃密な日々で忘れがちだが、まだ天下第一武道会から2週間、父さんの死からは1ヶ月しか経っていないのだ。

オレ自身不思議な気分だ、みんなと出会ってからまだ2週間しか経ってないなんて、もう何年も一緒にいたような感覚だ。

「ドラキュラマン出よ!!」

占いババの選手を呼ぶ声で現実に引き戻される、最近思考にふけて注意が散漫になることが多い、気をつけなければ。

現れたのは一匹のコウモリ、何かと見ていると、その姿が一瞬で人間に変化した。

鋭い牙、ガリガリの体に逆立った髪の毛、名前負けしない風貌だ。

「へっへんなやつだなあ!」

「なあプーアル、あいつおめえの仲間か?」

「あんなのと一緒にしないでください!」

驚くクリリンをよそに緊張感のない発言をぶちかます悟空、流石だ。

「よし!!… 試合開始っ!!!!」

始めにクリリンが様子見とばかりに蹴りを放つ、やはり油断しているようで勢いはあまりない。

「ひゃおっ!」

その蹴りを何でもないように跳んでかわしたドラキュラマンは、そのまま空中で再びコウモリへと変化した。

「なんだあいつまたコウモリになったぞ!!」

ドラキュラマンは小さなコウモリの体で武舞台中を所狭し飛び回り始めた。

「むっ……むむっ……!!」

どんどん加速し攪乱するドラキュラマン、この戦法はオレが灰茶々に対してやったもの似てる。

武舞台中央で首を振り、ドラキュラマンの動きを必死に捉えようとするクリリン。

しかし小さい上にとんでもないスピードで飛び回るドラキュラマンに、次第に翻弄されていく。

「くそーっ！ はやいなー!!」

クリリンの顔にもだんだんと焦りが見えてきた。

その時、一瞬の間をついたドラキュラマンがクリリンの背後で変化を解いた。

「後ろだクリリン!!」

「えっ!? うわっ!!」

後ろから固く抱きついたドラキュラマンは、そのままそのキバをクリリンの頭に深々と突き刺し、血を吸い始めた。

「なんてやつだっ!! 血を吸っているぞっ!!!!」

その光景は精神衛生上非常によろしくないものだった、やがてなんとか振りほどくことに成功したクリリンだったが、血を大量に吸われた上に、頭からの出血が止まらないためフラフラしている。

「このやろ〜!! よ、よくも……!!」

怒りによって血が更に吹き出す、頭に血が昇るとい言葉があるがどうやら事実らしい。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

仏門出身のクリリンはお経を唱えて気を鎮めようとするが

「ははは!! クリリン毛が生えたみてえだぞ!!」

「うるせいつ!!」

悟空のせいでその努力は無駄になる。

やがて血がなくなりすぎて、立っているのも辛くなったクリリン



道中クリリンは武天老師様から説教をうけていた、地力では勝る相手に油断して負けたのが許せなかったそうだ。

「ここで見学しておれ」

選手であるヤムチャとは途中で別れて、観戦者であるオレたちが案内されたのは試合会場を一望できる場所だった。

会場は凄い所だった、便座に座る巨大な悪魔の石像が2体、その伸ばされた細い舌の上が主な戦場となるらしい。

「ちなみに底は猛毒の沼じゃ、落ちたら死ぬぞ」

そう言っただけで占いババはおもむろに肉を落とす、落とされた肉はきれいさっぱり溶けて消えてしまった。

「ここが2つ目の会場“悪魔の便所”じゃ」



## 占いババの試練（後書き）

ウパは連れてくる必要性が浮かばなかったため連れてきませんでした。

さらに透明人間のスケさんにはカイジのためにスタメン落ちしてもらいました。

次回投稿は今日の夜か明日になりそうです。

**悪魔の便所の悪魔たち（前書き）**

カオスな仕上がりになってしまいました……。

## 悪魔の便所の悪魔たち

「ひっひっひ、では3人目の選手を紹介しよう……闘う干物、ミイラくんじゃっ!!!」

占いババの声に従い悪魔の口から現れたのは、不敵な笑いを浮かべた体中包帯まみれの大男だった。あちら側の選手は個性的なやつばかりだ。

ミイラくんの体は包帯に覆われていて尚分かるほどものすごい筋肉の塊だ、外見的にはパワータイプに見えるが……決めつけるにはまだ早い。

「では始めいっ!!!」

「っおおー!!!っ!!!」

開始と同時に飛び出した両者は狭い足場の中央でぶつかった、ドラキュラマンとの試合で分かったのだが、ヤムチャはスピードと手数で敵を圧倒する闘いが得意なようだ。

ミイラくんはそのヤムチャ相手に全く互角の攻防を繰り広げてい

る、見た目とは裏腹にかなりのスピードだ。

「ヤムチャさま、がんばって!!!」

2人は狭い足場をものもしない動きでダイナミックな闘いを演じる、どちらの攻撃にもジャストミートはなく、互いの体力を削り合う緊迫した闘いが続いた。

「ヤムチャさん……すごい……!!!」

クリリンが呆然と呟く、2人の動きは亀仙流の使い手から見ても速いらしい。

そう考えると、独学で武術を学んだと言っていたヤムチャはとんでもない才能だ。

「ヤムチャー！頑張れ〜！」

恋人に声援を贈るブルマさん。

彼女しかり、ヤムチャしかり、悟空の周りには個性的な面々が集まりやすいらしい。

膠着していた戦況が動いたのは、何の前触れもなく突然のことだった。

互いに、焦れて一か八かの勝負に出るタイミングが同時だったのだ。

「でりゃあああー！！！」

「ぬうううううっ！！！」

2人は試合開始時と同じように、足場中央で交錯した。

リーチの差で一瞬早くミイラくんの拳がヤムチャの腹に突き刺さる、痛みを耐えて繰り出したヤムチャの拳はミイラくんの顎をかすめるだけだった。

「ゲホッ！ ゲホッ！ ……くそっ……！！！」 息が詰まり膝をつくヤムチャ、そこにダメージが見られないミイラくんがゆっくりと近づいてくる、そしてその丸太のような腕を高々と振り上げた。

「ヤムチャさま〜っ！！！」

プーアルがもうダメだと目を覆い悲鳴を上げる、しかしその腕が

振り下ろされることはなかった。

「……なに……!!」

ミイラくんもその場で膝をつき、立ち上がれなくなったからである。

驚愕と疑問の表情を浮かべるミイラくん、彼自身状況が理解できてない様子だ。

よく見れば膝が震えている、おそらく顎を掠めたヤムチャの拳が脳震盪を引き起こしたのだろう。

「チャンスだヤムチャさん!! 立って!!」

声援に応えるようによろよると立ち上がったヤムチャは、一瞬で呼吸を調べ、獲物を前にした狼を彷彿させる構えをとった。

「受けてみる……狼牙風風拳!!」

一気に攻め立てるヤムチャ、上下左右あらゆる角度から襲いかかる狼のキバがミイラくんを迫る。

「……ぐっ！　ぐああああああっ！！！」

なんとか避けようとしたミイラくんだったが、平衡感覚を失った状態ではそれも叶わず、なす術なくヤムチャの攻撃に蹂躪されていく。

「止めだっ！！！」

先ほどのお返しと言わんばかりに、強烈な拳がミイラくんの腹に突き刺さる。

糸の切れた人形のように倒れるミイラくん、占いババは苦虫を噛み潰したような顔でヤムチャの勝利を告げた。

試合を終えたヤムチャは観戦席に移った。

今の試合でアバラが何本か折れていて、これ以上の試合続行は危険と判断されたからだ。

納得いかない様子のヤムチャだったが、ブルマさんの説得で渋々舞台を降りた。





クリリンの問いに武天老師がゆっくりと答える。

「過去に天下一武道会で2度も優勝したほどの達人じゃ、やつは今まで5人目を務めていたはずなんじゃが……」

「つまりアイツより凄いのがあと2人控えてるってことか……」

ヤムチャの呟きを聞いて慌てるブルマ。

「そんなの勝てっこないじゃない!!」

「2人の成長次第じゃが……まあカイジのやつは自信があるそうじゃがの」

武天老師の言葉に全員試合会場に目を移す、そこには本物の悪魔を鋭い目付きで真正面から睨みながら、試合開始を今か今かと待っているカイジの姿があった。

その堂々とした姿はどこか安心感を与えてくれるものだった。



開始の合図と同時に放ったカイジの跳び蹴りは空を飛ぶという悪魔ならではの方法で避けられてしまった。

「小僧、俺様の故郷に連れてってやるうか!? 地獄にな!」

鋭い爪をこちらに向け空中から急降下してくるアックマンに対し、カイジは両手を突き出してて構える。

「なにっ!？」

手を組み合つての力比べとなるが、これには地に足をつけた状態で踏ん張りがきくカイジが競り勝つ。

押し返されたアックマンは足場に着地し、カイジを忌々しげに睨みつける。

「くっ……中々やるではないか……!」

「カイジ、そいつもあんまし強くねえぞ」

「な、なんだと!」

観客席から悟空がアックマンを挑発する、特に悪意もなく天然で言うあたり質が悪い。

「おのれ……！ こいつを殺した後は貴様の番だ、覚悟しておけ  
！！」

目の前のカイジを無視して悟空に気を取られるアックマン、そんなアックマンにカイジは容赦のないローキックをお見舞いした。

「ガッ!？」

突然の痛みに奇声を上げてうずくまるアックマン、目の端には涙を浮かべている。

「……武天老師様、本当にあいつが達人なんですか？」

「とてもそのようには見えないな……」

「ムウ……実力は確かのはず何じゃが……」

観客席で先ほどまでの緊迫感が霧散する中、カイジは油断大敵と言わんばかりにアックマンから目を離さず、しっかりと構えている。

「何をしておるアックマン!! さっさと片づけてしまえいつ!!」

「は、ははっ!!」

占いババに叱咤されこちらに向き直ったアックマンの表情は憤怒の色に染まっていた。

「お遊びはここまでだ……覚悟しろ!!」

「遊んでいたのはお前だろうが……」

「黙れ!! 本当の悪魔の力を見せてやる!!」

カイジは因縁をつけられたことには納得がいかないが、アックマンから溢れ出る殺気から、今からが本当の闘いだということが事実であることを悟っていた。

その殺気は観客席までとどき、悟空以外の面々の緩んでいた気を引き締める。

「シャアッ！！！！」

今度は飛ばずに正面から攻めるアックマン、先ほどの様子が嘘のように達人の名にふさわしい動きだ。

その手数之多さとスピードは、先ほど見せたヤムチャのそれを大きく上回るものだった、そこにさらに高度なフェイントを織り交ぜた攻撃は、ある程度の実力者でも数秒と持たずにサンドバックになるだろうものだった。

「…………ガフッ…………！！」

しかし先に膝をついたのはアックマンだった、カイジはマシンガンのような攻撃を捌きながら、完璧なカウンターパンチをアックマンの顎に叩き込んだのである。

灰茶々、人造人間9号と自分より遥かに高い格闘技術を持つ相手と連戦してきたカイジにとって、アックマンの攻撃は恐るるに足りないものだった。

「アックマン！！ お前ほどの者がだらしないぞえっ！！！！」

占いババから再び檄が飛ぶ、それを聞いたアックマンは顔に不敵

な笑みを浮かべながら立ち上がった。

「お前は……殺す……!!」

物騒なことを呟いたアックマンは、カイジから距離を取ったところで指先を両方の米神に添えるという奇妙な構えを取った。

「何だそのふざけた構えは？」

「どんなに良い子ぶったやつにも絶対に少しは悪の心がある」

カイジの言葉には聞く耳持たず、いきなり意味不明なことを語り出すアックマン。

「その僅かな悪の心をどんどん膨らませれば爆発を起こす!!」

「………？ 何が言いたい？」

「お前は木っ端微塵になって死ぬのだ!!!」

嬉々とした表情でカイジの死を宣告するアックマン、突然のこと

にカイジも全く話について行けない。

「やばい!! アクマイト光線じゃ!! やつは本気でカイジを殺すつもりじゃっ!!」

「待て、アックマン!! そこまでせんでも……!!」

今まで落ち着き払って戦況を見つめていた武天老師が突然焦った声を上げる、同じく状況を理解しているらしい占いババもアックマンを止めようとす、周りはいまだに状況がつかめないままだ。

「ふんっ!!!!」

占いババの言葉を無視してアックマンが放ったのは螺旋を描きながら飛ぶ怪光線。

もの凄いスピードでカイジに迫る光線を見ながら、アックマンは勝利を確信した笑みを浮かべる。



「ふもたごたごつ  
巫門遁甲」

しかし怪光線がカイジに当たることはなかった、その光線が気で構成されている以上カイジに当る道理はないのだ。

「ワハハハハハハグツ!? ……………」

背後に回ったカイジに気づかず高笑いを続けるアックマンに手刀を一発、アックマンは幸せな表情のまま意識を失った。

「結局何だったんだコイツは…………」

その場を何とも言えない空気が包む中、占いババ勢3人目との試合が終わりを告げた。

悪魔の便所の悪魔たち（後書き）

ヤムチャの2連勝！

アックマンのヘタレ化！！

アックマンに関しては書いているうちにこっぴなってしまいました。

ヤムチャとカイジのために悟空の出番が激減してしまいました、ご容赦ください。

## 4人目の狸

気絶したアックマンを試合会場の外に運んでから、オレは再び会場に戻ってきた。

「次の相手はちゃんとしたやつなんですか？」

アックマンとの脱力感が残る試合もあつてか、オレの中で次の対戦相手に対するハードルが上がっている。

「ひひひっ、調子に乗るでないわ……最後の2人はとんでもない達人なの……」

つい先ほどまで焦った様子を見せていた占いババだったが、今は余裕を取り戻している。

それほど次の選手に自信があるのだろうか、こちらの期待も高まる。

「やっと出番がきたぞよ……！」

「はいはいはい……と」

「……………」

現れたのは狐と狸の面を付けた2人組、狐面の方は声や体付きからして老人のようで、狸面の方は背も高く見た目にもかなり鍛えられた体だ、どちらも佇まいからしてただ者ではない。

何も喋らない狸面が一步前に出てくる、こいつが4人目の選手なのだろう。

強さにこだわることにはやめたオレだが、強い相手と闘うのは楽しい、これはオレやキーニの生まれながらの気質らしい。

狸面は唐突にこちらに礼をよこした、闘う前の一礼だ、クールに見えてかなりやる気満々のようだ。

こちらも礼を返し構えをとる、相手もすでに構えをとっている、奇妙なことにオレたち構えは全く同じ構えだった。

占いババの開始の合図を待たずに飛び出す、これまた同じ姿勢で飛び込んでくる狸面に渾身の一発を叩き込んでやろうとしたとき、突然狐面がオレたちの間に割り込んできた。

「まあそう焦りなさんな、ババ様わしらはこやつらと思いつきり闘ってみたいと思います。狭いここではなく、外の競技場でやらせ

ていただいてもよろしゅうございますかいな」

その提案はオレからしても大歓迎だった、狸面も賛成のよう構えを解いて占いババの答えを待っている。

「ほう……なるほどな、いいじゃる思いきりやるがよい」

オレたちは悪魔の便所を後にし、競技場に向かった。

先導する占いババ勢の後ろを歩く、こちらに背を向けているのにお面の2人組にはまるで隙がない、想像以上の実力かもしれない。

こちらも体に気を十分に巡らせ、戦闘態勢を整えていると隣を歩いていたクリリンに話しかけられた。

「おいカイジ、狸の方を倒せばチャンスだぜ。相手の狐面はたいしたことなさそうだしな」

「うん、そうは思わないけど……むしろ狐面の方が……悟空はどう思う？」

オレの目が果たして正しいのか、後ろを歩く悟空に話を振るが何故か答えは返ってこない。

振り向くと悟空はどこかぼーとした様子で狐面の背中を見ていた。

「何だどうしたんだ？ 疲れたのか？」

不思議に思ったクリリンが訊ねる。

「いや疲れてねえけど、オラまだ闘ってねえし……」

「でも何か変だぞお前……？」

「あいつ、良いニオイがする……」

「良いニオイ？」

悟空曰く、狐面から良い二オイやら嬉しい二オイがするらしい、生憎とオレには変わった二オイは感じられなかったが……。

視線を再び前に移す、相変わらずまるで隙のない2人が歩いている。

その時、ふと狸面の背中に既視感を覚えた、何故かは分からないがその背中をどこかで見たことがある気がした。

競技場に着くと占いババ勢は集まって何かを話し始めた、次の選手であるオレは舞台上上がりそれが終わるのを待ち、他のみんなは雑談している。

「へっへっへ、そりゃ楽しみじゃわい」

ようやく話が終わったようで占いババと狐面が舞台の端に移動した。

残った狸面がこちらを向く、オレたちは再び互いに一礼した。

顔を上げたとき面で隠れて見えない相手の顔が笑った気がした。





あつた。

飛び出したカイジは最初からフルスロットルで攻撃を仕掛けた、放ったのは高速の蹴りの連打、その速さは足が何本もあるように見えるほどだ。

その暴風のような蹴りを狸面は苦もなくかわしていく、周りの驚く声が聞こえたがカイジにとっては想定内のことだった。自分と同じ構えならば、自分と同じように回避に特化していてもおかしくない。

いくら蹴りを放つても全く当たる様子のない狸面を見て、これ以上は無駄と悟り攻め方を変えるカイジ。大きく距離をとり足に重点的に気を巡らす、今度は攻撃の速さではなく動きの速さで攪乱する作戦だ。

狸面の周りを縦横無尽に駆け回りながら徐々に接近していく、足を気で強化したときのカイジのスピードは悟空よりも上、武天老師の目でも捉えることができないほどに速い。

（今だっ！！）

カイジが背後を取る、狸面は完全にカイジを見失ったように見える。

「宇宙站落下!!」

繰り返したのは気を込めた渾身の踵落とし、死角から襲いかかるその技は狸面を完全に捉えたかに見えた、しかし当たる直前に狸面は初めから気づいていたかのようにカイジの方へ振り向いた。

構わず足を振り抜くカイジ、確かな手応えと共に轟音が響く。

「なっ!?!」

驚愕に瞳を揺らすカイジ、狸面はカイジの踵落としを高く振り上げた自分の足で受け止めていた。

(ヤバイっ!!)

今の自分が隙だらけと気づき、すぐに離れようとしたカイジだったが、足を掴まれることでそれを阻まれる。

狸面はすぐさまカイジを空に放り投げる、投げられた勢いもありカイジは空中で体勢を直すこともできない。

「フォジャンキヤク  
「火箭脚」」

カイジを追うように飛び上がった狸面が鋭い蹴りを放つ、腹を狙ったその蹴りをカイジは両腕でガードするが、攻撃はまだ終わらない。

ソウジダオタンキヤク  
「洲際導弾脚」

蹴った勢いで更に上空へ舞い上がりカイジを蹴り落とす。

「があっ!!!」

フーチョンホンジャジー  
「俯沖轟炸機」

舞台に叩きつけられるカイジ、体を回転させながら落下してくる狸面はそのまま更なる追撃態勢に入る。

ホンジャキヤク  
「轟炸脚」

全体重に落下の速度、加えた回転、全てが集約された痛烈な蹴りがカイジの頬に突き刺さり、その体は地面を数回バウンドしてから舞台の外、水の中に消えていった。

「カイジっ！！！！」

呆然とする一行の中でいち早く自分を取り戻したクリリンが、慌てて水に飛び込もうとするが、その動きを武天老師が遮った。

「まだ鬪いは終わっておらん、部外者が鬪いの場に入ることは許されんぞ」

「し、しかしカイジは既に場外に……！！」

納得がいかないクリリンは食い下がるが、武天老師はどこ吹く風といった様子だ。

「鬪い」はまだ終わっておらん、見てみい」

武天老師の視線をたどると、そこにはいまだ構えを解かない狸面の姿、舞台中央で微動だにしないその姿は、カイジが戻ってくるのを待っているようにも見える。

占いババもそれを容認していた、これは試合前に頼まれたことで、彼らの納得するまで鬪いを止めないよう約束していたのだ。



(後は悟空に任せて、オレは休むか……)

ゆっくりと目を瞑り、さして抵抗もせず湖の底へ落ちていく。

その時、1人の少年の顔が頭に浮かんだ。

ウパ、オレより年下のウパ、父親を殺されたウパ。

(そういえば……オレたちはウパの父親を生き返らせるためにドラゴンボールを集めてるんだっけ……)

理由は違えど、カイジは自分と同じように親を失ったウパに仲間意識(同族意識)を抱いていた。

(ここであきらめるわけにいかない……!!)

カイジの心に再び火が灯る、その火は以前よりも大きく燃え上がる。

気とは自分の精神状態の影響を強く受ける。

断固たる決意、ウパの父親を生き返らせるという目的ができたカ  
イジの体からは限界を超えた気が生み出されていた。

「風林火山……！！」

かつて内面世界で使った奥義、完成形にはおよばないながらも、  
この時カイジの戦闘力は普段の倍以上に跳ね上がっていた。

(行くぞっ！！)

カイジは爆発的な推進力で水面に向かった。


浮かび上がってきた気泡、おそらくはカイジのものであるそれを  
見てクリリンたちはにわかに沸きたつ。

「おい、カ」



カイジか、そう言おうとしたヤムチャの声を遮ったのは水面が弾ける轟音、激しい水飛沫とともに現れたカイジは、頬が赤く腫れてはいるが先ほどよりもすっきりした顔をしていた。

カイジの思考はクリアなものになっていた。

この狸面が何処の誰で、自分とどんな関係なのか、どうでもいい。

目の前にいるのは自分の試合相手、倒すべき敵、今はそれだけで十分だ。

舞台中央で向かい合う2人、かたや大柄に狸面の男、かたやびしょ濡れの目付きの悪い少年、奇妙な光景だが互いの発する闘気がそんな感情を抱かせない。

「……今回は本当に第2ラウンド開始だな」

アックマンとの闘いを皮肉ったカイジは、今一度未完成の風林火山を使う。

白く発光するカイジの体、その不思議な光景に唯一狸面を除いて全員が目を奪われる。

それを見て狸面は隠された口元を楽しげにゆがませた。



#### 4人目の狸（後書き）

ユツウツァンルオジア  
宇宙站落下  
フオジャンキヤク  
火箭脚  
ソウジダオタンキヤク  
洲際導弾脚  
フイチヨンホンシヤジ  
俯冲轟炸機  
ホンジャキヤク  
轟炸脚

上記の技は全てシャーマンキングの李白竜というキャラクターの技が元ネタです。一部中国漢字がケータイで表示できないので日本語に変換しました。

作者は気の身体能力の強化についてはH×Hの念を参考にしています。

## カイジに策あり

“ 風林火山 ”

全身の気をコントロール、爆発的に高め、一時的に何倍もの力を手に入れる技。

今のオレが使えるのはその出来損ないで、力の上昇率も低いし持続時間も短い。

オマケに気の消費が激しいのでそう何度もは使えない、使うのは勝負所と

「初っぱなだっ!!」

全速で前進、白い光の軌跡を描きながら狸面に肉薄する。

まずは闘いのペースを持つていくことが大切だ。

ヤツの実力はいまだ底が知れない、“ 風林火山 ” を使っても勝てないかもしれない、でも終始こちらのペースで闘えれば、あるいは勝機があるかもしれない。

「らあっ!!」

飛び上がり、狸面の側頭部に膝蹴りを繰り出す、当然腕で防がれるがそれは予想済みだ。

蹴りの勢いを利用して、狸面の右腕を支点に滑るように回転、背後を取る。

「ベイダア  
背打!!」

相手の力を利用した体当たりで狸面の体を弾き飛ばす、抜群の手応えを感じたが、狸面は難なく受け身をとって構え直した。

憎たらしいほど見事な体捌きだ。

追撃をかけようと踏み出そうとした足が突然ガクリと沈んだ。

「……………!!」

体から気が急激に抜けていく、風林火山が解けるのが予想以上に早すぎる。

オレがもたついている間に狸面は体勢を整え、攻撃を仕掛けてくる。

こちらもなんとか体勢を立て直し迎え撃つ。

一瞬で大量に気を消費するのはかなり体に負担がかかるようだ。正直あと1回くらいしか耐えられそうにない。

放たれた中段蹴りを屈んで避ける、それを見越したように襲いかかってくる膝蹴りを、真横に体を転がしてなんとか避ける。

大きくバク転して距離をとる、8mほど間をあけて構える。

頬に僅かな痛みと共に血が流れる、2発目の膝蹴りが掠っていたらしい。

狸面が追撃を仕掛けてくる様子はない。

オレは嘗められてる、僅かな自尊心に傷がつく、でもこれはチャンスでもある、ヤツの鼻を明かすチャンス、何よりもドラゴンボールの為のチャンス、活かさないわけにはいかない。

攻勢に出る、狙うのは頭部。

「そのふざけたお面弾き飛ばしてやる!」

まずは顎下からかちあげるような蹴りを放つ、身長差ゆえに飛び上がりながら。

片手で防がれるが、まだ終わりじゃない、飛び上がった状態のまま体を捻り、回し蹴りを繰り出す。

上体を反らしてかわした狸面に、地面に下りたオレは休む間も与

えず、再び襲いかかる。

上体を反らしてままの狸面の顔面に打ち下ろすように拳を放つ。

「グッ!?!?」

顎に衝撃を受け視界がぶれる、ヤツがバク転で拳を避けつつ、サマールトキックのような形で反撃してきた。

折れそうになる膝を必死に奮い立たせる、今止まったら意味がない。

「うおおおおオオオオオ!!!」

気で足を強化し一瞬で距離を詰める、まずは左の脇腹を打つ、度重なる頭部への攻撃に意識を集中させておいてからのボディブローはさすがのヤツも少し反応が遅れる。

そしてボディに意識を割いた結果、微かに緩んだ頭部への警戒をオレは見逃さなかった。

身長差を考慮し弧を画くように放った拳は、まるで餌を取るアロワナのように見える。

「その面見せるおおお!!!」

しかしオレが放った渾身の拳は、首もとを掠めるだけでクリーンヒットすることはなく、逆に痛烈なカウンターを食らってしまった。視界が回り、自分が吹き飛ぶのがわかる。

両手両足、指の先端まで力を込めて地面に踏ん張り、場外に吹き飛ばされるのを防ぐ、今湖に落ちたら戻ってこれる気がしない。

突き立てた指が舞台の床を抉る、片足が舞台の外に出たとき、ようやく体は止まった。

這いつくばるようになっている顔を上げる、そこには相変わらず何ともないかの様に構える狸面の姿が　いや、微かに、微かにだが頭部に気が集中しているのが見える。

気の集中、つまりは意識の集中、ヤツは頭部への攻撃を警戒しているということだ。

ビビリやがったな……!!

あまりにも作戦通りな展開に笑い出しそうになるのを必死に抑える。

面を見せると叫んだのも、執拗に顔面を狙ったのも、全てはこのための布石。

痛む体を跳ね起こす、昂揚感からか、痛みを感じない。



「次の攻撃……防げるもんなら防いでみやがれ!!!」

安い挑発で相手を誘う、問題はここで乗ってくれるかどうか……。

「……………」

狸面が無言で足のスタンスを広くして、腰を低く構える、どつちから乗ってきたようだ。

「面を取れえええ!!!」

叫びながら突っ込む、あくまでも面を狙ってるよう思わせるのが大切、この作戦の肝だ。

相手の少し手前で跳躍、空中で回転を加えながら勢いをつけて放つのは、気の籠った踵落とし。直撃の瞬間、狸面が頭上で腕を交差させガードしようとするのが見えた。

轟音、何かが碎ける音。

砕けたのはお面ではなく舞台の床、オレは踵落としを狸面ではなく地面に振り下ろしたのだ。

予想だにしなかったたろう事態に狸面の体が一瞬硬直する、両腕は頭上に構えたままだ、さらに発生した大量の石つぶてがオレの姿を隠す。

これが最後にして最大のチャンス……！

即座に風林火山を発動、体中の全ての気を絞り出す。

「だりゃあ……！」

右、左、右、がら空きのボディに左右の連打、一発一発に必殺の威力を籠める。

腹へのダメージでガードが下がったところを、今度こそは頭部への攻撃。

振り上げた足を狸面の首に引っ掛ける、ちょうど鎌を添えるように。

相手も気づくがもう遅い、全力で振り下ろし、ヤツの顔面を地面に叩きつける。

叩きつけられた勢いのまま地面を滑る狸面は、そのお面の破片を撒き散らしながら、やがて場外、湖に落ちていった。



「ここにおる全員が知っている男じゃ、まあ面識があるのはわしだけじゃがの……」

「い、いつたい誰なのよアイツは？」

「ヤツの正体は」

武天老師の言葉は轟音と激しい水飛沫によって遮られた。それはついさっきカイジが湖を飛び出した時の様子と似ていた。その場の全員の視線が音の源に集まる。

そこにいたのは狸面、いや既にお面は壊れ、彼の顔を隠すものはない。

黒髪黒目、不敵な笑みを浮かべ、その体は白い光に包まれていた。

「……父さん……!？」

狸面の正体はカイジの父、鉄人カイドウその人だった。

「な、なんで父さんが!？」

狼狽するカイジにカイドウは満面の笑みをおくる、それは子の成長を喜ぶ親の顔だった。

「ちよつと見ない間に強くなつたなあ……、お前の成長に敬意を表して、オレの本気を見せてやろう」

途端に輝きを増す白い光、その正体は完成された“風林火山”の光、カイジのそれとは比べ物にならないほど力強い光。

息を呑むカイジ、驚愕に固まった体を動かさそうと思ったときには、既にその体は宙を舞っていた。

「っ!?!?!？」

混乱するカイジをよそに、彼を放り投げたカイドウは笑いながら、腰だめに構えた両手に増幅した全ての気を集中した。

「かゝめゝはゝめゝ」

集中した気が更に密度を濃くする、目を開けていられないほどの

輝きがカイドウの手に集まる。

「波————っ！！！！！」

自分に迫る巨大な光を見て、カイジは平静を取り戻し、同時に勝利を確信した。

父は自分とアックマンとの闘いを観ていなかったらしい。

「巫門遁甲」

これ以上ないという絶好のタイミングで発動、気の流れに乗りカイドウの背後を取る。

（勝った……！！）

再び勝利を確信、意識を断つべく手刀を振り下ろす、しかし数瞬前までそこにいたはずの父は魔法のようにその姿を消していた。

「えっ!？」

呆気に取られるカイジ、その時下で見ていた悟空は、カイジが背後を取った瞬間、その更に背後に現れたカイドウの姿を捉えていた。

「後ろだーっ!!!」

悟空の叫びも空しく、闘いに終止符を打つ一撃が放たれる。

262

「知らなかったのか? “巫門遁甲” を使える者に “巫門遁甲” は通じない」

そんな言葉を聞きながら、カイジの意識は暗転した。

## カイジに策あり（後書き）

背打  
ベイダア

背中で相手を押し出すように体当たりを繰り返す。

元ネタ シャーマンキング

父カイドウはシャーマンキングの麻倉幹久をモデルにしております。

シャーマンキングが好きすぎて、そればかりになってしまいました。



## 親離れ子離れ

たゆたう意識の中、思い出すのは父との厳しい修業の日々。

普段は穏やかな父、こと武術に関しては妥協など全く許さなかった。

武術を教えてくれと言った時、初めは反対された。武術の厳しさを知っているがゆえの父の優しさだったのかもしれない。

中途半端な覚悟で武術に手を伸ばせば身を滅ぼす、そう言われた。

『中途半端なんかじゃない!!! オレは真剣に武術を習いたいたいんだ!!!』

本当にそうだろうか、今思えば当時のオレの言葉は所詮上辺だけのものだ。

現実の厳しさ、辛さ、残酷さ、何も知らない希望に満ちた言葉。

今はどうだろう、悟空たちと出会ってから、自分を見つめ直すことが何度があった。



目を覚ますと同時に感じたのは頬の痛み、微睡もつとする意識を文字通り叩き起こされる。

「ちよっ、おま……」

「起きろカイジ〜!!」

ビシッ

バシッ

オレが起きたのに気づかず、頬を叩くのを止めない悟空。

「ちよ、もう起きてるって!!!!」

「何だ起きてたんか」

特に悪びれた様子もなく、飄々とした態度の悟空に少しイラツとする。

こいつには武術より先に、常識や礼儀というものを教えた方が良いと思っ。

田舎育ちのオレも常識があるとは言えないが、悟空よりましなはずだ。

周囲を確認する、オレはベッドの上に寝かされていた。

すぐ傍に窓があり、外を覗くとまだ日は高い、そう長い時間寝ていたわけではないようだ。

「悟空、試合はどうなった？」

オレの次の選手である悟空がここにいるということとは、試合はもう終わったのだろう、結果が知りたい。

「勝ったさ！！ それより早くしねえと、じっちゃんたち行っちゃまうぞー！！」

じっちゃん？ 武天老師様のことか？ 武天老師様がいったい何処に行くというんだ。

「よくわからんが……、それよりオレの父親を知らないか？ あの狸の面を被っていた人なんだけど……」



「そっか……、1日だけ戻ってきただけで生き返ったわけじゃないんだ……」

「おう、……悪いなカイジ」

先ほどと同じ場所、悟空が去った医務室で、オレは父が現世にいる理由を聞いた。

死んであの世に送られた父は、そこで偶然にも兄弟子である孫悟飯、つまり悟空のじっちゃんと再会したらしい。

生前から仲の良かった2人は、しばらく天国で一緒に行動していたそうだ。

そしてある日、占いババが2人の前に現れた。

「孫悟飯さんは悟空が占いババの宮殿に来ることがあれば呼んでほしいと、彼女に頼んでいたらしい。」

更に、占いによってオレが悟空と共に宮殿に訪れることを知っていた占いババは、  
ついでと言わんばかりに父も一緒に現世に連れてきた、というわけ

だ。

「じゃあ、あの狐のお面を被った人が孫悟飯さんだったの？」

「ああそうだ。しかし、巡り合わせとは面白いもんだなあ、まさかお前が悟飯さんの孫と一緒に旅をしているなんて……」

「……………きつと悟空に引き寄せられたんだよ、あいつには不思議な力があるんだ」

腕っぷしだけじゃない、人を引き寄せる力、こいつと一緒にいれば面白そうだ、そう思わせる何かがある。

「人を引き寄せる力が……、確かに面白そうながきだったな」

「ああ、悟空は面白いんだ」

出会ってから今までたったの2週間、短いながら非常に刺激的な出来事がいっぱいあった。あいつと一緒にいれば退屈とは無縁そうだが、心からそう思える。

ふと、何かを確かめるように父さんはじつとオレの顔を見てきた。

「それにしても……」

「うん？」

一度言葉を切り、再びオレの顔をじつと見る、そして満足したように笑みを浮かべた。

「良い面構えになったなカイジ、一人前の男の顔つきだ。俺も戻ってきた甲斐があるってもんだ」

「そうかなあ……」

武天老師様もオレの顔を見れば修行の成果が分かると言っていた。以前のオレはそんなに情けない顔をしていたのだろうか……。

「何かの覚悟でも決めたか？ まあ男の決意ってもんは人に自慢するもんじゃないけどよ、俺はお前の親だ、良かったら聞かせちゃくれねえか……？」

興味津々といった様子の父さん。オレも別に隠すつもりもない、



それに父さんには聞いてもらいたかった。

「武の頂”を指す、そう決めたんだ」

オレの言葉を聞いて、父さんは顔を曇らした。

「あゝカイジ…、確かに俺は死ぬ間際に、お前なら武の頂に至れる、そう言った……」

一度言葉を区切り、言いづらそうに続ける。

「でもな、今は少し後悔してんだ、俺の言葉がお前の人生を縛ってしまっただんじやないかってな……」

勝手な言い分かもしれないがな、修業中以外ではかつてみたことがないほど真剣な表情の父、心からの言葉なのだろう。

「お前が武の頂を目指すことは俺は嬉しい、でもそれが俺の遺言に従ってと言う理由なら」

「違う、そうじゃない」

思わず父さんの言葉を遮るように言ってしまった。

「確かに切欠は父さんの言葉だった、けどこの決意はオレの、オレによる、オレの為のものなんだ。」

オレは今、オレの意思で武の頂を目指してるんだ」

オレの言葉に一瞬呆気にとられる父さん、が直ぐに先ほどまで以上の笑みを浮かべる。

「そうか……、じゃあ“武の頂”とはいったい何なのか、それも教えない方がいいのか？」

「うん、自分で見つける」

迷いなくキツパリと答えたオレの目を、またじつと見る父さん、そして

「親の見ぬ間に子は育つてか……、先人たちの言葉ってのは本当に馬鹿にできない……」

そう呟いた父さんは笑みを浮かべながらも、どこか寂しげだった。



## 家族（前書き）

今まで場面転換の際「」で区切ってきましたが、  
今回からは        で区切ろうと思います。  
後者の方がスッキリしていたので。

以前までのもいずれ編集するかもしれませんが、

## 家族

「俺とラニ、お前の母さんはちょっと普通の人間とは違うんだ」

父さんがそんなことを言い始めたのは、2人でみんながいる競技場に向かっていている時だった。

「急にどうしたの？」

父さんが自分や母さんの事を話したことはあまりなかった。

覚えてるだけでも3回、いや4回か、いずれにしろ片手で数えられるくらいだ。

オレ自身、物心つく前に死んでしまった自分の母親に興味を抱かなかったわけではない。

しかしこの話題になると、父さんが寂しそうな顔をするので、オレから訊ねるのは意識的に避けていたのだ。

「なに、お前が死んで天国に来るまでもう会えないんだ。

一度くらい俺たちのことをちゃんと話してもいいかなと思ってな」

父との別れ、悲しくないわけじゃないが、しょうがないことと割りきるしかない。

今こうして話せているだけで奇跡なんだ、これ以上を望むのは我が儘だ。

「といつても、アイツとの約束で全てを話すわけにはいかないんだがな！！それでも聞くか？」

「うん、聞きたい」

断る理由などなかった。

ただ、後にオレは、この時父さんの口から語られた内容は、オレの想像を遥かに超えるともないものだった、と過去を振り返ることになる。

「ほえ~~~~~そういうことじゃったか……！ちっとも知らなかったわい」

「ほお〜」

カイジたちが競技場に戻ってきた時、そこには狐の面を取った孫悟飯を囲むように全員が舞台中央に集まっていた。

「どうかしたんですか、悟飯さん？」

一団に近づきながら、珍しい様子を見せる孫悟飯にカイドウが訊ねる。

「おおカイドウか、いやこの玉がお…」

興奮冷めやらぬ様子の孫悟飯、その手には星の入った小さなボールが握られていた。

「あ、ドラゴンボール」

「何だカイジ、知ってんのか？」

若い頃は世界中を旅して、様々な知識に精通したカイドウでも、さすがにドラゴンボールは知らなかった。

好奇心から詳しい話をカイジに聞こうとする、そんなカイドウにブルマが歩み寄る。

「カイジ君のお父さんも聞きますか？ ドラゴンボールの話」

「？」

そしてブルマはドラゴンボールの力、それを巡る悟空やカイジの旅の様子を語り始めた。

どんな願いも叶えてくれる神の龍、それを呼び出すための魔法の珠を巡る旅。

ブルマの口から語られる、かつて聞いたことのない冒険活劇に、カイドウは関心しきりだった。

「それで今はウパって子のお父さんを生き返らせようとしているわけ、そうよね孫くん？」

「おう！！ あと一つで全部揃うんだ、ウパ喜ぶぞ〜！！」

ブルマ自身が体験したわけではないこともあるので、最後に悟空



に確認をとる。

「はあ〜、このちっこい玉っころにそんな力が宿ってるなんてなあ……」

そこでカイドウは首をぐるりと後ろに向け、カイジを見た。

「カイジ、お前もこの玉探しに協力してんのか？」

「うん、そうだけど」

突然の質問に驚きながらもしつかりと答えを返すカイジ、そんな息子に父カイドウはカイジの頭をワシヤワシヤと強く撫でる。

「それでいい!! 人様の役に立ってこそその武術だ、よく分かっているようだな」

満足そうにそう言うカイドウ、一方誉められたカイジは複雑な表情を浮かべている、誉められたことに悪い気はしないが、頭を撫でられることには若干の抵抗がある、そういう年頃なのだ。

なんとか父の手をどけたかったカイジ、しかし周りのみんなが妙に温かな眼差しでその様を見ているので、結局カイジは父のされる

がままとなるのだった。

「さて、それじゃ悟飯さん、そろそろ帰りますか」

「うむ、そうじゃの」

楽しかった時間は終わりを告げ、ついに別れの時がきた。2人はあの世の住人、いつまでも現世にとどまっているわけにはいかない。

「あの……お二人とも、本当に生き返らなくていいんですか？」

思わずブルマが呼び止める、神龍に頼めば2人は生き返ることができる。

悟空とカイジ、それぞれのたった1人の家族がいなくなることに悲しみを覚えたのだ。

「はっはっは！ かまうことはないぞよ、わしはあの世も結構気に入っておる！」

ピチピチした娘もたくさんおるしのうー！」

「俺もカイジのことだけが気がかりだったからな、こいつが一人前になった以上もう未練はないな」

2人の言葉に同意するようにならずに悟空とカイジ、彼らにも引き留める意思はないようだ。

その様子を見て、ブルマも納得し口を閉ざす、当人たちが納得しているならこれ以上引き留める理由もないのだ。

「老师様そして友達の皆さん、これからもこの腕白ぼつずをよろしくお願いします」

「うちの息子もよろしくやってください」

終始笑顔を浮かべている悟空に対して、カイジは少し恥ずかしそうにしている。

するとカイドウがその大きな手をスッとカイジの頭に置いた。

「？」

「でっかくなれよカイジ、いつかあの世であつたら酒でも飲もう」

そう言ってカイドウは再びワシヤワシヤとカイジの頭を撫でた、  
今度ばかりはカイジも抵抗する気は起きなかった。

「では皆さんもいずれあの世でお会いしましょう」

「武天老師様、今一度お会いできて嬉しかったです」

「おぬしらも達者でな……と言つのは変かの……」

「はっはっは」

いよいよ別れという時、カイジがカイドウの元に歩み寄った。

「会えて良かった、天国で母さんと仲良くな」

「ああ、お前も長生きしろよ」

短いやりとりだったが、親子の思いは十分に通じていた。

「では、ごきげんよう……」

「じゃあな……」

フツと煙のように2人の姿は消えた、後には何も残らず、まるで狐に化かされたような出来事だったが、カイジの頭には父の大きな手の感触が確かに残っていた。

不意に悟空とカイジは空を見上げる、何もない空だったが、2人はそこにかけてがえのない家族を幻視した。

「じいちゃん！ オラ今度またシツポ生えたら、シツポも鍛えてもっともっと強くなるからなっ！！」

大きな声で決意を言葉にする悟空、それを横で聞きながらカイジも心の中で断固たる決意を胸に刻んだ。

（武の頂に至る、鉄人の名に恥じないほどの武術家になって、いつかまた父さんに会っ……！！）

胸の前でギュッと拳を握った。

家族（後書き）

カイジとカイドウの会話は上手くまとめられなかったのでもっとくりカットしました。

いずれ明かされる予定です。

## 悪の華

「ふむふむ……おや？ 動いておるな……」

「動いてる………？」

目の前には発光する大きな水晶玉、今オレたちは占いババとの約束通りドラゴンボールのありかを占ってもらっている。

「つまりこの走っておる車の中にその玉があるのじゃ！ 見えるか？」

「うん！ 見える」

水晶玉に映し出されたのは、どこかの道路を走る1台の車、町中というわけではなくどこかの荒野を走っている、その中にドラゴンボールがあるらしい。

ブルマさんはそれに納得いかないらしく、カチカチとリーダーを忙しなく操作している。



曰く、車程度ではドラゴンボールの電波を遮ることはできないらしい。

「場所は！？ どこを走ってるの！？」

占いババはある方向をスッと指差す。

「この方向200？のあたりをこっちに向かって来ておる」

（こっちに向かつてる……偶然か？）

残った1つのボールの持ち主がこちらに向かっている、こちらのボールを奪う気かも、もしかしたらレッドリボン軍の残党かもしれない。

邪悪な笑みを浮かべたマッドサイエンティストの顔が頭に浮かんだ、油断はできない。

「じゃあオラその車を探してくる！！ でもってドラゴンボールを譲ってもらってくる！！」

オレの心配をよそに随分と楽観的な思考でそんなことを言い出す悟空、普通に考えてそんな簡単に譲ってくれるとは思えないんだが

……。

「オレも行く」

さすがに悟空1人に行かせるのは少し不安だ、ドクター・ゲロのこともある。

「そうね、この車なんだか怪しいし、もし普通の人だとしても力イジ君も一緒に行った方が安心かも……」

ブルマさんの意見にみんなも頷く、悟空が一般常識に欠けていることは周知の事実のようだ。

「うし、じゃあ行くか!?!」

「ああ」

「筋斗雲よーい!?!?!?!?!」

空の向こうから高速で飛んでくる2つの雲、筋斗雲を使えば200?なんてあっという間だ。

「オラたちドラゴンボールが集まったら直接カリン塔に行くよ」

「全部終わったら、ちゃんと戻ってくるんだぞ！」

そんなクリリンの言葉に、オレはふとカリン様との約束を思い出した。

(そういえば、もう1度カリン様と修業するって決めただった……)

どうせカリン塔に行くんだから戻ってくるのは二度手間だ、残念だがみんなとはここでお別れだ。

その旨を伝えると、みんな惜しみながらも別れの言葉を言ってくれた。

再会は3年後、今度は選手として天下一武道会の舞台に立つ。

「更に成長したお主の姿、楽しみにしてるぞい」

武天老師様のありがたい言葉を胸に刻み、オレたちは最後のドラ

ゴンボールに向かって飛び立った。

「おっ!!」

しばらく飛んでいると驚異的な視力を誇る悟空の目が何かを捉えた。

「いたっ!! あの車だっ!!」

悟空が見ている方向に目を凝らす、しばらくするとボンヤリとだが車のような影が見えてきた。

「あれか……?」

「ひゃっほ————い!!——!!」

「あ! おい待て!!——!!」

一気に加速する悟空の背中を追いかける形で後を追う、しかしあ  
ろつことか悟空は筋斗雲から直接、走る車の屋根に飛び降りたのだ。

「ば、馬鹿野郎!!」

オレも慌てて地上に下りるが、時すでに遅く、車は急激なカーブ  
を描きながら道路から大きく脱線してしまい、高速スピンをしてか  
ら、ようやく止まった。

車に振り落とされながらも器用に着地し何事もなかったようにし  
ている悟空にゲンコツをお見舞いする。

「いてえ!! 何だよカイジ!!」

「何だよカイジ!! じゃない!! 乗ってるのが一般人だった  
らどつするんだ!!」

直ぐには理解できなかったのか、オレの言葉を聞いた後数秒の間  
を置いた悟空はただ一言、

「やべっ」

そう呟いた。

「やべっじゃないーい！！！！」

焦るオレをよそに、悟空はやたら飄々としている。なんでも車の中の人物と面識があるらしい。

悟空曰く“前にオラたちを殺そうとした悪いヤツ”だそうだ。

「やい、こら出てこいよ！！」

ゆっくりと車のドアが開いた、現れたのは随分と個性的な3人組。

忍者のような格好で刀を背負った獣人、

長い髪、切れ長の目をして、軍服を纏った背の高い女性、

青色の肌、長く尖った耳に道化の格好をしたチビ、

「ふふふ……よくこのドラゴンボールのありがたかったな……」

3人の真ん中に立つチビ、恐らくはリーダーなのだろう、その手にはドラゴンボールが握られていた。

「おめえたち、また悪いことしようとしてるんだろ！ だったら大人しくオラにそのボールを渡せ！」

「くくく……冗談じゃない、お前と一緒にこの私もドラゴンボールを集めてるんだ」

やはり素直に渡す気はないようだ、どうやら悪人のようなので彼ら……ピラフ一味から奪い取っても問題は無いだろう。

向こうも同じ結論に至ったようで、こちらにボールを賭けた対決を持ちかけてきた。

勝った方が全てのドラゴンボールを手に入れる、非常にシンプルな闘いだ。

「どうだ！ 今の条件で約束できるか！？」

自信満々の様子で勝負を仕掛けてくるピラフ、妙な話だ、悟空の実力は知っているはずなのに、お世辞にも戦闘技術を身につけているとは思えない佇まいの彼らが直接対決を挑んでくるなんて。

(何か秘策でもあるのか？ それともただの馬鹿なのか……)

「いいよ！ そんなんでいいなら約束する」

(まあ……たぶん問題は無いだろう)

「こちらが承諾したのを聞いて、ニヤリと笑みを浮かべるピラフ。味、よほど自信があるらしい。

「よしっ！ いくぞっ！」

ピラフの掛け声を合図に、3人は懐から何かを取り出し、地面に放った。

「ホイホイカプセル……？」

3人が放ったのはホイホイカプセルだった、地面に落ちるとともに立ちこめる煙。

(いったい何をするつもりなんだ……？)



先ほどよりも警戒心を高め、煙が晴れるのを待つ。程無くして現れたのは、人間が中に入って操作するタイプのロボットだった。

「それ、乗り込めー!!」

再びピラフの掛け声で動き出した3人は、慣れた動きでそれぞれロボットに搭乗した。

(何か強力な武器でも内蔵しているのか……?)

見た感じ、彼らがこちらに対して強気になれるほどの脅威は感じない、とは言ってもロボットについてなんて門外漢なので一概に判断することはできないのだが。

「ふはははっ!!! 行くぞ孫悟空!! そして……………そういえば貴様は何者だ!!」

「オレはカイジ、どうぞよろしく」

どうやら彼らは今までオレの存在に気付いていなかったらしい、失礼な話だ。

「じゃあ、いくよっ!?!?!」

悟空が戦闘開始の意思を見せたところで、ようやく闘いの火蓋が切って落とされた。

ピ(やばい……2人いるなんて聞いてないぞ?!?!)

マ(どうしましょっ、ピラフ様……)

悪の華（後書き）

ピラフ、シュウ、マイ

通称ピラフ一味の登場でした

負けず嫌い

ピラフSide

孫悟空とはこんなに強いヤツだったろうか……？

捕らえたと思ったら、その姿は幻のように消え、いつのまにか背後を取られている。

そして次の瞬間には天地が逆転しているのだ。

我が最強のピラフマシンを持ってしても全く相手にならない。

だいたい何なんだ、あのカイジとかいう小僧は……！！

事前の作戦通り、孫悟空のシツポを掴んでやるうとしても、いつもヤツに邪魔される。

更にその力も、孫悟空並に強いのだ。

シユウの乗ったピラフマシンは、ヤツのジャイアントスイングで遠くに放り投げられてしまった。

横を見ればマイのピラフマシンも孫悟空によって左右のアームが壊されていた。

いとも容易く分断されてしまい、こちらには奥の手の合体をする暇さえない。

そうこうしている間に私のピラフマシンも孫悟空の凶悪な蹴りによって吹き飛ばされ、岩壁に叩きつけられてしまった。

本日3回目の天地が逆転した視界の中、私は思った。

化け物か…コイツら……

闘いは3分ほどで終わりを迎えた、ピラフ一味のロボットが全て壊れてしまったからだ。

彼らは特に秘策があったわけではなかったようだ、しいて挙げればやたらと悟空の背後を取ろうとしていたのが少し気になったが、

あの程度の動きでは武術家の背後を取れるはずもない、万が一取れたとしても悟空なら何の問題もないだろう。

いずれにしても多人数との戦闘の練習として、オレが常に悟空の背中をカバーしていたからそれ以前の問題だったのだが……。

「勝ったぞ、ドラゴンボールおくれ!!」

「は……はい……」

悟空にドラゴンボールを渡した後、ピラフ一味は粉々になった口ポットの残骸を枕に気絶した。

命に別状はなさそうなので、このまま放置することにする、悪者にはきついお灸を据えることが大切なのだ、と父は言っていた。

「やったー!!!! ドラゴンボール全部そろったー!!!!  
!!!!」

辺りを跳ね回り、喜びを体全体で表現する悟空。

「よしっ!! 悟空、ウパに会いに行こう!!!!」

放っておくといつまでも止まりそうにない悟空を我に返す、オレたちの目的はドラゴンボールを集めてウパの父親を生き返らせることだ、まだゴールじゃない。

「あつ！ そうだった！！ 行くぞ、カイジ！！！」

言つやいなや筋斗雲に乗り飛び出す悟空、マイペースな相棒に溜め息を吐きながら、オレも筋斗雲を呼び、カリン塔に向けて飛び立った。

しばらく飛んでいると、雲を貫き空の彼方まで続いているかのような巨大な塔が見えてきた、カリン塔だ。

「着いたぞ、カリン塔だ！！」

地上にまで響き渡る悟空の声、その声が聞こえたのか、森の中からウパがひょっこりと顔を出した。

「悟空さ〜ん!! カイジさ〜ん!!」

こちらを見上げてブンブンと手をめいっぱい振っているウパ、オレたちはすぐさまウパの下に向かった、最高の知らせを伝えるために。

「よかったーっ!! 2人とも生きていたんだねっ!!」

オレたちが地上に下りて来るなり、ウパは飛びついてきた、興奮しながら喋る話を聞くと、随分と心配をかけていたらしい。

この前のブルマさんといい、ウパといい、オレと悟空は周りに心配をかけまくっていたらしい。レッドリボン軍に勝負を仕掛けるということは、やはり普通に考えれば相当危険なことだったようだ。

興奮するウパをたしなめながら、オレたちは今までのことを説明した。レッドリボン軍を潰したこと、ドラゴンボールを全部集めたこと、今からウパの父親を生き返らせること。

それを伝えるとウパは大喜びしながらオレたちを父親の墓まで案内してくれた。



「父上のお墓はあれです」

ウパの指差す先にはこの前見た時のままの土の山があつた、以前はウパも悲しげな目でそれを見つめていたが、今は希望に溢れた目で真つ直ぐと見つめている。

「よおーし！！ 願いを叶えてもらおうな！！」

「は、はいつー！！」

持ってきた風呂敷を解き、7つのドラゴンボールを地面に並べる、いよいよ神龍のお出ました。悟空はいつもと変わらぬ様子、ウパは若干おびえた様子でボールを見つめている、かくいうオレも握った手が汗ばんでいる、ゴクリと自分の唾を飲み込む音が聞こえる、緊張は隠せない。

「神龍よーい！！ 出てきておくれ！！」

(なんとも気安い呼び方だが本当にそんなんで神様の龍が出てきてくれるのか……?)

そんな疑問を胸に固唾を呑んでボールを見つめっていると、突然空が暗くなった、まだ昼間だというのに辺りを包むのは真夜中以上の暗闇、まさしく神の所行に違いない。

その様子に呆気にとられていると突如ドラゴンボールから強烈な光が発せられた、その中から波打つ一筋の光が空に昇っていく。

空に昇る光は雷鳴を辺りに響かせながら段々と龍の形を為していき、赤い目に長い髭、緑の鱗に立派なたてがみを靡かせた龍、そのゆうに数十mを超える超巨大な体の全てがこの世に現れたとき、世界の果てまでとどくのではないかという咆吼がその口から発せられた。

「う、これが…神龍……!!」

「や、やっぱりすげえな〜!!」

「……………!!」

その圧倒的な存在感に、初めて見るオレやウパはもちろん、あの悟空でさえ体が竦んでいる。

「さあ願いを言え、どんな願いも1つだけ叶えてやるっ…………」

「じゃ、じゃべった……」

悟空の話を一応は信じていたが、実際に見てみると凄まじいものだ、百聞は一見にしかずとはこのことを言うのか……？

「ウパ！ 願いだ！！」

「は、はい……！」

神龍の姿に圧倒されたウパがそろそろと木の影から出てくる。

「お、お願いします……。ボクの殺された父上を生き返らせてください……！！」

失われた命を甦らせる、本当にそんなこと可能なのか……？

「容易いことだ、叶えられん願いはない」

神龍は威厳ある声で堂々とそう言った、直後にウパの父親が眠る土の山に変化が起こる、土の山がモコモコと動き出したのだ。

「ち…父上のお墓が……」

オレたち3人は、その様子を食い入るよう見つめる。

ボコッ！

豪快な音を上げながら土が一気に盛り上がった、中から現れたのは身長2mを超える筋骨隆々の偉丈夫、状況が分からないようにその表情は困惑で満ちている。

「父上~~~~~っ！！！！」

感極まった様子で駆け寄るウパ、飛びついてくるウパを抱えながらも彼の表情から困惑の色は消えない。

やがてはつとした表情を浮かべ、何かに気づく。

「そうだ……、わ…わたしは……」

自分が死んだことを気づいたのだろうか、はたして自分の死を覚えていてというのはどんな感覚なのだろう、考えるだけでゾツとしないな……。

困惑する父にウパが、ドラゴンボールの力で生き返ったのだということを説明すると、彼の表情は今度は驚きに染まった。

「願いは叶えてやった、ではさらばだ」

最後にそんな言葉を吐くと神龍は一瞬で姿を消し、代わりとばかりに7つのドラゴンボールが光を発しながら、空に飛び上がる。

話によれば、この後ドラゴンボールは再び世界中に散らばり、1年の間石になるらしい。

ふと横を見れば、悟空がそのドラゴンボールを狙いを着けるように見つめながら、何やらブツブツと呟いてる。

そして一際大きな光がドラゴンボールから放たれると同時に、悟空は空に飛び上がり、世界中に散らばろうとするドラゴンボールの1つを掴み取った。

そこでようやく合点がいく、悟空が掴み取ったのはおそらくは祖父の形見、確かに今掴まえておけば後で探しに行く手間が省ける。

ウパはそれに気づかなかったようで、地上に降りてきた悟空に、何故今飛び上がったのかを質問している。

そんな様子を眺めていると、後ろからトントンと軽く肩を叩かれた。振り向いてみるとそこにはウパの父親がいた。

「少年、君の名は？」

「オレはカイジ、孫悟空の友達です」

そう言ってオレたちは握手を交わした、握った手は大きく温かい、まさしく父親の手だった。

オレたちが握手している間に、悟空とウパが戻ってきた。

「孫悟空、そしてその友カイジよ！！ 本当にありがとう！！！」

心からのお礼に、オレたちは笑顔で応える。

「いえいえ……」

「へへへ、生き返ってよかったね！」

そんなことを言いながらも、実際オレは若干肩身が狭かった、な

ぜならほとんどのドラゴンボールが悟空1人の手によって集められていたからだ、つまりオレにそこまで感謝される権利はないのだ。

ただ、その場の空気を読んで取り敢えずは謙遜するような形で止めておく、オレはKYではないのだ。

「わたしたちを救ってくれたことを、星の数ほどたくさん感謝する」

そう言って再び握手を交わすオレたち、なんだか申し訳なくなってきた。

「じゃあオラ行く!!」

しばらく4人で話していると、悟空がそんなことを言い始めた。

「えっもう行ってしまっの!?!」

「もう少し居てくれないか、大歓迎したい」

その言葉に別れを惜しむウパ、そしてその父ボラが思わず引き留める。

「うん、でもみんな待ってるから行くよ」

その時、ウパがグルンと振り向いてこっちを見た。

「カイジさんも行ってしまっの!？」

「いや、オレは今からカリン塔に登るから……」

そう言ったオレにウパは不思議そうな顔をする、1度登ったのにどうしてまた、そんな顔だ。

「カリン様との約束があつてね……」

ドラゴンボール集めが終わったらもう一度カリン様の修業を受ける、カリン様には大変な恩がある、この約束は決して破ることはできない、それに



スツと視線をウパから悟空に移す、偶然か必然か、悟空もこちらを見ていた。

空中でぶつかり合う視線、どちらからともなくニヤリと笑う。

「カイジ！ 3年後、楽しみにしてるからな！！！」

「ああ、オレも楽しみにしてる」

その会話を最後に悟空はみんなの下に飛んでいった。

空に消えていく姿をしつかり刻み、オレもすぐ傍のカリン塔に向かって駆け出した。

武の頂とは最強の代名詞というわけではない、それはオレ自身が出した結論だ、しかし

「えっ！？ もう行くのカイジさん！？」

「ああ、1秒だって無駄にできないんだ!!」

しかし、それ即ち負けてもいいと言っただけではない。

「カイジ、手伝おうか？」

「ありがとうボラさん！でも自分の力で登らなきゃダメなんだ  
!!」

オレはもともとから負けず嫌いなんだ、負けっぱなしは性に合わない。

前回よりも速く、それこそ飛ぶようにカリン塔を登りながら、オレは小さく呟いた。

「次は負けないぞ、悟空……!!」

3年後のリベンジを心に誓い、オレは更にスピードを上げてカリン塔を登り始めた。



## 負けず嫌い（後書き）

なんだか週刊連載の打ち切りマンガみたいな終わりかたでしたが……、これで最後のドラゴンボール編は終わりです。

次回はいきなり3年後には飛ばさないで、カイジの修業の話は何話か入れて、カイジというキャラクターを掘り下げていきます。

オリジナルの話になると思うので、なるべく早めに終わらせたいと思います、幕間みたいな扱いになるかな？

拙い文ですがこれからもどうかよろしくお願いします。

## 北へ(前書き)

導入です。

めちゃくちゃ短いです。

北へ

どしゃ降りの中、天まで伸びる巨大な塔の下に1つの人影があった。

その身に纏ったマントを顔の深くまで被っているため、表情は見えない。

ただ、時折マントの隙間から見える、紺色の道着に包まれた細身ながら鍛えられた体付きから、男性であることが分かる。

スツと、徐に曇天の空を見上げる男性、いや空を見上げることで露になったまだ幼さを残した顔付きから、男性というより少年といった方が正しいだろう。

「旅立ちが晴天の下って相場は決まっているのにな……縁起が悪い」

そう一人ごちる少年、表情は厳しく、その鋭い目は忌々しげに鉛色の空を睨んでいる。

「カイジさん」

ふいに、少年　カイジに声がかかった、彼がそちらを振り向くとそこには頭に羽をさした小柄な少年　ウパとその父　ボラが立っていた。

「本当に今日旅立つの？　こんなに酷い天気なのに……」

日を改めた方が良くないか？　ウパの言葉にはそんな意味も含まれていた、しかしカイジは考える間もなく言葉を返す。

「一月前からこの日に旅立つと決めていたんだ、こんな雨くらいで延期にはできないさ」

真つ直ぐな目でそう言いきるカイジに、ウパは説得を諦めた。この2年でこんな時のカイジは決して折れないことを学んでいたのだ。

2年、カイジはカリンとの修業を終えるのにそれだけの時間がかかった。

初めの修業は悟空と同じように、超聖水の壺をカリンから奪い取るというものだった。

悟空が僅か3日でやり遂げたこの修業、カイジはこれに3ヶ月を費やした。

しかしながらカイジはこの結果に不満はなかった、それどころか自分の上達ぶりに驚いていた。

若い頃の武天老師が3年を要した修業を僅か3ヶ月で終えた、この事実にかイジは長い時間をかけた鍛錬、そして重ねた実戦経験が確実に自分の力になっているのを感じた。

しかし、修業を終えたカイジを、カリンは旅立たせることはなかった。

更に1年と8ヶ月、カリンはカイジに気のコントロールの修業を課したのだ。

それはカイジの、気を身体強化に使う闘い方をよく理解してのことだった、本人は気づいていないがカイジは気の扱いに関しては地上でもトップクラスの實力である、カリンの慧眼はそれを伸ばすべき長所と見抜いていた。

朝は早くからカリンとの組み手、その後1日のほとんどの時間を瞑想に割き、夜になったら地上に下りてウパたち親子と食事をとる、そんな生活をずっと続けていた。

そして一月前、ついにカリンから旅立ちの許可が下りた。

カイジは入念な準備をして今日に至る、というわけだ。



「元気でね、カイジさん」

「お前もな、ウパ。ボラさんも長い間お世話になりました」

「私も楽しかった、またいつでも来るといい、歓迎する」

言葉とともに差し出された手、2人は固い握手を交わす。

数秒に渡る長い握手の後、カイジは2人に背を向けて歩き出した。

「カイジの旅に幸あれ！ 私たちはここ、聖地カリンから君のこととをずっと応援しよう！」

背中から聞こえる激励の声に、カイジは振り返らずにそっと微笑んだ。

カリン塔の周りに広がる深い森を抜けたところにある広大な荒野

を見つめながら、カイジは旅立つ直前にカリンから授けられた言葉を思い出していた。

『何やら吉兆が見える……………北へ向かえカイジよ、きっと面白いことが起こるぞ!』

面白いこと、その言い回しに一抹の不安を抱いたカイジだったが、師の言葉を無下にはできない、カイジは義理と人情を重んじる律儀な男に成長したのだ。

「さてと……………」

懐からカリンが用意したコンパスを取り出す、決して壊れることがないというお墨付きの逸品だ。

ピツと1つの方角を差した赤い針、その方角をしっかりと確認して、コンパスを再び懐に戻す。

ザツと、踏み出した一歩、気付けば雨は止んでいた。

「北か……………」

歩き出したカイジの頭の上には、彼の旅立ちを祝福するように虹の橋が架かっていた。



## 未来の英雄

「北へ……北へ……」

面白いことがあるとカリン様に言われ、ひたすら北に向かって1週間、いまだに何も見えてこない。

本当にこの先に何かあるのだろうか……。

燦々と照りつける夏場の太陽が、オレの気持ちを削いでいく。

「はあ……」

今日何度目かわからないため息を吐き、次第に重くなる足をオレは懸命に踏み出した。

?????side

それは突然の出来事だった、最近いきなり現れて、オレたちの村を襲い始めた野盗ども。

今までは村の北側にしか出てこなかったのに、ついにこっち側の道にも現れやがった!!

大切な積み荷を運んでいる村の商人が、護衛として雇われた俺をすがるような目で見ってくる。

ええい、そんな目で見ろな!!

いくら俺様が村一番の力自慢で、ゆくゆくは世界最強の武道家になるだろう稀代の才能を持ったスーパーでグレートでダイナミックな男でも、10対1の状況で勝てるわけないだろう!!

そんなことを考えていたら、奴らがあっという間に俺たちの周りを囲んでいた。

どうすんだこれ!! あばばばばばばばばばばばばばばば!!

いよいよ土下座の覚悟を決めようとした時、目の前の坂の向こう側からフードを被った怪しげな人間が現れた。

いいかげんうんざりしていた北への道のりによつやく変化が訪れた。

どこまでも続くかのような長い坂を越えたら、盗賊と思わしき男たちが1台の荷車を囲んでいた。

「襲われているのか…!!」

坂の頂上から一気に駆け出す、囲まれてる側の男がこちらに気づくが、盗賊らしきやつらはきづいていないようだ。

(チャンス!! 一気呵成だ!!)

更にスピードを上げて坂を駆け下りる、気の強化によって常人では捉えられない速度に達する。

その速度のまま飛び上がり、一番近くにいた男を足蹴にして集団の真ん中に躍り出る。

「な、なんだ!？」

予想外であろうオレの出現に、余裕を決め込んでいた集団に戸惑いが生まれる、この状況は2年前のレッドリボン軍基地に突入したときとよく似ている。

あの時は20人ほどを相手に2分もかかったが今回は違う、相手は10人だし、オレの実力もあの頃とは比べものにならないほど上がっているはずだ。

( 修業の成果、試させてもらっ……！！！！ )

いまだに呆気にとられている盗賊に気絶する程度に威力を抑えた手刀を叩き込む。

今のオレの最高速度で動きながら、すれ違いざまに1人、2人、3人、4人と近いヤツから順に倒していく。

敵からはオレの姿が突然消えたと思つたら、何故か仲間が次々と独りでに気絶し始めたように見えるだろう、彼らの目で捉えられる速度ではないはずだからな。

5人、6人、7人、8人、そして9人目を倒して最後の1人を倒そうとした時、予想外の事態が起きた。

## 野盗 side

ここ最近の俺たちの暮らしは、盗賊として順風満帆と言っても過言ではないくらい充実している。

それというのも2週間前にあの人が俺たちのボスになってくれたおかげだ。

加わったばかりの新参者が、いきなりボスを殺してその座を奪い取った時はどうなることかと思っただが、今のボスは前のボスと比べて圧倒的に腕が立つ、それに賢い。不満を抱くヤツなんてあつという間にいなくなっちまった。

それからの俺たちはまさに大胆不敵、白昼堂々と村人を襲っては酒、女、食い物をがっぽりといただく。

俺たちは向かうところ敵なしの最強の盗賊団になった……………はずだった。

あの日の朝も、というか今日の朝も俺たちは日課のように、道行く荷車を襲った。

最近カモにしてるこいつらの村は、平和ボケしたヤツばかりで俺



たちに対して満足な対策すらとれていない、少し脅せばすぐに荷物を差し出す軟弱なやつらだ。

そんなことが何回か続いたので、今回はボス是不参加だった、わざわざボスが出向かなくても俺たちだけで十分だと考えたからだ。

結果としてその判断は間違이었다……

何故間違이었다のか、それは今俺の目の前で起こっている状況が何よりも雄弁に語っている。

バタバタと倒れていく仲間たち、一見独りでに気絶したように見えるがそれは違う、原因はきつとさつき突然現れたフードの男だ。

この現象は今のボスが前のボスを殺した時に起きたものと似てる。

あの時も前のボスとその護衛4人が、何も無い所で突然首から血を噴水みたいに吹き出したんだ、後に残ったのは血濡れの男、つまり今のボスだけ。

きつとあのフードの男はボスと同じようなことができるんだ……

！！

そこまで考えたところで隣にいたヤツがやられた、次はいよいよオレの番だ……！！

抵抗はきつと無意味だ、固く目を瞑り歯を食いしばって衝撃に備える、みんな一瞬で気絶してたから痛みだって一瞬だろう。

覚悟を決めて待っていたら、顔面に拳の感触、一気に振り抜かれ結構な勢いで後ろに吹っ飛ばされる。

ああこれで俺も意識を失え　　って、痛い痛い痛い！！！？　何で意識が飛ばないの！？　てゆうか痛い！！！！　これ鼻の骨折れるよぜったい！！！！

地面を転げ回って鼻の痛みに悶絶していると、突然誰かに背中から踏み潰された、這いつくばりながら痛みをこらえて肩越しに振り返るとそこにいたのはあのフードの男、ではなく荷車の周りをウロチョロしていたアホ面の男だった。

「ガハハハハッ！！！！　これが未来のスーパーチャンピオン、モンディ様の實力だ！！　思い知ったか悪党めー！！！！」

「ま、待ちやがれ！！　俺がやられたのはためえじゃ　　」

「黙れこの悪漢があ！！！！」

再び顔面に衝撃、あまりの痛み意識が遠のいていく。

クソッ……！！　こんなやつに捕まって終わりなんて、俺ってさ……え……ねえ……。

「やあ君、怪我はなかったかい？」

「あ、ああ」

いきなり割り込んできて、最後の1人を倒してしまった男が話しかけてくる、その顔は先ほどまでとは違い妙に自信に満ちている。

「突然飛び込んできて危ないじゃないか、この俺がいなかったら大怪我を負っていたかもしれないぞ、と言ってもほとんどの奴らが俺の気迫にやられて倒れたようだがな」

「……………ああ」

なるほどなるほど、こいつには俺の動きが見えなかったから、奴らの気絶の理由をそう判断したのか。

それにしても凄い自信家だな、もっと別の解釈もあるだろうに真

っ先にそんな理由が思いつくなんて、ある意味大物だ。

「俺の名前はモンディ。未来のスーパーチャンピオンだ」

まあわざわざ真実を話す理由もないし、話を合わせてやるか。

「オレの名前はカイジ、旅人だ」

自己紹介が終わると、モンディは倒れている荷車の影に隠れている男に声をかけた。

「おおモンディ！！ こいつらは全員お前が倒したのか！？ 流

石は村一番の力自慢！！ お前は村の英雄だ！！！」

どうやらその男は荷車の影で蹲っていたらしく、闘いの様子を見ていないらしい、そんな男にモンディは得意気に自分の勇姿を語る。

「襲い来る悪党をちぎっては投げちぎっては投げ」

「おお、流石はモンディ！！ 我らが英雄！！」

「……………」

なんだか多分に誇張表現を含んだ内容だが……、まあいいか。

「ところでモンディ、その人はどなただい？」

モンディの英雄譚が一区切りついたところで、男はようやくこちらに気づいた。

「彼はカイジ、俺の危機に駆けつけてくれた心優しい旅人だ。もっとも、俺には増援なんて必要なかったがな！！ ガハハハハハハハハハッ！！！！！！」

「……………」

完全に調子に乗って高笑いするモンディ、自信家もここまでくると尊敬に値する。

「そうでしたか、これはわざわざどうもありがとうございます。どうです、今夜は我々の村で一泊していいですか？」

断る理由は特にない、久しぶりに温かい風呂に入りたいと思って来たところだ。

「ガハハハハハハハツ！！！！ さあ英雄の凱旋だ！！！」

こうしてオレはモンディたちの村で一泊することになった、彼らの村はカリン塔から見つ直ぐ北の方角に位置してる。偶然か必然か、カリン様が言っていた面白いこととはこのことだったのか？

そんなことを考えながら、とりあえず今は旅の疲れを癒そうと、いまだに高笑いを浮かべながら胸を大きく張って先頭を歩く“英雄”の背中を追った。

## 未来の英雄（後書き）

モンディは原作キャラです。

名前の意味と原作キャラっていえばだいたい分かるだろうとは思いますが、会えて明言はしません。

オリジナル編は後2、3話で終わると思います。

次回投稿は1週間以内が目安です、それだはまた。

ちなみにミスターサタンはリングネームだそうです。

宴と歓声（前書き）

ちよつと遅れてしまいました。  
すみません。

追記 サブタイを間違えて投稿していたorz  
修正しました



## 宴と歓声

荷車が襲われていた場所から2時間ほど歩くと、ようやく彼らの村らしきものが見えてきた。

「ご覧くださいカイジさん、あれが我々の村エヴィールです」

「エヴィール……………」

小高い丘の上から見たエヴィールは都会と比べると文明の恵みというものが欠けているながらも自然が溢れ、どこか故郷の村と似ていた。

考えてみればもう2年も村に帰っていない、あそこには父さんの墓もあるし一度くらいは帰らなければ。

ふつと湧いた郷愁の念、なんだかセンチメンタルな気持ちを抱きながらオレは丘を下った。

しばらく歩いて、段々と村の入り口が近づいてくると、あること

に気がついた。

「人がいない……？」

正確には出歩いている人がいない……か、まだ日も高いのにこれは少し妙だ。

首をかしげるオレに気づいたのか、商人の男が神妙な顔で村の現状を説明してくれた。

「ちょっと前からここに夕チの悪い盗賊が現れるようになってね、さつき襲ってきた奴らもその一味らしいんですが」

ちなみに気絶させた盗賊たちは手足を縛って荷車に積んである、しばらく目覚める様子はない。

「奴らときたら神出鬼没でね、いつどこに現れるかわかったもんじゃないから、おつかなくて外も歩けないってわけです」

「なるほど……」

そんな話をしていると、自分の活躍を早く話したくて、道中ずつとそわそわしていたモンディが痺れを切らして村の中に駆け出した。

エヴィール村は小さな村だ、その中心の広場には村のシンボリックな大きな木が生えていて、その木を囲むように民家が軒を連ねているようだ。

モンディは村の入り口から真っ直ぐとその木に向かって走っていく、木の下には村の集会の時に使う台が置いてあり、モンディはその上に乗り高らかと叫んだ。

「英雄が帰ったぞ」

っ

「.....」

閑散としたエヴィール村に、山の向こうまで届くほどの雄叫びが響き渡った。

モンディの予想以上の行動に呆然とするオレをよそに、周りの民家から何事かと続々と村人が出てくる。

「なんだなんだ、いったい何の騒ぎだ？」

「英雄？ 誰が？」

「寝ぼけて変なもんでも食ったのかモンディ？」

「俺は信じてたぜモンディ、お前はいつかやる男だって」

「モンディ兄ちゃんかつこい〜！〜！」

先ほどまでの静けさが嘘のように騒がしくなるエヴィール村、モ

ンデイが立つ広場はあつという間に大人から子供まで、村中の人が集まり大騒ぎになった。

そんな村人の様子に再度呆気にとられるオレを知ってか知らずか、モンデイはガハハハハとこの喧騒の中でも一際目立つ大きな笑い声を上げていた。

「それではモンデイによる盗賊撃退を祝して、乾杯！」

『かんぱい！！！！』

「……かんぱい」

色々と思うところがあるが、空気の読めるオレは村の若者による乾杯の音頭に合わせて、大ジョッキを掲げる、中身はミルク、酒場のマスターが酒の飲めないオレに気を利かせて用意してくれたものだ。

今オレは村の酒場にいる。

先ほどのモンデイの雄叫びから始まった広場における大騒ぎは、

同行していた商人の「盗賊共はモンディが打ち倒したぞ！」という言葉で更にヒートアップ、そこから響く賞賛の声に気を良くしたモンディが更に煽り、エヴィール村の広場はかつてない盛り上がりにも包まれる、收拾のつかなくなった騒ぎは日が落ちるとともに酒場へと場所を移し、今なお続いてるといっわけだ。

それほど広くないエヴィール村の酒場、その中でも比較的静かな場所、騒ぎの中心から外れた場所に陣取り、ゆっくりとジョッキを傾ける。

酒場は先程までの広場と同様に、治まる様子のないお祭り騒ぎだ。その中心にいるのはやはりモンディ、テーブルを2つ重ねた即席のステージの上で、エヴィール村への道中に商人に語っていた内容よりも更に誇張表現を含んだ自分の武勇伝を鼻高々に語っている。ちなみに誇張されているのは、主に彼の活躍する部分だ。

パンチ一発で相手の骨がバラバラになった、指先一つで相手は全身から血を吹き出してダウンした等々、よく聞けば明らかにおかしいと思われる話もあったのだが、酒に酔い、熱に浮かされた村人たちはそれに全く気づかない。

おそらく今ここで真実を知っているのはオレだけだ、あの場にいるのは彼にとっても良くない。

あまりに誇張されたモンディの武勇伝に、このまま勘違いを続けるのは彼にとっても良くない。

そう考えて、彼らに真実を告げようかと腰を上げたが、村人たちの楽しそうな顔を見て思いとどまる。

あまりに無粋。

今ここで真実を告げること、それ即ち彼らのうれしさや喜び、笑顔を全て無に帰すことになりかねない。

そんなことはオレの望むところではない。

幸い、盗賊が撃退されたのは純然たる事実だ、わざわざその闘いの内容を全て明らかにする必要などないし、そんなことの為にこの愉快な雰囲気壊す必要もまたないのだ。

そう思い、上げかけた腰を下ろし、再びエヴィール産のうまいミルクを味わい始める。

しかしこの愉快的な雰囲気は、他ならぬモンディの一言で終わりを迎えることとなった。

切欠は村の情報通を名乗る青年の言葉からだった。

「なあモンディ、さつきから下つ端たちとの闘いの話ばかりだけど、ヤツらのボスとの闘いはどうだったんだい？ 噂じゃ相当腕の立つ男だそうじゃないか！！」

その言葉に周りは更なる武勇伝が聞けるのではと思い、一層沸き立つ。

一方のモンディは困り顔、当然である、彼はボスとは闘っていないのだから、話なんてできるはずもない。

しかしモンディは悩む、ボスとは闘っていない、そんなことをいったら場の雰囲気が壊れてしまう気がしたからだ。

しばらく悩んだ彼は、ボスとは闘っていないと正直に言うことに決めた、さすがにこのことに関して嘘を言うのはマズイと感じたからだ。

「どうなんだモンディ、ボスは強かったのかい？」

「いや、今回俺はボスとは闘っていないのだよ、ヤツは俺にビビって姿を現さなかったのだ」

ガハハハハハ、とモンディの笑い声が酒場中に響いた。

そう、響いたのだ。



酒場は先程までのお祭り騒ぎが一転、葬式のような雰囲気になった、痛いほどの静寂が辺りを包む。

やがて顔を真っ青にした中年の男が蚊の鳴くような声でモンディに尋ねた。

「あ……あいつを……倒してない……のか……？」

それはさすがのような確認の声だった。彼は商人で、かつてそのボスに襲われた経験があり、それがトラウマになっていた。それもそのはず、彼の率いていた商隊は彼を残して全滅、彼自身も浅くはないう傷を負いながら命からがら逃げ出したのだ、彼の脳裏には今もなおたった1人の人間に蹂躪される仲間たちの姿が焼き付いて離れない。

嘘であってほしい、冗談であってほしい、勘違いであってほしい、そんな感情が見てとれる。

しかし、現実には彼に対して非情だった。

「ああ、闘ってないぞ。まあもし闘ったとしても俺のパンチで一発KOだな!!」

シュツシュツと宙に向かってパンチを繰り出しながらそんなことを言うモンディ、村人たちは一瞬頭が真っ白になり、続いて顔が真

っ青になって、最後に顔を真っ赤にして騒ぎ始めた。

「盗賊は倒したんじゃないか!!!!」

「嘘を吐いたのかモンディ!!!」

「全員倒さなきゃ意味ねえよ!!!」

彼らは勘違いしていた、モンディや商人の男が言う「盗賊を倒した」という言葉を「盗賊を全員倒した」という意味で受け取っていたのだ。

叱責の聲が飛び交う中、盗賊団のボスに襲われた経験を持つ中年の男が、悲痛な声で叫んだ。

「あいつを……あのボスを倒さなきゃ意味ないんだ……あの……灰茶々という男を倒さなきゃ!!!」

その言葉に酒場の隅で様子を見ていたカイジは大きく反応した。その顔は驚愕に染まっている。

（灰茶々、聞き覚えのある名前だ。殺し屋桃白白の弟子、あの男





イ！モンディ！モンディ！モンディ！モンディ！モンディ！モンディ！  
イ！モンディ！』

明朝、モンディが盗賊のアジトを強襲することが決まった。

## 人に歴史あり

チユンチユンという小鳥の鳴き声が、エヴィール村に朝の訪れを告げる。

いつもならその鳴き声を聞きながら、微睡む意識をなんとか覚醒させて、それぞれの生活を始めるエヴィール村の住人なのだが、今朝は少々様子が違う。

時刻は4時、普段ならほとんどの村人が未だ夢の中にいる時間帯だ、しかし今日は一部の子供や老人を除いたほぼ全ての村人が村の入り口に集まっている。何のために？彼らの目的は村の英雄を送り出すことだ。

「頼むぜモンディー!!」

「盗賊なんてやつつけちゃってよ!!」

「モンディ、お前のことを信じているぞ」

それぞれがモンディに思い思いの声をかけている中、カイジはその横で朝の澄み切った空気を思いっきり吸い込んだ。目を瞑って頬

を撫でる気持ちいい風を感じていたら、クイクイツと道着の裾を引っ張られた。

視線を下に向ければそこには小さな子供が、無理して早起きしたらしく、どこか眠たげな雰囲気だが、その顔は何か言いたげでもある。

「武術家の兄ちゃん、モンディ兄ちゃんの邪魔すんなよ」

昨晚、酒場にいた村人達から何度も言われた言葉を、子供からも言われ思わず苦笑いを浮かべるカイジ。

カイジは今回の“盗賊のボス撃退作戦”についていくことになっている。灰茶々が関わっているということもあり、カイジ自身モンディの後をつけてでも参加するつもりだったが、モンディ1人に任せるのに不安を覚えた一部の村人から正式に依頼を受けたため、堂々とモンディと行動を共にすることとなった。ちなみに少数精鋭での作戦ということで参加者はカイジとモンディの2人だけだ。

「そうだぜ兄ちゃん、ついていってもいいがモンディの邪魔だけはするなよ」

少年の一言を皮切りに、周囲からカイジへ次々と言葉が投げ掛けられた、そのいずれもが“モンディの邪魔だけはするな”という二ユアンスを含んでいた。

ここまで言われたら、普通気を悪くしそうなものだが、カイジは終始苦笑いを浮かべるだけにとどまった。

ふと視線を動かせば、少し遠い所ですまなそうに頭を下げる老人の姿がカイジの視界に入る。彼こそはエヴィール村の村長その人であり、カイジに作戦への参加を依頼した張本人である。

軽く手を上げ、別に気にしていないと伝えるカイジ、同時に彼の脳裏には昨夜の出来事が思い起こされていた。

「しばし待ってはくれぬか、お客さん」

モンディの“俺に任せろ”発言で、今夜最高潮の盛り上がりを迎えた酒場を後にしたカイジは、同じように酒場を抜け出した老人に呼び止められた。

「何ですか？」

怪訝な表情で振り返るカイジ、確かにあの盛り上がりの中を抜け出すのは少し空気が読めてないかなとは思ったが、呼び止められるほどのことだろうか？などと見当違いなことを考えている。



「なに、少し話してもと思いましてな……………今夜の宿はお決まりかな？」

「…………いえ、特には」

「ほっほっほ、そうですね、それならば我が家の客室をお貸ししましょう。こう見えてわしはこの村の村長を務めていますな、他より少しばかり大きな屋敷に住んでおりますのじゃ、屋敷と呼ぶには少々窮屈かもしれませんが、ささっ、こちらへ」

「は、はあ」

カイジの答えに、老人はこれ幸いとばかりに顔を綻ばせ、有無を言わせぬマシンガントークで彼を自分の屋敷に招き入れた。

案内された場所に建っていたのは、彼の言葉通り村で一番大きな屋敷だった。

とは言っても、他の家と比べて特別豪華というわけでもなく、単純に一回り大きいだけで、他に変わった所はない。

屋敷に入ると、カイジは客間へと案内された。

村長の家族は都に上京した息子を除いて、既に全員亡くなっていて、今は一人暮らしである。

それを聞いたカイジは、ただ単純に寂しさを紛らわすために自分を招いたのだろうと考え、彼とのとりとめもない会話を楽しんだ。

「へえ、村長さんも武術家だったんですか」

「ほつほつほ、さして強くはありませんでしたがの。しかし、やはりあなたも武術家でしたか、動きや体つきからそうではないかと思っておりますが、まさかかの有名な“鉄人”のご子息だったとは……」

村長はカイジが“鉄人カイドウ”の息子であることにえらく興奮していた。彼はカイドウのファンだったらしく、カイジも知らない父の話をたくさん知っていて、2人はその話題で会話に花を咲かせた。

しばらくその話題で盛り上がっていると、村長が唐突に話題の焦点をカイドウからカイジに切り替えた。

「しかし、“鉄人”の指導を直々に受けていたとなると、さぞお強いのでしょうか……」

先程までよりも若干低い声色で、何かを探るように問いかける。

「いえいえ、オレなんかまだまだですよ、父さんの足下にも及ばないし、それに」

「でも強い、少なくともわしやモンディ、そしてあの盗賊どもよりはずっと……違いますかな？」

鋭い目でカイジを見つめながら、笑みを浮かべる村長。  
当たり障りのない答えを返そうとしたカイジに対して、その言葉を遮るようにして村長は問いを続ける。

実質、村長にとってこの問いは問いに非ず、どちらかというところに近い。

彼はモンディではなくカイジこそが、盗賊たちを撃退した張本人であるとは確信している。

村長は九割方カイジの圧倒的実力を確信している。  
残る一割、その一割を埋め、カイジの実力を100パーセント信用するためのきっかけを彼は求めていた。

カイジも村長の変化に気付いていたが、あえて態度を変えるようなことはせず、先程までと同じ様に和やかな雰囲気のまま、逆に村長に問いを返す。

「なぜ、オレの強さを知りたがるんですか？」

「はて？ いち武術家として、相手の力量を知りたがることは不思議なことではないと思うのですが。」

ましてや相手があつた“鉄人”の息子ならなおさら……」

「……まあ………そうですね……」

納得できなくはない理屈だ、しかしその理屈を語る村長自身の目が、真意は他にあることを雄弁に語っている、しかも村長にはそれを隠そうとしていない節がある。

互いに上辺だけの会話が続く。

「オレの強さ、ですか………そうですね……」

答えに悩むように唸り声を上げて、瞑目し、用意されたお茶を飲むカイジ。

一瞬、カイジの気が逸れた。

その瞬間、村長の目がカツと見開かれ、2人の間に置いてあった机を蹴り上げた。

2人分のお茶と木製の机が宙を舞い、カイジに迫る。

村長は腰掛けていた椅子から素早く立ち上がり、拳を腰だめに構え、力を込めるように深く息を吐いた、その間僅かコンマ数秒。

幅広に作られた机は、カイジの視界を遮り、その向こう側にいる村長の拳動を完璧に隠した。

「ハアッ！！！！！」

気合いととも放たれる、村長渾身の突き、生み出された死角から放たれた一撃は木製の机を貫き、カイジの顔面を直撃するかのよう思われた、しかし

ピシッ

村長の拳が当たる前に、宙を舞う机に、まるで鋭利な刃物で切り

裂いたかのような亀裂が入った。

そしてパカッと2つに割れた机の間から、カイジの腕が現れ、村長の突きを止めた。

切り裂かれた机が、互いに離れていき、その先にいるカイジの姿が顕になる。

両手に宙を舞ったはずの茶が入った湯呑み、右手には自分の分、左手には村長の分の湯呑みが掴まれていた。

そして、村長の突きを止めているのは左手。

湯呑みを掴みながら、いかにして村長の突きを止めたのか？村長の視線が、カイジからゆっくりと己の拳の先に移る。

己の視界に映る“それ”を見た瞬間、村長に戦慄が走った。

止められるとは思っていた、それだけの実力がカイジにはあると確信していた。

しかしカイジの実力は村長の想像を遥かに越えていた。

拳の先にあったのは、小指だった。

丁度お猪口を掴むように、親指と人差し指で湯呑みを掴み、ピンと立てられた小指が、村長の全力の突きを止めていた。

湯呑みの中のお茶、その水面は何事もなかったかのように静かだった。

突きの衝撃さえも、カイジにはまるで届いていなかった。

ズズツツ

カイジがお茶を啜る音が、いやに響いた。

「……………まあ……………」

部屋を包む妙な沈黙の中、徐にカイジが口を開く。

「まあ……………そこらの有象無象に負けるつもりはありませんけどね

……………」

トンッ

空になった湯呑みを床に置く、その音を聞いて、ようやく村長が  
我に返った。

慌ててその場に膝を突き、深く頭を下げる。

「と、とんでもないご無礼を働いたことを、どうかお許しください  
い！ しかしながら、どうしても貴方の實力を知らなければならな  
かったのです！！」

「……その心は……？」

村長は胸の内を語った。

彼は他の多くの村人と違い、どうしてもモンディが盗賊を一網打  
尽にしたという話が信じられなかったらしい。

しかし、英雄と持て囃されて嬉しそうな笑顔を浮かべるモンディ  
を見て、言い出せなくなってしまうた。



「あの子は捨て子でしてのう、小さい頃は、親が自分を捨てたのは自分が必要ない子だったからじゃないか、親に捨てられた自分は世の中にも必要ないんじゃないか、そんなことを考えていたようじや……」

成長し、明るく陽気な青年になっても、根本的な部分は変わらなかったらしく、彼は誰かに必要とされ認められることに躍起になる部分があったらしい。

「あの子は村の人気者じゃ、誰もがあの子を必要としてる、盲目的に求める余りに、欲したものは既にあるということを見落としてしまっておるんじゃない」

そして、ようやく彼自身も納得のいく結果が出たのが、今回の事件。

「あんなに嬉しそうなあの子は初めて見ました、ようやく手にいれたあの子の幸せを奪いたくないのです……！！　どうかあの子と一緒に盗賊の頭めを倒しにいつてはくれませんか……！！」

「この通りっ……！！」

地面に頭を擦り付けるように、頭を下げる村長。

その余りの必死さに、終始冷静に話を聞いていたカイジも、慌てて席を立ち、止めるように言う。

カイジ自身も、この事件に負い目を感じていた。

もし盗賊団のボスが、あの灰茶々だとしたら、一連の盗賊団による被害の責任は、彼を仕留め損ねた自分にこそあるのではないか、そうカイジは考えていた。

「頭を上げてください村長さん、オレも盗賊団のボスには心当たりがあります、奴とは浅からぬ因縁があるので、元々こちらから出向くつもりでした。」

ですから村長さんがそこまでしなくても大丈夫ですよ」

その言葉に村長はバツと頭を上げる。

「本当ですかっ!!」

その勢いに若干驚くカイジだったが、直ぐに柔らかな笑みを浮かべて答える。

「ええ、任せてください」

その言葉は、高い実力に裏打ちされた自信に満ち溢れた言葉だった。

すると、村長は再び頭を強く地面に擦り付け、

「どうかあの子を、モンディを、わしの息子を、よろしく願います………！」

村を出発し、森への道を歩くカイジとモンディ、まだ歩き始めて数分だが、カイジには気になることがあった。

となりを歩くモンディを見る、ガチャガチャと騒音をたてながら歩く彼の背には、やたら大きな風呂敷に包まれた何かがあった。

「な、なあモンディ」

「ん？ なんだカイジ？」

触れちゃいけない気がする、だが気になる！ カイジは意を決して尋ねた。

「そ、その背中のはいったい何だ？」

「こいつか？」

一瞬、キョトンとした目で、何かおかしいなところがあるか？と言わんばかりのリアクションを見せたモンディだったが、質問の意図は理解したらしい。

辺りをキョロキョロと見渡すモンディ、誰もいないことを確認してから、ゆっくりと風呂敷を地面に下ろした。

「フッフッフ、驚くなよ、こいつは秘密兵器ぞ」

ファサッッ

固く結ばれていた、風呂敷の結び目が解ける、現れたのは

こんぼう

おなべのふた

てつのおなべ

呆然としているカイジを尻目に、モンディは素早くそれを取り出して装備する。

「ガーハツハツハ！！！！これで向かうところ敵なしだ！！！！」

得意の高笑いを始めるモンディに、カイジはとてつもない不安を覚えるのだった。



と、おのずと疑問の答えが見えてきた。

答えは俺自身の記憶にあった。  
それを呼び起こしたのは、俺のすぐ傍にあった、師匠桃白白の死  
体。

それを見た瞬間、臆気だった記憶が段々と鮮明になってきた。

殺しの依頼

レッドリボン軍

バカでかい塔

尻尾の生えたガキ

妙な技を使う生意気なガキ

そして……強烈な熱と閃光

……あの光は……そうだ、爆弾だ。

俺と師匠の奥の手、その大きさに見合わずかなりの威力を誇る小型爆弾、マヌケなことにそいつを俺たち自身が食らっちゃったわけだ、笑えねえ。

そういえば……あれだけの爆発を間近で受けて、なんで俺は生きてるんだっけ……。

本来なら両腕どころか、全身が吹っ飛んでもおかしくない威力の筈だ……。

俺は、あの瞬間、……………！！

「クックック……………」

思い出した。

俺は爆発の瞬間、咄嗟に師匠の体を引き寄せ、盾にしたんだ……。

その結果、師匠は死に、俺は両腕を失うにとどまった。

「クックック、ハ……………ハッハッハ……………！！」

不幸中の幸いとは正にこのことだ。

目の上のたんこぶは消えた、これで殺し屋界の第1シェアは俺のモノだ。



活力が湧いてきた俺は、痛みを訴える体を無理矢理起こした。

顧客の確保、活動拠点の建築、やるべきことは多々ある。

何れにしても、先立つものが必要だ、この腕もどうにかしなければならぬ、手術して新しい腕でも生やそうか。

立ち上がり、歩きだす、より多くの力が集まっている方角へ。

目指すは都、まずは腕の手術代のために、師匠の口座から金を引き出す、かなりの額が必要だろうが、足りなかったときはそんなときだ。

「あの小屋か……………？」

木々の間に隠れるように建てられた小屋が遠目に見える、しかしながら高い木の上から眺めているカイジの視界を遮るまでには至らない。本来あの小屋は一昔前にこの辺りを狩り場にする猟師のため

に建てられたものだったが、今ではもう誰も住んでいない廃屋であるとエヴィール村の住人は言う。

しかし、どうやら誰か住んでいるようだ、小屋の中から覚えのある気を感じながら、カイジはそう確信する。その“誰か”が誰なのかは言うまでもない。

ちらりと木の下を見るカイジ、そこには地面に腰を下ろし俯いているモンディ、飛び降りて様子をつかがうと、恐怖からか“こんぼう”を握りしめた指先が震えている。

「………恐いのか、モンディ」

カイジの言葉にハッと俯いていた顔を上げるモンディ。

「ば、馬鹿のことを言うな！ これは武者震いだ！ それに、俺の身体はこの防具によって守られている、恐れることなど何も無い！」

そう言って立ち上がると、調子を取り戻すためか、自分の身に付けている装備の説明を始めた。

カイジとしては無視しても良かったのだが、これでモンディの気が紛れるというなら付き合うのも吝かではない、そう思い大人しく聞くことにした。

モンディ曰く、彼の右手に握られた“こんぼう”は“ひかりのつるぎ”左手の“おなべのふた”は“ちからの盾”、そして頭に被った“てつのおなべ”は“ミスリルヘルム”だそうだ。

「胴ががら空きだぞ、鎧は着けなくていいのか？」

カイジの指摘に、モンディは待っていましたと言わんばかりに笑みを浮かべた。

「おいおい、お前の目は節穴かカイジ？」

そう言うとモンディはカイジから一步離れ、突然筋肉を強調するようなポーズをとった。

「見よ、この筋肉！！ この鍛えられた筋肉こそが俺の鎧！！  
その防御力“メタルキングの鎧”に勝るとも劣らず！！ ガー—  
ハッハッハ—！！！！！！」

苦笑いを禁じ得ない。

「さて……………近くまで来たわけだが、ここからどうする？」

小屋から20m程離れた位置で、茂みに隠れながら、カイジはモンディに問う。

「無論、正面突破だ！！」

即答して、勇んで走り出そうとするが慌てて止める。

正面突破は愚策だ、気を探ってみたところ、小屋の中には灰茶々以外にも5人の盗賊がいる。

何れも大した実力ではないが、1人でも逃がしたら面倒なことになる。

復讐心を持った悪人は、例え強くなくとも危険な存在である。

カイジは2年前まんまと逃げられた、狂科学者の顔を思い出しながら、そう考えた。

不安要素は灰茶々だ、実力者であるあの男がいる以上、どうしても意識の半分以上を奴に割かなければいけない。

理想としては、灰茶々を含めた盗賊共全員の虚を突き、一瞬で灰茶々以外の雑兵を地に沈められる、一網打尽の突入方法がいい。

カイジとモンディは話し合い、どうにか1つの作戦が決まった。

まず、モンディが他の盗賊団員を装って、声を掛けながら入り口の扉をノックする。

恐らくは油断しているであろう相手がドアを開けたところで、“はじゃのつるぎ”もとい“こんぼう”による会心の一撃からの強襲。

突然の事態に驚く奴ら、その瞬間を狙って、気配を消して小屋に近づいておいたカイジが、窓を突き破って突入。

一瞬で残りの盗賊を倒して、まんまと灰茶々との一騎打ちという寸法だ。

この作戦はカイジが高い実力を備えているという前提の、カイジ主体の作戦なのだが、ほぼ初の実戦であるモンディは、緊張のためか特に疑問を持たず、二つ返事で了解し、直ぐに自分の役割をブツ

ブツと復唱し始めた。

最終的には、カイジ対灰茶々、モンディ対盗賊Aという状況になる。

緊張しているモンディをリラックスさせるために、カイジは呪文のように自分の役割をひたすら唱えているモンディに声を掛けた。

「頼むぜモンディ、奴らを倒せば俺たちは英雄だ。もっとも、前は既に真正銘村の英雄だがな、良いところ見せてくれよ」

瞬間、モンディの目がキューピーンと光った。

「あたぼっよっ!!! 何を隠そうこの俺は、未来の格闘技世界チャンピオン、ミスターモンディ様なのだ!!! ガーラーハッハッハ!!!!!!」

盗賊相手でも、1対1なら負けない実力を持っている以上、豚もおだてりゃ木に登るとは言えないが、少なくとも本来の実力は出せるだろう。

相手に気付かれることを考慮してか、かなり抑えた音量で高笑いを続けるモンディ。

そんなモンディに、カイジは内心で1つつっこミを入れた。

( “こんぼう” 使つなら格闘技関係ないだろっ………!! )

コン、コンッ

昼間から酒を煽り、宴に興じる盗賊団アジト内に来訪者を告げるノックが響く。

「ああ〜？ 誰だ？」

赤ら顔の男がその音に反応して、腰を上げる。

小屋はワンルームで構成されており、室内には6人の男、酒宴を開く団員5人に、部屋の奥で踏ん返り返る彼らのボス、灰茶々、彼はどこか退屈そうな顔で虚空を見つめている。

「俺たちだ、今帰ったところだ」

そういえば昨日仕事に出かけた仲間がまだ帰っていないかったか、アルコールで低下した思考力で男たちは来訪者の正体を推察する。残念ながら“昨日仕事に出かけた仲間たち”はカイジとモンディによって捕らえられている。

素面の状態ならその声が仲間のものではないと分かったのだが、酒に酔った彼らではそれも分からない。

コン、コンッ

再びノックの音が響く。

自分で開ければいいだろうが、そう考えながらも急かされるようなノックの音に、ため息を吐きながらも扉に向かう。



コン、コンッ

三度目のノック音。

「ちっ、うるせえな、開けりゃいいんだろ」

男はぼやきながら、扉に手を掛け、荒々しく開け放った。

## 虚勢（後書き）

短めですが、キリがいいので投稿。

まるで週刊連載の漫画のようなヒキ、しかし次回が熱い展開になる  
かと言われれば、そうでもない。

予想以上に長引く間章、あと二話で終わる……か？

## ステージ

何の後ろ盾も持たない人間が一から起業するのは難しい。

数少ない成功例としては、カプセルコーポレーションのブリーフ博士が挙げられるが、彼は常人離れた頭脳を持つ天才であり、一般的な常識に当てはめること自体がナンセンスであるため、あまり参考にならない。

“殺し屋”という職業がある。

決して一般的とは言えない職業だが、存外にその法則に当てはまらないわけでもない。

殺しの依頼料は高い、リスクを伴う行為故に相応の報酬を要求するのだ、そう簡単に雇えるものではない。

だから、依頼人は慎重に吟味する。世に蔓延る決して少なくはない殺し屋たち、その中の誰を雇うべきか。

意外にも、実力の程を目の前で実演してみても、それほど信用を得ることはできない。素人目には殺しの技術など理解できないからだ。

最も重要なのは実績だ、数多の人間の命を絶ってきたという経験は、それだけで顧客の信用を得る。訳の分からん技などよりもずっと。

灰茶々にはそれがなかった、世界的に有名な“殺し屋・桃白白”  
その弟子だった灰茶々だが、彼自身の殺し屋としての知名度は限りなく底辺に近い。

桃白白さえいなくなれば、自分は殺し屋界No.1である、そう考えていた灰茶々だったが、腕っ節だけで生きていけるほど、裏社会は甘くなかった。

つまり、灰茶々は殺し屋としての活動を再開することができなかった。

しかしながら、彼は可及的速やかに大量のゼニーを用意する必要があった、彼自身の手術代である。

当初、両腕だけだと思われていた損傷箇所は、検査によりその他体中の各所にも問題があると判明した。そして、それぞれが機械化しなければ延命することすら危ぶまれるほどのダメージだった。

その改造手術と言っても過言ではない処置、そして1年半もの時間を要したりハビリにかかった金額は、灰茶々が用意していた金額を大きく超えるものだった。

改造手術をした男、そいつを殺せば全て解決するのではないだろうか、何の憂いもなくなるのではないだろうか。

しかし、事はそう旨くはいかなかった。

ドクターゲロを名乗るその男は、手術の際、灰茶々の体内に高威力の爆弾と緊急停止装置を埋め込んでいた。

反抗は死を意味する、灰茶々自身、ドクターゲロの狂気を見抜けなかったことを悔いたが、全ては後の祭りだった。

容易く、速やかに、多額の金銭を手に入れる方法。

そうして灰茶々は盗賊に身をやつした。

コン、コンッ

2回目のノックをしながら、モンディの心は緊張と恐怖で支配されていた。

1回目の時も、室内に呼び掛ける声が震えないようにするのに必死で、中から声が聞こえた瞬間、肩がビクッと跳ね上がった。

ほぼ初陣である、道中カイジが不器用ながら発破を掛けたりはしていたが、それだけで解消されるほど簡単な問題ではない。

コン、コンッ

それでもモンディの手は迷うことなく動き、3回目のノックをしていた。

パニック寸前のモンディの精神を支えていたのは、他者に認めてもらいたいという思い、そして一欠片のプライド“男の意地”である。

「ちっ、うるせえな、開けりゃいいんだろ」

目の前の扉が荒々しく開かれる、その様子がモンディの目にはスローモーションで見えていた。

小屋の中から顔を覗かせた見るからにガラの悪そうな男、その男が視界に入った瞬間、モンディはダムが決壊したかの如くパニックに陥った。

しかし同時に、その様子をどこか客観的に見ているもう1人の自分がいることに気が付いた。

恐怖で動けなくなった自分に、冷静なもう1人のモンディは頭の中で、そつと魔法の言葉を囁いた。

それは理想の現出。

幼い頃、テレビの向こう側に見た存在。

ボロボロになりながらも、決して負けず、常に勝ち続け、割れんばかりの拍手喝采を一身に受ける、

最強のチャンピオン。

彼は言った、チャンピオンにとって一番必要なものとは何か。

パワー？ スピード？ テクニック？

どれも必要と言えは必要だが、別になくても困らない。

チャンピオンに最も必要なもの、それは勇氣、決して消えない不屈の心である。

(アイ アム チャンピオン)

2人のモンディは一体となり、彼の世界も速度を取り戻す。  
かつてカイジが“鉄人”をその身に宿したように、モンディもその身に理想を宿す。

もはやそこに怯えるだけだった青年など存在しない。

たった一言、1秒にも満たない僅かな時間で、若者は戦いの王者と化した。

バタンッ

今、扉が開かれた。





本日“盗賊団のアジト”にて一番響いた音は、入り口付近に飾られていたお宝物の壺が割れる音だった。

アジト内の全員、盗賊たちはもちろん、灰茶々までもが否応なしに目を、耳を、感覚の全てをモンデイに奪われた。

その瞬間、カイジがその小屋唯一の窓を豪快に突き破りながら突入してきた。

意識のほとんど、ほぼ全てをモンデイに向けていた盗賊たちが、窓を割って突入してきた新たな襲撃者を認識するのにかかった時間、約1秒。

十分な時間だった。

飛び込んできた勢いそのままに、盗賊たちに襲いかかる。

少し離れた所でモンデイに応戦していた1人を除いた4人を、瞬間に気絶させる、その間約0.5秒。

もう1人、モンデイに応戦している男を倒すだけの余裕がカイジにはあったが、あえてそれはしなかった。

意識を失った盗賊たちは糸の切れた人形のように崩れ落ちる、彼らの体が地に沈むのを待たずにカイジは灰茶々に突貫する。

対する灰茶々も一瞬で体制を整え、襲撃者を迎え撃つ。

交差する2人、両者際どいタイミングで拳を繰り出す、襲撃者の顔が視界に入った瞬間、灰茶々は驚きの顔を浮かべ一瞬動きが止まる。

その一瞬でカイジの拳は灰茶々に届き、背後の壁ごと灰茶々の体を外に吹き飛ばす。

吹き飛ばされるその姿を目で追ったとき、カイジの目は灰茶々の顔が醜悪な笑みに彩られているのを確かに捉えた。

斯くして、

室内にて“モンディ対盗賊A”

アジト近くの林にて“カイジ対灰茶々”

それぞれ1対1の構図ができあがった。

カイジが盗賊たちを気絶させ、奥にいたボス風の男を吹き飛ばしながら小屋の外に消えるのを見て、モンディは作戦の成功を悟り、まず“こんぼう”を投げ捨てた。

ゴトツ

もはや意識がある者は2人しかいない室内に鈍い音が響く。

何故武器を捨てるのか、盗賊は怪訝な顔をする。

突然の事態のため丸腰の彼にとって、願ってもないことだが、疑問が残る。

実はこの盗賊の男、中々腕が立つ。

灰茶々が来る以前はボスの側近を努めた、盗賊団きっての武闘派である。

カイジらの襲撃から、ものの数秒で冷静さを取り戻したことから、実力の程が伺える。

ではモンディはそれを感じとり、勝ち目がないと諦め、武器を捨てたのか。

そうではない。

そもそもモンディに相手の实力を感じとるなんて、器用なマネはできない。

彼が武器を捨てたのは、“チャンピオン”の精神性に則つてのことだった。

モンディはカイジが戦士として自分より遥かに優れた实力を持っていると、何となく気付いていた。

同年代に見えるのに、どこか場馴れした雰囲気、そしてたった今目の前で行われた早業。

今思えば、あの時荷車を襲った盗賊を退治したのはカイジだったのだろう。

あの時、カイジは9人の盗賊を一瞬で昏倒させた、それだけの實力を持つカイジが、今自分の目の前に立つ男を討ち漏らすはずがない。

自分に任せてくれたのだ。

何よりも欲した、信頼を、信用を貰った。

ならば自分は“チャンピオン”として、それに応えなければならぬ。

つまりはそういうことである。

被っていた“てつのおなべ”も外す、これで正真正銘の素手対素手、“チャンピオン”が望んだ勝負の形である、丸腰の相手に武器を持って応えるのは流儀ではないのだ。

モンデイの意味不明な行動に警戒心を表す盗賊、視線は彼を捉えて決して外さない。

そこで突然、モンデイが顔に笑みを浮かべた、その笑みからは自嘲や諦め、そういったマイナスイメージはまるで感じられない。

「何が可笑的い……」

眉間に皺を寄せて、問い質す盗賊、モンデイは笑うのを止めない。

「ふっふっふ、“チャンピオン”の一挙手一投足が気になって仕方ないと見える……」

「あぁ？」

「貴様、この俺を恐れているな？」

「ああ！？」

そこにいるのは“チャンピオン”？

それともただの“寂しがり屋”？

賭けられたのはプライド。

カイジが吹き飛ばした灰茶々に追いつくと、灰茶々はすでに立ち上がり、やはり醜悪な笑みを浮かべていた。吹き飛ばし様に見たそれはカイジの見間違いではなかった。

警戒しながら近づくカイジ、その姿を捉えると、灰茶々の笑みはより一層深いものとなった。

対照的に眉間の皺を深くするカイジ、闘いに臨むための精神力はこの2年で随分鍛えられたはずだが、不快感は増す一方で、拭われる様子はない。

「気でも触れたか……」

カイジには理解できなかった、何故灰茶々は笑うのか、狂人の思想など往々にして常人には理解しがたいものである。

カイジの言葉には答えず、尚も笑い続ける灰茶々、カイジ自身も特に答えを求めていたわけではないので、そのまま戦闘体勢に入る。

「驚いたなあ、カイジ君じゃないか……」

いつでも飛び出せる状態のカイジをよそに、灰茶々はそんな呑気なことを言う。

冷静に見えて激情家、闘いに関して天才的なセンスを有し、それに加え優れた格闘技術と戦士としての勘を持っている、戦闘のプロフェッショナル。

以上がカイジが2年前に闘った灰茶々に対する印象だ。

少なくとも、この状況でいつまでもヘラヘラと笑っているような男ではないと思っていた。

事実、カイジが抱く印象は灰茶々の本質をこの上なく適格に捉えていた、2年前の時点では。





「見ロツ！ コノ圧倒的プウアワー！！！！」

灰茶々の暴力的な気が空気を震わせる、足下の草花はなびき、木々は揺れ、木の葉が舞い落ちる。

しかし、そんな灰茶々の気を正面から受け止めるカイジの目には、恐怖や怖れといった感情はまるで浮かんでいなかった。

それどころかカイジの目には、喜び、悲しみ、怒り、その他感情と呼ばれるもの、その一切が浮かんでいなかった。

“無”である。

ハイライトの消えた目が捉えているのは、狂ったような笑いを続けながら、自分の力を誇示するように気を高める灰茶々の姿。

「サア闘ロウツ！！ 俺ニ君ヲ殺ラシテクレツ！！」

腰を落とし前傾姿勢をとって、さあ行くぞと言わんばかりの体勢を見せる灰茶々。

一方のカイジは、それを見ても特に反応を示さなかった、少なくとも灰茶々にはカイジの変化を見て取ることはできなかった。

「来ナイナラコツチカラ行クゾツ!!」

実力の拮抗した者どうしが死力を尽くす闘い、その果てでの殺害を演出したかった灰茶々だったが、仕掛けてくるどころか構える様子もないカイジに痺れを切らし突撃を敢行した。

灰茶々にとって、カイジのような実力者を前にして戦闘を我慢することは、土台無理な話だったのだ。

低い姿勢から駆け出した灰茶々は、3歩でカイジとの間合いを埋め、4歩目でカイジの懐に入る。

「シャアッ!!」

獣のように鋭く尖った爪で、下から上へ切り裂くように腕を振るう。

しかし、その爪が切り裂いたのは空<sup>くう</sup>だけだった、カイジの体は灰茶々の爪が切り裂いた場所より、数cmずれた場所にあった。

初撃がかわされたからといって、攻撃を止めるような灰茶々ではない。

二度、三度、四度、数え切れないほどの攻撃を閃光のような速度で繰り出す。

しかし、その全てが空を切り、一度としてカイジを捉えることはなかった。

暖簾に腕押し、ぬかに釘、柳に風である。

それでも灰茶々は攻撃を止めなかった、止めれなかった。

精神の氾濫によって正常な判断力を失った灰茶々には、飢えた獣のようにただ愚直に攻めることしか頭になかった。カイジもカイジで避ける一方で攻めようとしなない。

闘いは奇妙な膠着状態に陥った。

やがて千日手かと思われた闘いに変化が訪れる。

息を吐かせぬ怒涛の攻撃を繰り返していた灰茶々の動きに翳りが見え始めたのだ。

ペース配分を考えないで、最初からフルスロットルで飛ばした弊害だ。

鋭い刃物のように振るわれていた拳は、既に隙だらけの大振りに変化していた。

それでも尚、カイジは攻勢にできることはなかった、その事實は灰茶々の強者としてのプライドを著しく傷つけた。

「何故ダツ！ 何故オレト闘ワナイツ！！」

吹き飛んだ理性のせいか、疲労のため朦朧とする意識のせいか、灰茶々は己の闘い方を忘れてしまったかのように、猪突猛進の文字通り猪の如く、頭から体当たりを仕掛けた。

当然そんな真つ正直な攻撃がカイジに当たるはずもない。

渾身の体当たりを、滑るような足捌きでカイジにかわされた灰茶々は、勢いを殺しきれずにカイジの背後にあつた木々を数本折り進んだところで、ようやく止まった。

「グッ……！！」

木々を貫いた灰茶々の額から、血が僅かに流れる。

カイジと灰茶々どちらも合わせて、この闘い始まって以来初めてのダメージだった。

ただの掠り傷程度で明確なダメージはまるで残っていないかった、しかしこの血は灰茶々の頭を更にヒートアップさせるには十分だった。

「ウガアアアア！！！！　コロシテヤルツ！！！！」

再び全力全開での突撃を繰り返す灰茶々、そんな灰茶々を感情を感じさせない目で見ながらカイジはふと言葉を発した、この場にそぐわない低くあまりにも落ち着いた声が、灰茶々の荒々しい殺気によってざわめいていた森に不思議と響き渡った。

「哀れだな、灰茶々。　まだ分からないのか？」

ヒラリヒラリと舞い落ちる木の葉が、カイジが発する静かな闘気に触れ弾け飛んだ。

鋭く尖った目の奥に、ようやく感情が現れた。

その感情の名は憐れみ。

殺し屋とは言え、かつて武人として相對した存在はもう無く、この場に存在するのはその抜け殻のみ。

何が灰茶々をここまで狂わせたのか、それはカイジの知るところではない、あるいは自分の撒いた種であったのだろうか。

初めから、カイジは目の前の存在に違和感を覚え、決して表には出さないが内心戸惑いを感じていた。

“殺し屋灰茶々の姿をした何か”それがカイジが目の前の存在に

対して感じた印象だった。

闘いが進むにつれその印象はどんどん強まり、カイジは次第にこの闘いを闘いとは捉えられなくなっていた。

闘いとは確かな自我意識を持った者同士によって行われるものである、とカイジは考える。

故にカイジは今この場で行われている事を“灰茶々との闘い”ではなく“武人灰茶々の弔い”として己の中に位置付けた。

奇声を上げながら高速で突っ込んでくる灰茶々、それに対してカイジは両腕を広げ、灰茶々を向かい入れるように構える。

「分からないなら教えてやるよ、オレとあんたではもう立っている場所が違っステージんだ」

灰茶々の突撃が当たるかと思われた瞬間、カイジは常軌を逸した回避技術で一部の無駄な動きもなく灰茶々の攻撃をかわし、その後には現れた、端から見たら灰茶々の体がただ突っ立っていたカイジの体をすり抜けたようにしか見えない程、無駄のないかわし方だった。

灰茶々の背後に現れたカイジ、広げていた両腕は胸の前で交差され、その手にはバチバチと異音を立てる機械仕掛けの腕が握られていた。

「ア、ア、アアアーーーーー！ーーーーッ！！！」

機械の腕とは言え自由に動かすため神経は繋いである、それを無理矢理もぎ取られた時の痛みは想像を絶する。

あまりの痛みに地面をのたうち回る灰茶々に、カイジはゆっくりと近づき……

トンッ

灰茶々が俯けになった瞬間を狙って首に軽い手刀、灰茶々の意識は一瞬で闇に沈んだ。

2年前の勝負と同じように決着は一瞬だった、それにしても、カイジが攻勢にでてから30秒と経っていない、かつて死闘を演じた者同士としてはあまりにも呆気ない決着だった。





## ステージ（後書き）

この話を書くのには何だか時間がかかってしまいました。

少し書いては間を置いてを繰り返して書いたので、何か変なところとかいっぱいありそうです。

今回は間章改め未来のチャンピオン編エピソードです。

## チャンピオンズロード

「…………ふう……………」

宿として借り受けている村長宅のベッドに横たわる。

盗賊退治に費やした1日だったが、振り返って見れば肉体的疲労より精神的疲労の方が大きかった。

そもそもオレ自身、武術家としても人間としても未熟も未熟な奴なのに、人のフォローをするなんて身の程を弁えない行為だ。

今日の経験で自分の力の現在地を知ることができた、今のところオレは自分の世話で精一杯だ。とは言え貴重な経験をさせてもらったことを村長やモンディに感謝しなければならない。

そこまで考えたところで、ふと寝返りを打つ。視界に入ったのは若干くすんだ色をした天井、所々にあるシミが飛び散った血に似ている、否応無しに昼間の出来事が思い起こされた。

灰茶々を倒した後、オレは直ぐにでもモンディの無事を確かめようと小屋の方に走った。が、それは杞憂だった、モンディは倒れ臥す盗賊の傍らで腰に手を当て高笑いをしていた。

オレが灰茶々相手にグダグダと悩みながら闘っている間に、モンディはボロボロになりながらも腕利きの盗賊相手に勝利を収めていたのだ、素手で。

何故素手なのか、握りしめていた筈の“こんぼう”はどこにいったしまったのか。

モンディ曰わく、「チャンピオンシップに則って捨てた」らしい。

チャンピオンシップ？

よく分からないが、本人が満足そうなので、敢えては触れまい。

事は村に帰る道中で起こった。

灰茶々と盗賊たちを縄でグルグルに縛って引きずっていたオレの耳に、カチツという謎の電子音が聞こえたのだ。

次の瞬間、灰茶々の体が大爆発を起こした。

爆発の威力は凄まじく、半径10m以内にあった木々は根こそぎ吹き飛ばされてしまった。

咄嗟にモンディを庇いながら地面に伏せたため、オレたちは無事だったが、灰茶々と一緒に引きずられていた盗賊たちは爆発に巻き込まれて一人残らず死んでしまった。

何故灰茶々の体が爆発したのか、当然思い出すのは以前の闘いの最後、灰茶々と奴の師匠である桃白白は最後の手段として拳大の爆弾を用意していた、今度もその爆弾でオレたちを巻き添えにして死のうとしたのだろうか。

しかし、冷静に判断するとそうは考えにくい、なぜなら灰茶々はもちろん、モンディが伸した男を含めた盗賊たち全員の意識がないことをオレは確かに確認していたからだ。

故に爆発は灰茶々の意志によるものとは考えにくい、では一体なぜあんなことが起きたのか。

辺りに飛び散る血と肉片、それらに混じるようにして散らばる、幾つかの機械部品がオレの目に止まった。

散乱している機械部品の破片の中でも比較的大きなものを見つけ、拾い上げる。

息を呑むとはまさにあのことを言うのだろう、灰茶々から飛び散った破片に刻まれたマークを見た時、オレは確かに呼吸することを忘れた。

『RR』

刻まれていたのは赤いリボンの模様、レッドリボン軍のマークだった。

ほぼ条件反射的にあの狂科学者の顔が浮かんだ、そしてその直感には恐らく間違っではない。レッドリボン軍が壊滅している現在、あのマークを使っているのはあの男くらいではないだろうか。

思えばあの時千切り取った機械の腕の断面を見る限り、灰茶々に施されていた体の改造には、機械やら何やらに関して全くの門外漢であるオレが見てももの凄いと感ずるくらいの科学技術を使っていた。

あの男は人造人間の製作者、さらにレッドリボン軍本部で見た奴の研究室の様子からして、奴は非人道的という言葉だけでは言い表せないほどの外道だ。自らが改造手術を手掛けた人間の体の中に爆弾の1個や2個仕込んでいてもおかしくない。

現に悟空が出会ったという心の優しい人造人間も体の中に爆弾が仕掛けられていたらしい。

奴は灰茶々をオレの関係者と知り、オレを殺す手段として爆弾を仕掛けたのだろうか、それともオレとは関係なく、何か全く別の意図があつたのだろうか、残念ながらいくら考えても答えを得る術はない、胸の内にもどうしようもない痛みを残しながらも、今のところそれを取り除くことはできないのだ。

オレが灰茶々に仕掛けられていた爆弾について思い悩んでいる一方、人間の爆発なんてものを間近で見ってしまったモンディはかなりのショックを受けたようだった、村に帰り着くまでの間普段はおしやべりな彼も青い顔をして一度たりとも口を開くことはなかった。

重い空気を引きずりながら村の入り口にたどり着くと、そこには村長や酒場の主人、村人たちが、朝の出発のまま立っていた。

もうすぐ日が暮れようという時間帯、彼らはおよそ半日もの間、オレたちの帰りを待っていたらしい。

盗賊たちは打倒した、そう彼らに伝えると場は一気に盛り上がり、昨夜の焼き直しのような村全体を巻き込んだ宴が開かれた。

体中に傷を付けたモンディは、皆に英雄と呼ばれ大いに持て囃された、そのお陰で先程のショックも多少薄らいだらしい、いつものようにとはいかないが笑顔も浮かべている。

一方、碌に傷を負っていないオレは、モンディに全て任せて隠れていたんじゃないかと疑いを掛けられ肩身が狭い思いをしたが、すぐにモンディが現れ――

「カイジは俺の恩人だつ!!」

……と叫んでくれた。

オレに絡んできた村人はもちろん、オレ自身もモンディのあまりの剣幕に呆気に取られたが、お陰でどうにか誤解をとくことができた。

村人たちには闘いの詳細についてはあえて語らなかった、あまり気持ちのいい話でもないし、ただ盗賊団が全滅したという事実さえあれば彼らは十分だろう。

モンディも闘いについて語っている様子はなかった、普段通りなら得意気に自分の勇姿を語っているだろうに、余程奴らの最後がシヨックだったらしい。

とは言っても、モンディの体中の傷から闘いの様子を勝手に予想して、あたかも事実であるように語るお調子者もいたようで、モンディの武勇伝は彼の預かり知らぬところで村中に広がっていたのだが。

モンディも苦い顔をしていたが敢えてそれを止めるようなことはしなかった、やはり基本的に目立ちたがり屋なので、持て囃されることに悪い気はしないらしい。



エヴィール村挙げての宴は昨日以上に高いボルテージで行われ、終わる気配が見えなかった。

疲労を抱えていたオレは、明日の旅立ちに備えて早めに抜け出てきて、今に至る。

そういえば先程、オレよりも先に帰っていたこの家の主である村長が、お礼として家宝の宝剣を差し出してきたが、丁重にお断りした。

今回の件、元々の発端は2年前にオレが灰茶々を仕留め損なったことにある、お礼なんて受け取れる立場じゃない。さらに言えば、宝剣なんて貰ってもオレには使い道がないのだ、まさしく宝の持ち腐れである。

兎にも角にも、明日からはまた当てのない旅が始まる、疲労を残さないためにも早く寝なければ。

灰茶々の背後に潜んでいたと思われるドクターゲロの存在だったり、全くの未定である次の目的地のことだったりと考えなきゃならないことはたくさんあるが、それはまた明日考えることにしよう。

オレはベッド脇に置いてあったランプの灯をそっと消した。

一夜明けて

夜明け前まで続いた昨夜の宴で、ほとんどの村人たちが寝静まる中、村の入り口に3つの人影が見える。

カイジ、村長、そしてモンディである。

カイジの旅立ちを村長とモンディが見送りに来たのだ。

「すまんなあ……こんな見送りで、お主は村の恩人だというのに……」

「気にしないでください、灰茶々に関しては自分の責任を果たしたままでですから」

当人にそう言われると引き下がるしかない村長だったが、その顔からは納得いかないという気持ちがありありと伺える。

「んむう……カイジ殿がそう言われるなら致し方ない、ところでこれからどこに向かわれるのですか？」

村長の問いにカイジは少し気まずそうな顔を見せる、昨夜も考えていたのだが結局次の目的地は決まっていなかったのだ。

雰囲気ですれを察したのか、村長はカイジが喋りだすのに先んじ

るように再び口を開く。

「そういえばここより東に馬で3日程の場所に中々腕の立つ武術家がいるそう、興味があれば訪ねてみてはいかがかな？」

村長の気遣いが行き届いた真摯な対応にカイジは内心で感謝をして、その提案をありがたく受け取ることにした。

「では、もう行きます。2人ともお元気で」

「ほっほっほ、わしもカイジ殿の旅のご無事をお祈りしています」

行き先も決まり、別れの挨拶も済んだ。カイジは次なる目的地に向かってエヴィール村を出発する。

「……………」

次第に遠くなる背中にモンディは焦った。彼の胸中はカイジに対

しての申し訳ない気持ちで一杯だった。

モンディは今回の功労者であるカイジが、それに見合った扱いをエヴィール村で受けなかったことに対して、申し訳ないと思っっているのだ。

モンディがただ一言、鬨いのあらましを伝えれば、カイジはその成果に相応しい待遇で迎えられただろう。

しかし、モンディにはそれができなかった。

盗賊たちのことを思い出すと、目の前で見てしまったスプラッタな映像が思い出されて気持ち悪くなるというのも、モンディが話せない理由の1つだったが、彼が何よりも怖れたのは、真実を話すことによつて村人たちからの尊敬を失うことだった。

何て浅ましい！

こんな行いはチャンピオンがすべきことではない！

早く全てを明らかにしろ！

心の中で何度も自分に言い聞かせたが、遂にそれが果たされることはなかった。

モンディの意識の根底にある、他人に認めてもらいたいという感情が彼に口を開かせることを許さなかったのだ。

「……………っ」

カイジを、恩人をこのまま行かせてはならない！

声を出せ！

俺はあいつに謝らなきゃいけないんだ！！

想いに反してモンディの喉は張り付いたように動かない。

しかし、カイジは足を止め振り向いた、モンディの万感の想いを込めた視線が彼を振り向かせた。

「……………」

「あ、っっ……………」

振り向いたカイジは何も言わない、対するモンディも咄嗟に言葉が出てこない。

やがて何も言わないモンディに業を煮やしたのか、カイジは再び歩き始めてしまう。

「か、カイジッ!!」

震える喉から発せられた声は早朝の静寂を切り裂いてカイジの耳に届き、彼の足を止めた。

カイジに謝りたい、その一心でようやく声を絞り出したモンディだったが、続く言葉は意外なものだった。

「ありがとう」

モンディの口から飛び出してきたのは謝罪とは似て非なる感謝の言葉だった。

彼自身、自分が発した言葉に驚いていた。

しかし同時に、その言葉がやけにすんなりと自分の心の内に収まるのを感じていた。

謝罪よりもより正確に彼の心を表した言葉だった。

振り返ったカイジは満面の笑みをたたえていた。

「達者でなモンデイ！ 縁があつたらまた会おう！！」

そう言って、今度こそカイジはエヴィール村を後にした。

カイジが去った後、モンデイはかつてないほど晴れやかな気分で村長に話しかけた。

「村長、俺は都に出るよ」

「……………そうか」

突然の決意に村長はあまり驚きを見せなかった。

「都で格闘技を始める、そしてチャンピオンになるんだ」

「……………そうか」

夢を語るモンディを、村長は目を細めて優しく見つめる。

「リングネームは決まってるんだ、モンディじゃ少し情けないからな………知りたい？」

聞いてくれ、爛々と光る瞳が訴えてくる。

「ほっほっほ、何と言うんじゃ？」

村長の言葉に待ってましたと言わんばかりの笑みを浮かべるモンディ。

勿体ぶるかのようにゴホンと一度咳払いをして村長の関心を煽る。

「ンンッ！ よくぞ聞いてくれた！ 近い将来チャンピオンの座に輝くその男の名はっ……！」

そこでモンディは村長に向けていた身体をクルリと反転して、カイジの背中が消えていった道を見つめた。

「スーパーチャンピオン・ミスターサタンだ……！」



後に世界中に知れ渡る英雄の名が山奥の小さな村でひっそりと産声をあげた。

とある山奥の研究所

「ドクターゲロ、実験体ナンバー04の生体信号がロストしました」

「ふむ、もう死んだか。予想より1週間早いな」

「転送されてきたデータによると何者かと交戦し、致命的なダメージを受けたことによって機密保持プログラムが作動した模様です」

「ほう……、その戦闘の詳細なデータはあるかね？」

「詳細データは実験体ナンバー04と共に消滅した模様です」

「ちっ、使えんゴミだ。報告ご苦労、作業に戻れ人造人間10号」

「はい、ドクターゲロ」

## チャンピオンズロード（後書き）

遅れてしまいました、すみません。

何とかオリジナル篇を完結することができました、当初の予定の何倍もの時間がかかってしまいました……。反省しなければなりません。

次回からは天下一武道会篇、できるだけ早い更新速度を目指したいと思います。

PS

いつの間にやら一万ユニーク突破！

ありがとうございます、これからもがんばります。

### 3年ぶりの再会

ジャッキーチュンの優勝で幕を閉じた第21回天下一武道会から3年、遂に第22回天下一武道会開催の報が世界中を駆け巡った。

世界各地の武道家たちがこの日を待ち望んでいた。

天下一の名誉を欲する者、優勝賞金が目当ての者、ただ己の腕を試さんとする者、様々な思惑が交錯し、大会は執り行われる。

天下一武道会が開催される絶海の孤島・パイヤ島、今その島に向かつて空を切り裂きながら飛ぶ黄色い雲がある、乗る人間を選ぶ筋斗雲と呼ばれるこの雲、一人の少年を乗せている。

雲の上に胡座をかいて座る少年の名はカイジ、彼もまた大会に参加しようとする武術家の一人だった。

前回の大会にこそ参加しておらず、実力を認知されていないカイジだが、武天老師に実力を認められ、武術の神と呼ばれた仙猫力リオンに教えを受けた彼は今や世界屈指の実力者になっていた。

カイジは3年間、この日を今か今かと待ち望んでいた。

数少ない友人と呼べる存在に会えることは嬉しい、かつて出会ったことのない強者たちと相見えるのはさぞ楽しいことだろう。

しかし何より、今大会におけるカイジの目標は孫悟空へのリベンジである。

孫悟空とカイジは友人である、共に行動した時間は短い、同年代で同じ武術家であること、さらには共にいくつかの修羅場を越えたことから、その結束はかなり固い。

しかしそれとこれとは話が別であると考える。

生来の負けず嫌いであるカイジは同年代の少年に負けたままであることを受け入れられる程大人ではなかった。

カリンとの修業で精神を存分に鍛えられたカイジだったが、その修業は精神的に大人になるということを目的にしたものではない。

精神の修業とは精神のコントロール、ひいては気のコントロールをより正確にすることに重きを置いたものなのだ。

故にカイジは燃えている。

猛烈に、燃えている。

視界一杯に広がる雲を見ながら、悟空との、そして来る強者達との闘いに思いを馳せる。

2年にも及ぶカリン様との修業に加え1年の武者修行の旅、この3年間やれるだけのことはやったつもりだ。

3年前に悟空と戦った時、全力全開のオレに対して、あいつにはどこか余裕があった。その上でオレは負けた、あの時点でそれだけの差がオレと悟空には存在していたのだ。

無論あの時の差が今でもそのままだとは思っていない。

しかしオレは自分の実力がすでに悟空を越えていると思えるほど楽観的でもない。

こと闘いに関しては悟空は正真正銘の“怪物”だ、恐ろしい速度で進化する。

身体能力に関して言えば、オレは悟空に及ばないだろう。しかし闘いは身体の強さや大きさ、速さだけで決まるものではない。

戦術や技のキレ、闘いに臨む精神などについては、武術の神カリン様に2年間教えを扱いたオレに一日の長があるのではないだろうか。

と、ここまで考えたところで思考を一旦ストップする。

いつの間にか意識が悟空との対戦ばかりにいつてしまっていた、あまり良い傾向とは言い難い。

天下一武道会は予選から本戦通してトーナメント方式の大会だ。

100人以上の選手が参加するなかを終盤まで勝ち進まなければ、悟空と対戦できる可能性は低いだろう。

目の前の勝負に集中できないようでは一人の武術家として失格、悟空との対戦なんて夢のまた夢だ。

自分に喝を入れようと頬を叩き、昂ぶった頭を落ち着けるため、オレは筋斗雲の高度を眼下に見える海面付近へと向けた。

「ん？ 何だあれは……」

波飛沫を上げながら海面スレスレを飛行していると、少し離れた所にこれまた盛大に波飛沫を上げながら泳ぐ人影を見つけた。

気になって筋斗雲をそちらに向けてみると、見えてきたのは四方八方に伸びた髪、クロールで一掻きするたびに水面に浮かんでくる茶色い尻尾、近づくほどに強くなる懐かしい気配に自然笑みがこぼれた。

「悟空っ！！」

一心不乱に泳いでいた人影に向かって声をかける。

オレの声が聞こえたのか、泳ぐのを止めこちらに顔を向ける。

「あれー？ おめえカイジじゃねえか！！ 久しぶりだなあ！！」

幾分身長が伸びていて、何故かやたらボロい野生児丸出しの格好をしているが、海面にプカプカと浮かびこちらを見るその顔はまさしく孫悟空その人だった。

「おめえも武道会場に向かっているとこか？」

「ああ、そうだが………何で泳いでるんだ？ 筋斗雲は？」

積もる話もあるのだが、まず真つ先に疑問に思ったことを尋ねてみた。わざわざ泳がなくとも悟空にはオレと一緒にカリン様から貰った筋斗雲があるはずなのだが。

「オラじっちゃんに筋斗雲使っちゃダメって言われとるんよ。そ  
ちの方が修業になるって」

「はあ！？ じゃあお前こここまで泳いできたのか！？」



ここから一番近い陸地まで200km以上ある、そんな距離を泳いできたのか……いやもしかしたらそれ以上遠くから……？

「……悟空、お前いったいどこから泳いできたんだ？」

「へっ？ ヤツホイってところだけど……」

ヤツホイ……残念ながら聞いたことがない地名だ、少なくともここら辺の地名ではない。

「……まあ、相変わらずって感じだな、悟空」

「へへっ、カイジも元気そうだな!!」

「当たり前だ、武術家たる者常にベストコンディションを保っておくものだ」

「ベす……？ 何だそれ、うめえんか？」

「うまくねえ、分からないなら別にいいさ」

「ふーん、変なの……………あっ！」

何かに気付いたかのように、突然叫び声を上げる悟空、コロコロと変わる表情豊かなその顔は今「しまった！」という顔をしてる。

「オラ急がねえと！！ 武道会に間に合わねえ！！」

「えっ？ まだ時間はあるはずだが……………ああ、そういうことか……………」

筋斗雲で行けば、まだまだかなり余裕のある時間帯だが、今から泳ぐとなるとかなりギリギリの時間帯になるだろう。

「筋斗雲を使えばいいだろう、武道会に遅刻したら元も子もないんだし」

我ながら至極尤もな提案をしたと思うのだが、悟空は首を横に振る。

「亀仙人のじっちゃんとの約束だかな、オラ最後まで泳いでいく」

ニツと齒を見せて笑いながらも、その瞳からは断固として譲れないという意思が見えた。

「……………はあ」

思わずため息が出た、そうだった、こんな奴だったな、孫悟空という奴は。

「律儀というか真面目というか、ホントーに相変わらずだな、お前は」

呆れ、いや尊敬か。対局に位置するように見えて、それら2つの相反する感情の間には紙一重の差しかないらしい。

目の前の孫悟空という人間は、常にその紙一重の間を歩く人間だ。

要は変なヤローってことだ。まあ、そいつに絆されたオレも十分に変なヤローなんだろうけど。

「よしよし」

ザブツと音を立てて、盛大に水飛沫を上げながら、オレは海に飛び込んだ。

「競争しようぜ。会場に先に着いた方が勝ちな」

悟空の驚いた顔を視界の端に収めながら、オレはさっさとパパイヤ島に向かって泳ぎ始めた。

「あつ！ ずりいぞ！」

再会から今まで終始あいつのペースに吞まれていたから、背後から聞こえるあいつの少し焦ったような声が気持ちよかった。

亀仙人、ヤムチャ、クリリン、2大会連続で（尤も亀仙人に関しては正体を隠したジャッキー・チュンという偽名を使つての登録だが）武道会に挑む3人は既にそれぞれの参加登録を済ませ、受付の締め切り時間1分前になつても姿を見せない悟空とカイジを今か今かと待っていた。

「悟空さ〜〜ん！！ カイジさ〜〜ん！！」

応援に来ていたウミガメが冷や汗を垂らしながら2人の姿を探す。ちなみに応援にはウミガメの他にブルマ、ランチ、プーアル、ウーロンといったいつもの面々が駆けつけている。

「やむを得ん！ プーアル、ウーロン2人に化けて受付だけ済ませるんだ！」

「はいっ！！！」

「え〜、おれもかよ〜！！！」

二つ返事で答えたプーアルと不満を漏らしながらも拒む様子はないウーロンが急いで変身しようとしたとき、2人の姿を探してずっと遠くを見ていたランチが待ったを掛けた。

「待てっ、来た！！ 来たぞっ！！！」

その言葉に一齐にランチの視線をたどる一同、そこには車道を車以上の速度で駆け抜ける2人の野生児の姿があった。

しかしここでブルマが2人の様子がどこかおかしいことに気付く。

「何であの2人あんなに必死の形相なの？」

「何でってブルマさん、受付に遅れそうだからでしょ」

ブルマが呟いた疑問にクリリンが何を言っているんだといった感じで答える。しかし同じ違和感をヤムチャも感じていた。

「あれは………かけっこの勝負でもしているのか？」

“かけっこ”随分と平和的な印象を受ける言葉だが、悟空とカイジこの2人に関してはそうとは言えない。横を走る自動車やオートバイを優に超える速度で行われる“かけっこ”は2人の頑丈にできた身体も相俟って、身体一つで甚大な被害の交通事故を起こしかねない非常にデンジャラスな仕様だ。

「あつ、あぶない!!」

プーアルが悲鳴を上げるのも無理はない、互いに武道会場への最短ルートを目指す余り、車、バイク、自転車等といった障害物を身体に掠らせるほどのギリギリの避け方で走っているのだ。

武道会場が2人の視界に入ったのか、互いにラストスパートを掛ける悟空とカイジ。レースカーもかくやあらんといった速度で走り

出す。

しかしここは天下の天下一武道会会場直通路、溢れんばかりの観客を誇る武道会を表すように、膨大な数の車が2人の進行を妨げる。

それでも2人は止まらない、どちらからともなく飛び上がり、大渋滞も何のそのと行き交う車の上をピョンピョンと跳ねていく。

受付までの距離残り約50m、2人の位置はほぼ互角、しかしここで勝負の命運を分かち一台のトラックが現れた。

天下一武道会会場は、今悟空とカイジが走っている道と、その道に丁字路として交わるように走るもう一本の道、その2つの道がちよつと交わる部分、つまり丁字路の突き当たりが存在する。

運命のトラックはそのもう一本の道から現れた、正面を睨むように走っていた2人は突然死角から現れたトラックに反応が遅れてしまった。

「うわあっ!!!？」

「っ!!!？」

勝敗を決めたのは2人の走っていた位置、道路の端を走っていた悟空は曲がり角から現れたトラックに否応なしに足を止めるしかなかった。対して悟空より2m程ではあるがトラックから遠い位置を

走っていたカイジは、一瞬動きを止めながらも即座に次の動作に移るだけの余裕があった。

「りゃあっ！！」

全速力で走ってきた勢いを、コンクリートの地面を強く蹴ること  
で斜め上空への推進力に変える。

飛び上がったカイジの身体は錐揉み回転しながらトラックを飛び  
越え、空中に美しい放物線を描いて亀仙人たちの前に着地した。

呆気にとられる亀仙人たちを差し置いて、受付へと駆けるカイジ。  
一拍遅れてカイジの後を追うように悟空が亀仙人たちの眼前を通り  
過ぎる、が一度開いてしまった差は如何ともし難く、結局一瞬早く  
カイジが受付に辿り着いた。

「カイジ」

「はい？」

「ここ受付だろ？ カイジだ、参加登録お願いします」

「あっ、は、はい」



一連の様子を目撃していた受付の男は、カイジに急かされどこか呆然としつつもカイジの名前を名簿に記入していく。

「あー！ー！っ！！ オラもオラも！！ 悟空！！ 孫悟空だ！！」

「ひっ！ は、はい！！」

遅れてきた悟空のあまりの剣幕に驚く受付、慌てて孫悟空の名前を名簿に書き込んでいく、勿論カイジの名前の下にだ。

「あー！ー！っ！！ 何で何で！？ 何でオラの方が後なの！？」

「ひい！！」

身を乗り出して名簿を覗いてくる悟空に、再び怯える羽目になる受付、すっかり苦手意識が刻まれてしまった。

「諦める悟空、誰がどう見てもオレが先に着いた、オレの勝ちだ。まあ最後のトラックは不運だったがな」

騒ぐ悟空を諫めるカイジ、それでも悟空はどこか納得がいかない様子で頭を掻きむしる。そこに他より一息早く我に返った亀仙人が悟空に歩み寄る。

「カイジの言う通りじゃ悟空、運も実力の内じゃよ」

「むっ……」

他ならぬ師からの言葉に頭を捻る悟空、やがて納得いったのか俯きがちだった頭をパツと上げた、その顔からは既に悩みは消えていた。

「うん、そうだな！ あんがとなじっちゃん!!」

「ほっほっほ、精進せいよ」

亀仙人に礼を言い、カイジへと向き直る悟空。

「やるなあ〜カイジ、今回はオラの負けだ！ でも武道会じゃ負けねえかな！」

「望むところだ、オレも負けるつもりはない」

そう言って拳を突き合わせる悟空とカイジ、互いが互いを認め合う  
う良き関係に、亀仙人はサングラスの奥の目を細めた。

「それにしても2人も久しぶりじゃのう」

「はい、ご無沙汰しています武天老師様」

「おう!! じっちゃんも元気そうだな!!」

対照的な2人の挨拶に微笑みを浮かべる亀仙人、その背後からよ  
うやく我に帰ったヤムチャたちがやってきた。

「悟空!! カイジ!!」

「ウーロン!! みんな!!」

「みんな元気そうだな!!」

ウーロンの呼びかけに振り向く2人、こちらに駆けてくる仲間たち  
を見て、満面の笑みを浮かべる。それぞれが思い思いの言葉を掛  
け合い、その場は一気に再会の喜びに包まれるのだった。



### 3年ぶりの再会（後書き）

最近2週間ごとの更新が続いていますね。

今回はもっと早く更新したいな……

今回のかけっこの件は、自分でもどうしてこうなったって感じですが、ホントどうしてこうなった……。

それはさて置き、ようやく天下一武道会の始まりです。

カイジが入るので対戦表もちよろっといじくりまします。

自分でも楽しみます。

では。

## 予選サバイバル（前書き）

まさかの連投、短いけど。

サブタイトルは原作からそのまま引用。

言うほどサバイバルしてない。

## 予選サバイバル

『武道会に参加される選手の方にお知らせします。』

只今より予選を行いますので競武館にお入り下さーい！』

カイジたちが互いに再会を喜びあっていると、予選開始のアナウンスが流れてきた。

スーツで来ていたクリリンとヤムチャ、何かの毛皮のような物を身に纏っていた悟空は、それぞれ亀仙人から道着をもらい会場に入っていく。

元から自前の紺色の道着を着ていたカイジは、そのまま会場に入ろうとしたが――

「こりゃ待たんか、カイジ」

亀仙人に呼び止められて足を止めた。

「何でしょうか武天老師様？」

不思議そうな顔で尋ねるカイジに、亀仙人はニンマリと笑ってあ  
る物を取り出す。

「!?!? これは……………!!」

武天老師が取り出したのは、もう一着の亀仙流の道着だった。

「ほれ、お主の分の道着じゃよ」

亀仙人の言葉にカイジは戸惑う、亀仙人に対してカイジはある引け目があった。

「し、しかし、オレはあなたに弟子入りを志願しておきながら、3年間一度もあなたの元を訪れなかった無礼者ですよ!?!」

それは3年間カイジの心にずっと引つかかっていたことだった。

何度も謝罪に行こうと思ったが、その度に後ろめたさからかどうにも足が止まってしまった。

しかしそんなカイジの葛藤を亀仙人はあっけらかんとした様子で跳ね飛ばした。

「なんじゃお主、そんなことを気にしておったのか。難儀な性格をしているのお」



そんな亀仙人の口振りに今度はカイジが呆気にとられる番だった。

「お主にカリン様を紹介したのはわしじゃ、お主にはわしよりもカリン様との修業が必要じゃと思って送り出したんじゃがの。その後お主はずっとカリン様の教えを受けてきたようじゃが、そのことに対する後悔などあるのかの？」

「ありませんっ！！」

カイジは即答した、カリン様は彼の中で亀仙人と同じくらい尊敬できるヒトとして刻まれている。

「ならよいではないか、お主は何も気に病むことはない。それにお主が父より受け継いだ武術は亀仙流の流れを汲んでおるしの」

「し、しかし」

「しかしもかかしもありやせん、わしはお主は亀仙流の看板を背負うに相応しい武術家だと思っておる。受け取ってくれ」

亀仙人にそこまで言われて断り続けられるカイジではなかった。

「ありがとうございます……!!」

カイジは両手で恭しく道着を受け取りながら、万感の想いを込めて頭を下げた。

「おつ、カイジも亀仙流の道着か」

一足早く会場に入って着替えていた3人がカイジを迎える。数ある参加者の中でも、鮮やかな橙色の道着を身に着けた3人はかなり目立っていた。

「ヤムチャもこの道着を着るのは初めてですよね？ 似合ってますよ」

カイジの誉め言葉に対してヤムチャは怪訝な表情を浮かべる。

「何で敬語なんだ？ 昔はそんな言葉使いじゃなかっただろ？」

その言葉にカイジは驚いた顔をする、カイジは自分でも無意識の内に敬語を発していた。

「ああ、わるい。3年間ほとんどずっと目上の人とばかり喋ってきたから、敬語が癖になっちまった」

慌てて言葉を直すカイジ、ヤムチャはこの中で唯一の年上であるため、つい敬語がでてしまったのだ。

ちなみにクリリンはカイジより早生まれだが同い年、悟空は1コ下である。

予選のクジ引きが始まるため、カイジは急いで亀仙流の道着に着替えた。

カイジが着替え終わり、4人の亀仙流の弟子たちが並び立つ。

かなり目立つ彼らに周りの視線はより一層集まった。

そんな周りの様子に気付いたのが、クリリンは得意気に呟く。

「いや、これで亀仙流が4人。他の方々に悪いですけど、今回の大会は我々の独壇場になりそうですね」

「クリリン、油断は禁物だぞ」

若干天狗になっているクリリンをヤムチャが諷める。無論、彼には伸びる鼻はないのだが。

そんなことを話していると、辺りをキョロキョロと伺っていた悟空が、ようやく探し人を見つけたのか、小走りでその人物に近づく。

「じいちゃん!!」

「ん？」

悟空が話しかけたのは、前回大会で悟空と決勝を戦い、見事優勝を収めたジャッキー・チュンだった。

彼の正体は彼らの師匠である亀仙人その人なのだが、その事実を知っているのは今のところカイジただ一人である。

「おう久しぶりじゃ、また会ったのう」

「やっぱり来たんだね!!」

よく見たら直ぐにわかりそうなものだが、3年間ともに過ごした

ヤムチャ、クリリンに悟らせないあたり、その演技力の高さが窺える。

「オラ今度はじいちゃんに勝てるといいな〜!」

「ほっほっほ、さらに修業を積んだようじゃの、こりゃあ楽しみにじゃ」

嬉しそうに語る悟空に表面上は余裕を持って答えるジャッキー・チュン。

実際に彼は弟子たちの驚異的な成長速度に危機感を覚え、彼らに隠れて密かに訓練を積んでいた。

年齢三百を越える大ベテランに危機感を覚えさせる、それほどに悟空を筆頭とした亀仙流の弟子たちの成長速度は速い。

『え〜、選手の皆さん中央の舞台にお集まり下さい。これより開会式を始めます』

「おっ、始まるようだぜ」

予選会場に響き渡るアナウンスに従い、カイジたちは真ん中の舞台に集まった。

『え、本日は第22回天下一武道会にはるばるお集まりいただきご苦労さまです。

ご存じのように、近年参加者が増え、今大会より3年に一度の催しとなりました。それでも予選を戦う選手はなんと182名もおられます。

この中より選ばれるのはたったの8名、真に厳しい戦いでありま

す。

日頃の鍛練の成果を発揮し、悔いのないよう戦ってください。』

大会委員長による開会の言葉は簡潔かつ中味のある、ありがたい言葉だった。

少なくともカイジはそう思った、その隣りで悟空はここまでに失った体力を取り戻す為か、本人の顔ほどの大きさのおにぎりを一心不乱に食べていた。

天下一武道会の予選はそれぞれ前半・後半に分けられた4ブロックに選手を振り分け、それぞれでトーナメント戦を行い、天下一武道会本戦に出場する8名を決めるものである。

選手の振り分けはクジ引きで引いた番号によって各ブロックに割

り振られる。

今大会の参加者は182名であるため - - -

1 ～ 23番が1ブロック前半

24 ～ 46番が1ブロック後半

47 ～ 69番が2ブロック前半

70 ～ 92番が2ブロック後半

93 ～ 115番が3ブロック前半

116番 ～ 138番が3ブロック後半

139番 ～ 160番が4ブロック前半

161番 ～ 182番が4ブロック後半

このような割り振りになる。

そしてカイジたちの番号は - - -

ヤムチャ 2番 | 1ブロック前半

孫悟空 28番 | 1ブロック後半

クリリン 71番 | 2ブロック後半

カイジ 158番 | 4ブロック前半

ジャッキー・チュン 178番 | 4ブロック後半

見事に全員別のブロックに分かれる結果となった。

『ルールを説明します。』

1対1でこの競技台の上で戦い、下に落ちたり、気絶したり、「まいった」と言ったりしたら負けです。

武器の使用は禁じます、今回から制限時間はありません、決着が着くまで戦っていただきます』

ルール説明が終わり、いよいよ予選が始まる、カイジたちもそれぞれの試合が行われる競技台に散っていく。

「やるうぜ、カイジ！ クリリン！」

「ああ！」

「おう！」

悟空からかけられた言葉にカイジとクリリンはそれぞれ気合いの籠もった返事をした。

彼らの仲間内で4ブロックに向かうのはカイジとジャッキーだけ、正体を隠す必要のある人間はいないため、カイジは早速道着のお礼



を言おうとジャッキー、いや武天老師に話しかけた。

「武天老師様、亀仙流の道着ありがたく身に着けさせてもらっています」

「ん？ おう、よく似合っておるわい、しかしお主も本当に律儀な奴じゃのう」

壁に耳あり、どこで誰が聞いてるかも分からないので、極力声を落として2人は会話する。

やがて4ブロックの試合が行われる競技台に着き、自分たちの番号が呼ばれるのを待っていると、ふいにジャッキーが3ブロックの競技台を見ながらカイジに話しかけた。

「ところでカイジ、あの男どう見る」

「あの男……？」

カイジがジャッキーの視線を辿ると、そこには今まさに競技台に上ろうとする三つ目の男がいた。

「……凄まじい気の持ち主ですね、あれほど充実した気を見るの

は初めてです」

気の大きさでは悟空と同等、かつ多少荒削りな部分のある悟空の気と比べてかなり落ち着きのある気だ。

「おそらく、オレと同じように気の扱いに長けた武術家でしょう、かなりの使い手と見ます」

カイジの冷静な分析にジャッキーは満足げにシャリシャリと自分のヒゲを撫でる。

「ふむ………技のキレも中々」

競技台に立った三つ目の男は、試合開始の合図とともに飛び出してきた見るからにタフそうな巨漢の男に、目にも止まらぬスピードで手刀を4発、蹴りを2発叩き込み、一瞬で意識を刈り取った。

「あの男、鶴仙人の弟子じゃ」

「鶴仙人？」

悟空と共に遅れて来たため、朝の鶴仙流とのいざこざをカイジは

知らない。

「わしのかつてのライバルじゃよ、今は比ぶべくもないがの」

「鶴仙人……鶴仙流の弟子……」

「お主の言う通り凄まじい使い手じゃ、おそらくお主たちと優勝を争うことになるじゃろう」

厳しいながらどこか嬉しそうな顔で語るジャッキーに釣られ、カイジは悠然と競技台を下りる鶴仙流の一番弟子・天津飯の背中を見送るのだった。

予選サバイバル（後書き）

興が乗ってきました。

次話投稿も早くなりそうな予感。

## 8 強揃う

予選は滞りなく進んだ、悟空が初戦から達人とよばれるチャパ王を一蹴するなど、圧倒的な強さを見せたりしたが、カイジからすれば悟空の急成長ぶりは予想できていたことなので、それほど驚くべきことではなかった。

彼ら亀仙流の一派に起こった唯一のアクセシブントは、4ブロック前半の決勝、カイジの試合での出来事だった。

カイジの決勝の相手は“狼男”、否、“男狼”を名乗る獣人だった。

満月を見て狼になる“狼男”に対して、彼“男狼”は満月を見ると人間になる、本人曰わく“狼男”より品の良い存在らしい。

獣人特有の怪力、そして拳法三十段の腕前を活かしてここまで勝ち抜いてきた彼だったが、常識を越えた超達人の域に達しているカイジの相手ではなかった。

試合開始と同時に男狼が察知できない速度で彼の背後に回り、軽く首を叩き意識を断つ。

審判による男狼の気絶認定で鮮やかに天下一武道会出場を決めたカイジだったが、極力軽く叩いたため直ぐに意識を取り戻した男狼に因縁をふっかけられてしまったのである。

「ま、負けてたまるかい……」

「あんたの気絶でオレの勝利はもう決まった。悪いが引いてくれ」

「まけて……たまるかい…まけて…たまるか……い」

冷静に諭すカイジの言葉が耳に入らないのか、男狼は壊れたラジオのように同じ言葉を繰り返す。

「錯乱しているのか？」

フラフラと立ち上がる男狼の目に理性は宿っておらず、余程確固たる目的があったのか、本能と何らかの想いだけで立っている状態だ。

やがてフラフラと立っていた男狼が理性を失ったまま、懐からナイフを取り出す。

「むっ」

「じゃっきーちゅん……てめえが……てめえがいけなんだ……!!」

(ジャッキー・チュンだと？ こいつ武天老師様となにか関係あるのか？)

事態を静観していた審判たちも、男狼がナイフを取り出すのを見て慌てて止めに入るが、怪力を誇る男狼を止めることは審判及び運営委員5名総出でかかっても無理だった。

「じゃっきー……てめえが……てめえがつきをけしちまうから!!」

「ちっ!!」

しがみつく審判たちを振り払い、ナイフを掲げ向かってくる男狼。カイジは申し訳なく思いながらも再び彼の意識を断つため、先程よりも数段強い威力の一撃を見舞おうと構える。

とんっ

しかしカイジの攻撃が男狼に突き刺さる前に、2人の間に入り込んだ影があつた、ジャッキー・チュンである。

「がっ……うが……」

「金縛りの術じゃ。お主の恨み、どうやらわしに向けてのモノのようじゃが、わしはお主の顔にとんと覚えがない。一体何用じゃ？」

「じゃっきー……つきこわした……つきないと……にんげんにもどれん……にんげんにもどれんと……なんばできん……おれかなしい……」

「ふむ……ようは月を壊したわしが憎いと。うむ、その憎しみ至極真つ当じゃ、しかしこちらにもやむにやまれぬ事情があつての、どうか許して欲しい」

「うっ……ぐううっ……!!!!」

カイジに襲いかかろうと、鋭い爪を伸ばした状態で静止した男狼から剣呑な雰囲気溢れ出る。



カイジの言葉にはまるで耳を貸さなかった彼だったが、他ならぬ憎きジャッキーの言葉には顕著な反応を示す。

「ほっほっほ、お詫びと言っては何だが、わしがお主を人間に変えてやるう」

そう言っただけジャッキーは競技台の下に視線を移した、その間に自分の役割は終わったと、カイジは競技台を下りる。

「クリリン、ちょっと来い」

カイジと入れ替わるように競技台に上がったのは、既に自分の試合を終えカイジの試合を観戦していたクリリン、その後はあつという間だった。

催眠術を使い男狼にクリリンの後頭部を満月と錯覚させたジャッキーは見事に男狼を人間に変えてみせた。意識を取り戻した男狼は、いつの間にか人間に変わっている自分の姿に驚いたが、周りの人間に事情を聞いた後、先程までの態度がウソのようにジャッキーに礼を言い、予選会場を去っていった。

何はともあれ、それ以外は本当に何事もなく予選は進んだ、亀仙流の弟子たち、そしてジャッキー・チュンは危なげなく全員予選通過を果たしたのである。

「すごーい！！ やったじゃない。4人揃って出場できるなんて！！」

団子のタレで口元を汚したブルマが心からの賛辞を4人に贈る。4人も得意気な笑顔でそれに応えた。

そこでクリリンがキョロキョロと誰かを探すように辺りを見渡す。

「武天老師様が見えませんか…」

この言葉にカイジは自分の背中に冷や汗が流れるのを感じた。

武天老師がいるはずない、何故ならつい先程までジャッキー・チュンの姿で彼らと一緒に予選に参加していたのだから。

この場その事実を知る唯一の人間であるカイジは、なんとか誤魔化さねばと、頭を高速回転させた。

しかし、カイジの考えが纏まる前にブルマが追い打ちをかけるように言葉を繋ぐ。

「ずっといかなかったわよ、人ごみの中でチカンでもしてるんじゃないの!？」

「い、いや武天老師様はオレたちの予選を見てたんだ!」

カイジは咄嗟に頭に浮かんだ嘘を口にする、あまりうまい嘘とは言えない。

「え〜？ 亀仙人のじつちゃんの匂いなんかしなかったぞ？」

「うっ！ そ、それは……」

匂いで人を判別できる野生児悟空の追求に追い込まれるカイジ、しかし助け舟が彼の背後から現れた。

「カイジの言つとおりじゃよ。まったく、チカンなんぞと一緒にしおって……」

「あつ、武天老師様!!」

カイジの背後から現れたのは武天老師こと亀仙人本人だった。

「武天老師様、我々の試合を見ておられたのですか!？」

「うむ！ 4人とも目を見張るばかりの上達ぶりじゃった！ 今回は優勝を狙えるかもしれぬな!！」

「はい、頑張ります!！」

力一杯答えるクリリンとヤムチャを見ながら、本人による肯定もあるし、この場はなんとか誤魔化せそうだと、カイジはホッと胸を撫で下ろす。

「何だよカイジ、武天老師様が見てるなら教えてくれたっていいじゃないか」

「みんな試合中だったしな、直ぐにオレの試合も始まったし、伝えようにも伝えられなかったのさ」

『まもなく天下一武道会を始めます！ 選ばれた8名の出場者は武道寺本館に集合してください!』

アナウンスを聞きながら、今のは我ながら上手い嘘だったと、カイジは心中で自画自賛した。

「はい、出場者の皆さん集合してくださいーい！」

予選をくぐり抜けた8人の武術家たちが本館に集められた。

いよいよ天下一武道会の対戦相手の組み合わせを決めるクジ引きが始まる。

これ以前に鉢合わせした亀仙流と鶴仙流による小競り合いが起きたのだが、割愛する。

ただカイジ的にはあの程度の挑発はカリン様との生活で慣れていたので特に何も感じなかったと記しておこう。

「えー、ではまずジャッキー・チュンさんから」

最初に名前を呼ばれたのは武天老師扮するジャッキー・チュン。

「ほいほいほい」

軽い返事とともにゆっくりとした足取りで前に出るかの翁からは、試合に臨む上での緊張や気負いといったものがまるで感じられない。

あくまで自然体、長い年月が生み出した理想的な精神状態だ。

「4番じゃな」

「第2試合です」

ジャッキー・チュンの名がトーナメント表に書き込まれる。

「次は…ヤムチャさん」

次に名前を呼ばれたのはヤムチャだった。鶴仙流の一派との小競り合いの時から彼の表情には自信が溢れていた。それは3年間の厳しい修業に耐えきった経験から出てくるものだった。

「はい」

明瞭な返事とともに堂々と前に出るヤムチャ、その背後で妖しく目を光らせる男がいた、鶴仙人の一番弟子、天津飯である。

彼はヤムチャの名前が呼ばれると同時に隣りに立つ鶴仙流のもう一人の弟子、彼の弟子にあたる餃子チャオスに向けて何事かを呟いた。

すると餃子はクジの箱に指先を向けて、その伸ばした指を何かを操るかのようにクイッと動かした。

ピッ

「むっ?」

「1番か…」

ヤムチャがクジを引き終わるのと鶴仙流の一派が不審な動きを止めたのはほぼ同時だった。

「はい、第1試合ですね」

自分の名がトーナメント表に刻まれるのを見ているヤムチャの背後で、妖しげな笑みを浮かべる鶴の一派、しかしそのさらに後方で

一連のきな臭いやりとりをずっと見ていた人物がいた、カイジである。

彼はつい先程すぐ近くで突然感じた一風変わった気の波動に疑問符を浮かべた人物でもある。

その変わった気の出所をすぐに辿って、その気を放った人物が鶴仙流の弟子、餃子からのものだと分かると、即座に彼の監視を始めた。

これほど迅速かつ正確な行動は、偏に気の扱いに秀でたカイジだったからこそできたことだった。

芽生えた疑念、元から鋭い目を更に鋭くして警戒心を高めるカイジ。

「え〜……パンプットさん」

「はい」

3番目に呼ばれたのはパーマ頭の男、この中で唯一鶴亀勢力と無関係の男、ある意味今大会最も不幸な男、パンプットである。

ガサガサとクジ箱の中身をあさるパンプット、その場のほぼ全員がパンプットに注目する中、唯一カイジだけは餃子と天津飯の動きを監視していた。そして……



ピッ

「!」

再び餃子の指先から放たれた気の波動を感じたカイジ、厳しかった顔つきはこれまでより一層厳しいものへと変わる。

「7番です」

パンプットが自分の番号を読み上げ、トーナメント表にその名が書き込まれる中、カイジは不機嫌なオーラを全身に纏いながら鶴仙流の一派にゆつくりと近づく。

「天津飯さん」

「ああ」

名前を呼ばれ前に出る天津飯、隣りにいた餃子は予定調和の如く不思議な力・超能力を秘めた指先を掲げる。

と、その時、その指先とクジ箱との間を遮るようにカイジが体を

滑り込ませた。

「!？」

「なにっ!？」

驚く2人の鶴の弟子、その視線を一身に受けながらカイジが口を開く。

「何をやってるかは知らんが、無粋な真似するなよ」

「っつ!!!」

自分たちの行動がバレたことに二度驚く2人、周りに立っていた人間たちもカイジの突然の行動、意味不明な言動、それに顕著な反応を示す鶴仙流の弟子たち、全く理解できない状況に戸惑いを見せる。

「あ、あの〜……一体何が……？」

状況が分からず困惑しながらも、司会として、審判としてその場を取り仕切ろうと、意を決してこの妙な状況を作り出した3人に声

を掛けるサングラスの男。

「なに、大会はルールを守って、正々堂々についてことさ」

朗らかな口調で答えるカイジ、しかしその目はまるで笑っていない。

「は、はあ……」

いまいち釈然としないながらも、タイムスケジュールもあるので、サングラスの男はそのままクジ引きを続行した。

その後のクジ引きは問題なく進み、トーナメントの対戦表は以下のようになった。

第1試合 ヤムチャ 対 カイジ

第2試合 天津飯 対 ジャッキー・チュン

第3試合 クリリン 対 餃子

第4試合 パンブット 対 孫悟空

第22回天下第一武道会が始まる。

## 8 強揃う（後書き）

日に三回の投稿、やっつけにならないように気をつけたけど大丈夫かな……

3話投稿したのにあまり進まなかった事実。

次回は戦闘も入るし、ちょっと時間かかるかな？

では。

## 狼の狩り

対戦表が決まった後、クリリンたちはカイジに奇妙な行動の理由を尋ねた。

「結局何だったんださっきのは？」

尋ねるクリリンの背後にはヤムチャ、ジャッキーの2人が、目的は同じようだ。ただジャッキーに関しては何となくだが察しているようでもある。ちなみに悟空は食堂で腹ごしらえをしている。

「鶴仙流の小さい方がな……………」

「小さい方っていうと…あの餃子とか言う奴か？」

「ああ、妙な力を使う」

カイジの言葉に餃子の対戦相手であるクリリンは訝しげな顔をす  
る。

「妙な力って……………」

「超能力、かな。気をつけるよクリリン」

超能力などという嘗て出会ったことのない未知の力を相手にどう闘うべきか、クリリンは頭を捻らせる。

「ふむ、なるほど…その超能力でクジの結果を弄ろうとしていた訳じゃな」

「恐らく……」

カイジとジャッキーの会話を聞いたヤムチャはあからさまに顔を歪める。元から鶴仙流に対してイイ感情を抱いていなかったヤムチャは、彼らに対する嫌悪感をより一層強いものとする。

「ちっ、汚い真似しやがって……」

悪態を吐くヤムチャ、彼は自分のクジを弄られた1人でもあるのでその恨みも正当なものと言えるだろう。

「しかし、初戦からヤムチャさんとカイジが当たってしまったとは…残念ですね」

超能力に対する考えがある程度まとまったのか、クリリンが会話に復帰した。

「まあ、どうせいつかは闘うんだ、それに初戦からカイジみたいな強い奴と闘えるんだ、逆にラッキーだぜ」

そう言つとヤムチャは不敵な笑みを浮かべてカイジの方を見る、対するカイジも望むところだと言わんばかりに正面からその視線を受け止めて、自らも目をそらさない。

（ほっほっほ、新しい時代はもうすぐそこまで来ているようじゃの）

ライバル心を剥き出しにする己の弟子たちを、ジャッキーは穏やかな瞳で見つめていた。

『皆様、大変長らくお待たせ致しました！』

ただいまより、第22回：天下第一武道会を始めます！！！！』



待ちに待った天下一武道会の開催に盛り上がる観客たちを、審判を務めるサングラスの男がさらに煽る。

『予選大会においてなんと、182名もの腕に覚えのある武道家の中から勝ち抜いてきた8名の選手!!』

その8名がトーナメント方式で戦います!!』

果たして天下一は誰か!!』

優勝賞金の50万ゼニーを手にできるのは一体誰でありましょうか——っ!!』

ワーワーと騒ぐ観客たちに満足したように一度頷くと、審判の男は第1試合の開始を高らかに宣言する。

『それではいきなり第1試合を始めます!!』

ヤムチャ選手 対 カイジ選手です!!』 どうぞ————

——っ!!』

「悪いが勝たせてもらっぜ、カイジ」

「そう簡単にはいかねーよ」

互いに拳を相手の胸に突き合わせ、正々堂々手加減抜き勝負を誓った。

満を持して現れた2人の選手に、会場は割れんばかりの歓声をあげた。

『皆さん驚くなかれ、今回対戦するヤムチャ選手、カイジ選手の2人は、あの亀仙人こと武天老師様もお弟子さんなのであります！ちなみに今大会の8名の内、なんと4名もの選手が亀仙人のお弟子さんと、いうことです！』

前大会でも大活躍だった亀仙流勢が今大会でも多く出場していることに、会場は感嘆と驚きの声を漏らす。

『さらあああに！！！残り4名の選手の内2名が、亀仙人と双壁を為す鶴仙人のお弟子さんなのであります！！！』

「すげえな……ほとんどが亀仙人と鶴仙人の弟子だよ」

最前列の観客がこぼした感想は、会場全体の気持ちを代弁していた。

更に言えばカイジと本人以外は知らない事実ではあるが、残り2人の内も1人、ジャッキー・チュンは亀仙人本人であるため、実質出場者8名の内7名が鶴亀勢力のどちらかに属していることになる。観客たちが知れば驚愕するであろう事実である。

「ヤムチャさまー！！ カイジさーん！！」

「どつちも頑張りなさいよー！！」

ランチのピストルを使った脅しで首尾よく観客席の最前列を確保したブルマたちが、武舞台の中央で向かい合う2人に声援を送る。

しかし、この時既に2人は極限の集中状態にあり、仲間からの声援も聞こえていなかった。

「3年間の修業の成果、見せてやるぜ……」

「それはこっちのセリフだ……」

それつきり口を閉じ、各々腰を落とし構えをとった。

それを見て審判は戦いの準備は整ったと判断し、遂に宣言した。

『では、第1試合  
ヤムチャ選手 対 カイジ選手  
始めてくださいっ！！！』

3年前の時点でのカイジの実力、3年間の修業で得たであろうカイジの実力。

様子見は不要、ヤムチャは最初から全力で仕掛けることにした。

腰を落とし、低い姿勢を保ったまま地を這うように駆け、カイジへと肉迫する。

ヤムチャと相対するカイジは一瞬、駆けるヤムチャの背後に牙を剥いた狼の姿を幻視した。

「新狼牙風風拳！！」

ヤムチャが昔から得意とする技、狼牙風風拳。

狼牙風風拳は、猿拳、虎形拳、蝟螂拳トウロウ、鷹爪拳ヨウソウといった数ある技と同じように人の身で狼の姿を模した象形拳の一種である、しかし武術家として未熟だったヤムチャが開発したこともあり、その技自体はまだまだ未完成で飢えた狼の脅威を十分に再現するにはいかなかった。

しかしヤムチャ、彼が亀仙流の修業によつて手に入れた常識を越えた身体能力に活かして、新たに開発した新狼牙風風拳は、襲い来る狼の牙の威力、その恐ろしさを、本物以上のクオリティで再現することに成功した。

「はあああああつ！！！」

狼の牙を模した両手が縦、横、それこそ縦横無尽に襲いかかる。

無論その攻撃をすんなりと受けるカイジではなく、右へ左へと武舞台を広く使つて避け続けるのだが、ヤムチャはそれを執拗に追いかける。

いくら避けても止まない攻撃の嵐に、カイジはたった1人の男を相手にしながら、獲物に襲いかかる狼の群れを相手にしているような錯覚に陥った。

『おーっとお！！ 試合開始の合図と同時にヤムチャ選手がラッシュ！ ラッシュ！ ラーラーッシュ！！ 意表を突かれたカイジ選手は防戦一方だあ！！！！』

のっけからの派手な展開に、実況も観客も一気にヒートアップする。

対照的にカイジの頭の中は冷静だった、ヤムチャがこれほど深追

いしてくるのであれば、タイミングを図って強烈なカウンターを叩き込める。

先手を取られた焦りは多少あったが、今はむしろ自分のペースで試合が運んでるとさえ思っていた。

「……………!!!(今だっ!!!)」

突き出されたヤムチャの拳を紙一重で避けたカイジは、最高の力ウンターチャンスを得た。

「シッッ!!」

ギロチンよりもよっぽど凶悪な手刀が振り下ろされる、カイジにはその手刀がヤムチャの首もとに叩き込まれる未来が見えていた。

しかし、現実はそのようにはならなかった。

『あーっつと!?! ここでヤムチャ選手、一端距離を取った! それもそうでしょう、あれほどの動きを長時間続けるのは相当な疲労になると思われます!?!』

否、そうではない。

一般人である審判や観客たちには分からなかっただろうが、ヤムチャが踏んだボックスステップはカイジが放ったカウンターに対する、明らかな回避行動だ。

必中と思われた、最高のタイミングで放たれたカウンターは狼の首ねっこを捉える瞬間に、狼自身のありえない動きによって空を切った。

カイジを含め、その動きが見えた達人たちは大いに驚いた。

そんな彼らに対してヤムチャは口元をニヤリと歪める。

「知らなかったのか、カイジ？ 狼はみすみす敵の罠に嵌るような愚かな真似はしない」

膝を深く曲げ、ピンと張られた弓の弦のように力を溜めながらヤムチャは言う。

「狼は臆病なんだ」

空気を裂くような速度で迫るヤムチャにどう対処しようかと、狼の牙を捌きながらカイジは考えを巡らす。

しかしヤムチャの攻撃はそんな猶予は与えないとばかりに、苛烈さを増していく。

「……“狼は牙ではなく足で狩りをする”という言葉がある……」

閃光のような攻撃を続けながら、ヤムチャは突然そんなことを口にした。

“狼は牙ではなく足で狩りをする”とは野生動物の中では決して足が速いわけではない狼が、しつこい追跡によって狩りを持久戦にもっていくことを表した言葉である。

確かに執拗にカイジを追い回すヤムチャの攻撃はその言葉を表しているように見えなくもない。

しかし、ヤムチャが言うそれはまた別の意味を持つ。

その意味を考える間もなく、カイジは上段から振り下ろされるヤムチャの攻撃を、上半身を後方に反らすことで避けようとする、が、現実はまだしてもカイジの想像とは違う方向に展開した。

パシッ



「なっ!?!」

上段からの攻撃は囷、ヤムチャはカイジが紙一重にかわそうとするあまり、その場に残ってしまった足を、左足の鋭い蹴りで払った。

「本来の意味とは違うが、これもまた一つの解釈、“狼は足で狩りをする”」

上体を反らした状態で足を払われたため、一瞬宙を舞うカイジ、その無防備な喉笛に先程は囷として存在した牙が、今度は本物として襲いかかる。

さらに下段から迫るもう一方の牙、上下から迫る攻撃は、まさしく噛み合わされる狼の牙だった。

そして武舞台に鮮血が舞った。

## 狼の狩り（後書き）

ちょっと短い、しかしキリが良い。

少年ジャンプみたいな“引き”、カイジの運命は…！？みたいな煽り文が書いてあって欲しいです。

では。

## 油断禁物（前書き）

餃子が天津飯を呼ぶとき、原作では最初「天」と呼んでいますが、ここでは「天さん」固定でいきます。

## 油断禁物

ポタポタと血の雫が落ちる。

カイジの血が武舞台を朱く染める。

しかしその血は、狙われた首からではなく、何故かカイジの足から溢れたものだった。

それを見たヤムチャが舌打ちとともに悔しそうに言葉を漏らす。

「新狼牙風風拳でも、完全には捉えられなかったか……………」

『これは危なかった！ カイジ選手、絶体絶命かと思われたヤムチャ選手からの攻撃を、右足を犠牲にすることでなんとか切り抜けました！！』

足を払われて空中で完全に死に体になったかと思われたカイジだったが、身体に刻み込んだ鍛錬の成果か、または隠された戦士の本能なのか、己の首もとへと迫る狼の牙に対して、カイジは払われた右足を振り上げた。

誤差に振り上げられた足は、とても宙に浮いた不安定な状態から放たれたとは思えぬ威力を持ち、ヤムチャの攻撃を弾いた。

勝利を半ばまで確信していたヤムチャは、カイジの圧倒的不利な体勢からの予想外の抵抗に大いに驚いた、一瞬とは言え体が硬直してしまうほど。

結果、未だ隙だらけの体勢のカイジに対して、満足な追撃を放つことも出来ず、慌てて繰り出した手刀はカイジの右足を薄く切り裂くことしかできなかった。

ヤムチャが最後に放った手刀も、決して侮れる威力ではなかった。

そも、狼牙風風拳はその使用に際して手足を気で強化する。

当然カイジに振り下ろされた手刀も気で強化されていた。強化されたヤムチャの手刀は下手な刃物よりよっぽど鋭い。

しかしそんなヤムチャの手刀でも、カイジの足の薄皮一枚しか切り裂くことが出来なかった。

気を帯びた攻撃には気を帯びた防御で対抗するしかない。

恐るべきはカイジの気のコントロール技術、その完成度である。

元から得意だった気のコントロールを、3年間さらに磨いたカイジは意識せずとも脊髄反射的に身体全体どの箇所でも気を集中することが出来るようになった。

右手で攻撃したい時は右手に、左足で防御したい時は左足に。

カイジが本能的に振り上げた右足にも彼の気は十分に巡っていた。それは最早習性、思考するまでもなく、1秒より遙かに短い時間

でカイジの気は身体中を駆け巡る。

亀仙人の下で、少なからず気について学んでいたヤムチャは、己のそれとは段違いであるカイジの気の扱いを見て、全身が震えた。

しかしそれは恐怖故ではない、強者を前にした武者震いである。

試合開始直後の隙をついた上で放った自身最高の技を躲されたことに、少なからずショックを受けていたヤムチャだったが、そんな感情は既に頭の中から消し去られていた。

強い相手、強いカイジ。

闘いたい、強いカイジと闘いたい！

そして勝ちたい！！

心を奮わせるヤムチャ。

彼もまた悟空らと同様に、強者との闘いに『楽』を覚える、戦士のメンタリテイの持ち主だった。

「まったく、いてえじゃねえかヤムチャ、道着も汚れちまうし……」

ヤムチャの手刀で穴が開いた上に、自分の血で汚れてしまった貰ったばかりの道着を見ながら、どこか無機質な印象を受ける感情を感じさせない喋り方のカイジ。

普段とは違うカイジの様子に、ヤムチャは訝しげに眉をひそめる。

「痛いだって？ 冗談だろ、血だってもう止まってる」

喋りながらもカイジの隙を窺うヤムチャ、しかしカイジは無造作に立っているように見えてその実、隙なんて微塵も見せない。

カイジの右足の出血はもう止まっている、ある程度気のコントロールが出来るようになれば、出血を止めることはさほど難しいことではない。

ヤムチャの言葉にニヤリと笑みを返すカイジ、しかし内心では己の未熟さを恥じ、反省しきりだった。

試合開始直後に隙を晒すなど武術家として言語道断、カイジは浮ついていた思考を今度こそしっかりと引き締めた。

「……………よしっ！……」

自分の頬を叩いて気を引き締め、再び構えをとるカイジ、口元こそ笑みを浮かべているが、目は射抜くような鋭い視線をヤムチャに送っている。

「待たせたな、こっからが本番だ！」

気合いの声とともにカイジが身に纏う気が爆発的に増える。

「出たな“風林火山”、それなら俺も！！」

対するヤムチャも姿勢を低くして“新狼牙風風拳”の構え、全身を覆う気の大きさはカイジには及ばないが、手足などの局所的に見れば、カイジの気のガードを十分に突破できるだけの気が集まっている。

それは危険な賭けだった、先程“新狼牙風風拳”がカイジに通じたのは、試合開始直後の意表を突いたことと、この技がカイジにとつて初見であったことが大きく関係している。

今のカイジに隙なんて微塵もない、少なくともヤムチャには感じられない。

とても意表を突ける状況とは思えないし、一度食らった技とは言葉二度目ともなれば何らかの対応をしてくるだろう。



(それでも、今の状況を打破するには、これしかない!!)

危険は重々承知、ヤムチャは自身最高の技にこの試合に於ける自分の運命を賭けた。

武舞台で向かい合う2人が互いに低い姿勢をとる。

待ったなしの真つ向勝負。

今にも始まらんとする超人どうしの激突、知らず知らずの内に辺りは緊張感に包まれた。

2人は振り絞られた矢のように、限界ギリギリまで力を溜める。そして耳が痛くなるような沈黙の中、

ゴクリッ

1人の観客が唾を飲み込む音がいやに響いた。

次の瞬間、2人は武舞台の床が砕けるほど強く踏みこみ、雷のような速度で駆け出した。

「シャアツツ!!」

「ぐっ…だらあ!!」

カイジの決るような左フックを、ヤムチャは左手で内側から押さえつけるように外側へはじき、体を半回転させて裏拳を顔面目掛けて繰り出す。

「らあっつ!!」

「ツ!! くそっ!!」

カイジはヤムチャが放った裏拳を頭を低くするという小さな動きで躲し、直ぐさま次の攻撃を繰り出す。

悪態を吐きながらも、ヤムチャもその攻撃を紙一重で躲した。

信じられない速度で繰り広げられる一進一退の攻防に観客は大いに盛り上がる。

『何というスピードでしょうか!! あまりのスピードに実況を

挟む暇もありません!!」

互いに常識を遥かに超えたスピード、一般人には互角の勝負に見えていた。

しかし、ほんの少し、僅かだが確実に存在する実力差が幾人かには見えていた、彼らもまた世の常識を超えた達人たちだった。

そしてその達人たちには、早くも、この試合の勝者が予想できていた。

「終わりだな、実力差は明らかだ。勝ち進むのはあのカイジとかいう奴だ」

それまで予想以上の亀仙流の実力に、多少なりとも驚いていた天津飯だったが、相手の実力分析に関しては極めて冷静だった。

「? そうなの?」

達人ではあるが、他者の実力を把握するのが苦手な餃子チャオズが疑問符を浮かべる。

彼の目には、カイジとヤムチャ、それほど実力差があるようには見えていなかった。

「よく見てみる、攻撃を必死に躲しているでかい方の男に対して、あのカイジとかいう奴の動きにはまだまだ余裕がある」

そう言われて視線を武舞台の2人へと移す餃子、しかし彼にはいまいち分からない。

そんな餃子の気持ちを察したのか、天津飯は直ぐにもう1つの方を提示した。

「動きを見ても分からないなら、顔を見ればいい」

顔、言われた通りに餃子は動き回る2人の表情を目を凝らして見る。

なるほど確かに、ヤムチャの表情には余裕がなく額に汗を浮かべて戦っている。

対するカイジは涼しい顔をして、その攻防を続けている。いや、時折口角を上げて笑みを浮かべている辺り、本当にまだまだ余裕があるのだろう。

「天さん、あいつ強いの？」

あいつとはつまりカイジのこと、相手の力量を測ることが苦手な餃子の単純な疑問に、天津飯は余裕の笑みを浮かべながら答える。

「確かにそれなりにやるようだが、奴らの次の対戦相手はこの俺だ。どちらが勝つにしても俺には勝てまい」

ニヤリと笑う天津飯は、今大会における自分の優勝を確信した。

「恐らくは奴らが亀仙流の実力ナンバー1と2、この分だと優勝は俺、お前が準優勝、もう勝負は見えなな」

一方の亀仙流チーム、亀仙人扮するジャッキー・チュン、孫悟空、クリリン、こちらは3人とも武舞台で戦う2人の実力差が見えていた。

「ふわ〜……、カイジの奴どんな修業をしたんだ？ あのヤムチヤさんが齒が立たないなんて……」

「クリリン、まだ勝負は分かんねえぞ」

クリリンの呟きに悟空が注意する、数多くの実戦をくぐり抜けてきた悟空は実力が全てではないと本能的に理解していた。

そういう意味で、実力差だけで勝敗を断定した天津飯は、戦況分析という点に於いて、悟空より劣っていると言えるかもしれない。

「でもよ悟空、実際厳しいぜ？」

次第にヤムチヤの劣勢が顕著になっていく2人の攻防を見ながらクリリンは言う。

そんな2人の会話を聞いていたジャツキーは弟子を見守る師の顔をしていた。

「クリリンよ、ヤムチヤの顔を見ろ」

そしてジャツキーは師として、まだまだ戦況分析が雑な弟子に、

1つアドバイスを授ける。

奇しくもそのアドバイスは鶴仙流の兄弟子である天津飯が弟弟子の餃子に向けたものと同じだった。

「顔、ですか？ わかりました」

先程の餃子と同じようにヤムチャの顔を見るクリリン、額に汗を浮かべ戦うヤムチャにはやはり余裕などない。

「目じゃ、ヤムチャの目、その奥に光るものを見つめよ」

「目の奥に、光るもの……」

言われるがままにヤムチャの目を注視するクリリン、そしてその目に宿る意志に気付いた。

「ヤムチャさん、まるで諦めてない……!!」

それどころか、この苦況に立たされて尚、その目は愉しげに爛々と輝いていた。

その瞳が浮かべる笑みにはどこか余裕があり、まだ何か奥の手が

あるのではないかと、見る者に思わせた。

事実、そうであった。

ワーワーと観客が歓声を挙げる中、武舞台の上では、腕や足時には頭がぶつかり合う鈍い音が響いていた。

“風林火山”と“新狼牙風風拳”、互いに最高の技を出し合っただけなら、その差は素人である観客たちにも分かるくらい顕著に現れてきた。

具体的にはヤムチャがダメージを負うことが増えてきたのだ。

そして……

『あーっつと、ヤムチャ選手ダウンです！！ 激しいぶつかり合いはカイジ選手に軍配が上がったようです！！ カウントをとります！ ワン！ ツー！』



直ぐに立ち上がるヤムチャ、しかし蓄積したダメージや疲労は隠せず、肩で息をしている状態である。

それでも尚、目の奥に見えるその闘志には少しも揺るぎがない。

カイジもそれが分かっており、油断なけ構えを取っている。

このまま行けば、自分に勝機はない、ヤムチャにもそれが分かっていた。

故に奥の手、とっておきの技を使ったワンチャンスに全てを賭ける決心をした。

「本当は決勝で使う予定だったのにな……まあ、カイジ相手ならしょうがないか……」

派手に弾き飛ばされたお陰でカイジとの距離は遠い、全ての準備は整っていた。

「かゝめ」

腰だめに構えた両手に気が集まっていくな。

“新狼牙風風拳”が敗れた今、ヤムチャが最後に全てを賭ける技、それは亀仙流の奥技かめはめ波だった。

「かめはめ波だっ！！」

「ホントだ！！ ヤムチャさんいつの間に……」

驚く悟空とクリリン、しかしジャッキーはヤムチャが最後に放つ技がかめはめ波だということに眉を顰める。

（カイジにはかめはめ波は通じん、ヤムチャの奴どういってもりじゃ……？）

カイジの使う技の中に“巫門遁甲”という技がある、相手の気の流れを読み進むべき方位を決める技。

端的に言うとカイジには気功波の類は効かない、効かないどころかそれを利用して、突然背後に現れたりする。

ただ単純にかめはめ波を撃つだけでは、わざわざカイジにカウンターチャンスを与えるだけである。

無論ヤムチャにもそれは分かっていた、分かった上で策を練った。

「は〜め〜」

（“巫門遁甲”を使った時、カイジも鉄人カイドウもいつも相手の背後に現れたらしい、現れる場所が分かっているなら先回り出来る！！）

実際にカイジが使用したのを見て、亀仙人から元祖“巫門遁甲”の使い手鉄人カイドウの話聞いた上で導き出した“巫門遁甲”の特性、ヤムチャはそれを利用する。

「波ーーーーっ！！！！」

ヤムチャの手の平から放たれる膨大な気の波、真っ直ぐにカイジへと向かって行く。

それに対してカイジはニヤリと笑い、気功波に対してほぼ無敵なその技を発動させる。

「巫門遁甲」

カイジがそう呟いた瞬間、その姿は影も形もなく消え去った。

標的を失ったかめはめ波はやや斜め上を目掛けて飛んでいき、観客の頭の上を通って空の彼方に消えていった。

観客が呆然とする中、ヤムチャだけは既に背後を向いていた。

元から外れると思っていたかめはめ波の軌道に意識を裂く必要はない。

（来いカイジ！！ 返り討ちにしてやる！！）

そして待ちに待った瞬間（実際には1秒と経っていないのだが）、予想通りの位置にカイジが現れた、その顔を驚愕の色に染めて。

「終わりだ、カイジ！！」

気合いの声とともに、残る全ての気を込めた右手を振るった。空中にいるカイジには回避する術がない。

（勝った！！）

ヤムチャは勝利を確信した。

次の瞬間、驚愕に染まったのは彼の顔だった。

ブンッッ

空しい音とともに必中と思われた拳が空を切ったのだ。

「なっ!!?!?」

空中にいたカイジの姿が、まるで幻のように消えていく。

「残像だ」

慌てて背後を向いたヤムチャだったが、全ては遅すぎた。

地面スレスレを刈るように振るわれるカイジの左足、ヤムチャは何の抵抗もできず、その身を宙に浮かばされる。

続けざまに放たれるサマーソルト、宙を泳ぐヤムチャの顎を正確に捉え、さらに上空へと蹴り上げる。

「ぐっ……!!」

何とか体勢を立て直そうとするヤムチャだが、顎を蹴られ脳を揺らされたため、視界が歪み何も出来ない。

「食らえっ!!」

そして落ちてきたヤムチャに叩き込まれる容赦のないボデーブロー、ヤムチャの体は吹き飛び、武舞台の上で一度跳ね、場外へと落ちた。

「え、あつ……」

電光石火の早技に審判は何が起きたのか理解が追いつかない。

ただ、混乱する彼の視界に確かに場外に横たわる1人の選手の背中が見えた。

審判の習性か、彼はほぼ反射的にマイクを口元へと持っていき、こう言った。

『場外！！ カイジ選手の勝ち————っ！！！！』

カイジ、準決勝進出決定

## 鶴仙流の実力（前書き）

ジャッキーと天津飯の闘いは原作をそのまま文章化しただけです。

## 鶴仙流の実力

カイジが最後に放った全力のボディブローは、顎を蹴られて朦朧としていたヤムチャの意識を体ごと完璧に吹っ飛ばした。

悟空やクリリン、観客席のブルマたちも、ヤムチャが柔な鍛え方じゃないのを知っていたので、さして心配はしてなかったのだが、武道会の医療班は大いに慌てた。

急ぎ医務室に運ばれ、医師の判断により数日は目覚めないだろう、と診断されたが、そこは亀仙流クオリティ、ものの数分で目を覚ましたヤムチャは驚愕する医師をよそに、意識を奪った張本人ということで唯一付いてきていたカイジと互いの健闘を讃え合い始めた。

「しかし、とんでもなく腕を上げたなカイジ。俺も結構いけると思っただがな……」

「地力じゃ負けていたぞ、ただオレには“風林火山”があつたからな、まだ未完成だけど」

「そういうのも含めて地力って言うんじゃないのか、ってあれで未完成だったのかよ……」



武術家同士が闘って、勝敗が決して、その勝者と敗者が何を語るというのか、互いに負の感情はないのか。

カイジとヤムチャにもそんな感情がないとは言わない、ただ、2人共にそんな所を含めて、柔な鍛え方をしていない。

「もう動けるか？」

「ああ問題ない、お前こそ少し休んでいったらどうだ？」

お互い随分消耗したたる、そう続けるヤムチャは次の試合に臨むカイジのコンディションを心配していた。

消耗したのは事実である、しかし、休むよりもまず優先すべきところがカイジにはある。

「いや、それよりも試合を見に行こう」

カイジが優先したのは休息よりも試合観戦だった。

その理由にヤムチャも思い当たるものがあり、なるほどと頷く。

「そうだな、勝った方が次の対戦相手だもんな、見といた方がいい」

ウンウンと1人頷くヤムチャ。

間違いではない。

確かに理由の一つではある。

ただ、そんな理性的、理屈的、合理的な理由ではなく。

もつと感情的、本能的な何かがかイジの意識を武舞台へと向ける。

この試合を見逃すわけにはいかない。

それは何故か、カイジにも分からなかった。

「しかし、勝つのはジャッキーさんだろうな。あの三つ目ヤローもそれなりにやるようだが、ジャッキーさんには適わないだろう」

「いや」

一人納得していたヤムチャの言葉に、反射的に反論を唱えた。

驚くヤムチャに、カイジはゆっくりと告げる。

「どっちが勝つかは分からない、それほど2人の実力は近いと思

う。ただ……」

「ただ……？」

「……ただ、分かるのは、あの2人が互いに全力で闘えば、それは文字通り“死闘”になるってこと、冗談抜きでな」

それはカイジ自身が己の戦力分析を基にして辿り着いた、極めて理性的な推測だった。

急いで武舞台に向かったカイジとヤムチャだったが、武舞台へと繋がる選手控え室に着いた時、そこには自分たちの出番を待つ悟空たちと共に、とっくに試合を始めている筈のジャッキー・チュンの姿があった。

「あれ？ ジャッキーさん試合は？」

「お主たちの試合の後片付けがまだ済んでおらんんだ、今は休憩時間じゃの」

カイジとヤムチャが気で強化された体で全力で動き回ったせいで、武舞台は各所に大小様々な穴が開いてしまい、現在はその修復作業中だった。

カイジとしては試合を見逃さずに済んでラッキーだったのだが、必死な顔をして急ピッチで修復作業をしている係員を見て、申し訳ない気持ちになるのだった。

『大変長らくお待たせしました！ 只今より天下一武道会を再開します！』

係員たちの必死の作業のお陰で、中断からものの10分程で武舞台の修理は完了した。

そのためか観客席からの野次もなく、それよりも待たされた分、次の試合に対する期待で一層の興奮を見せていた。

『それでは第2試合、天津飯選手 対 ジャッキー・チュン選手  
どうぞー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

「さて、行くところか？」

いつも通りリラックスした状態で武舞台に向かうジャッキー、それを見送る悟空たちだったが、その中で唯一カイジだけが彼の常とは違う雰囲気の一つの違和感として敏感に察知していた。尤も、その違和感の正体は何なのかまでは分からなかったのだが。

謎の違和感の正体にカイジが頭を悩ませるのをよそに、ジャッキーは武舞台へと歩を進める。

と、思われたが、何か思う所あったのか、武舞台へと踏み出した足は一步でその歩みを止め、ジャッキーは肩越しにカイジたちの方を振り向いた。

「……………ふむ」

「どうかしたのですか？」

クリリンの声に答えず、ただ何か眩いものでも見るかのように目を細めるジャッキー、その目はカイジたちを通して、その先の何かを見ているようだった。

「老兵は死なず、ただ……」

「へ？」

彼が髭を撫でながら口にした、囁くような呟きが聞こえたのは極めて優秀な耳を持つ悟空だけだった。

「ほっほっほ」

ジャッキーの言葉の意味が分からず首を傾げる悟空や、突然の笑いに何事かと思議そうに見つめるカイジたちに応えることはなく、ジャッキーは再び武舞台へと歩きだした。

カイジたちはその後ろ姿を、ただ呆然と見送った。

『さあ、この試合も見逃せません！！ 天津飯選手は先程素晴らしい試合を見せてくれたヤムチャ選手とカイジ選手の師匠、亀仙人のライバルである鶴仙人のお弟子さんであります！！』

対するジャッキー・チュン選手は、圧倒的強さを誇る実力者で、



一方のカイジたち、クリリンとヤムチャはジャッキーの勝ちを確信した余裕の笑みを浮かべているが、悟空、そしてカイジは厳しい顔つきで武舞台の2人を見ていた。

「へへんっ！ あの野郎、ジャッキーさんに勝てるわけ無いだろ！ ジャッキーさんは前回の優勝者なんだぜ！！」

特にクリリンはジャッキーの勝利をまるで疑っていなかった、前回大会で本人がジャッキーにこっぴどくやられたこと影響しているのだろう。

しかしそんなクリリンに厳しい面持ちの悟空は、冷静に返す。

「わからねえぞ……」

「え？ 何がだよ」

普段とは違う悟空の真剣な声色に振り向き、悟空とその隣にいるカイジの厳しい顔つきにようやく気づいたクリリンが不思議そうに尋ねる。

ヤムチャも医務室でのカイジとの会話を思い出したのか、悟空の話に耳を傾ける。



「あの天津飯って奴の強さはとんでもねえ強さだと思う、多分じいちゃんでも相当苦戦する……」

根拠も何にもない言い分だが、突出実力を持つ悟空の言葉であるが故に全く持つて無視できない。そして、そんな悟空の言葉に無言の肯定を示すカイジにクリリンとヤムチャは、それが紛れもない事実であると突きつけられた気持ちになり啞然とする。

するとそこへ突然一つの人影が近付いてきた、物音一つ立てずに近付いたその影にクリリンとヤムチャは気が付かなかった。

「おい」

「へっ？ うわあ！！ な、なんだお前！！」

突然背後から声を掛けられたクリリンは、振り向いたら目の前にいた人影 チャオス 餃子に盛大に驚いた。

「ひっひっひ、お前ら今頃天さんの強さ気付いたか、遅いぞ」

「な、何だと！！ って、こ、こいつ何で浮いてるんだ！！？」

出会い頭の無礼な物言いに食って掛かるクリリンだったが、目にした光景の珍妙さに氣勢を削がれたしまった。

無理もない、クリリンに話しかけた餃子は糸やワイヤーも使わずに宙に浮いていたのだから。

「ひっひっひ、驚いたか。ざまあみろ」

得意げに笑い去っていく餃子に、ヤムチャは顔をしかめ、悟空は驚きを露わにする。

「すげえ術だなあ」

「クジ引きの時といい、妙な術を使いやがる。これも超能力の類か？」

「いや、あれは違う」

ヤムチャの疑問に答えたのは一人武舞台から目を離していないカイジだった。その何か知っていそうな言い回しに、ヤムチャたちの視線は餃子からカイジへと移り、詳しい説明を促す。

「あれは超能力じゃなくて“舞空術”という気を使った技術だ。

ある程度気のコントロールに長けていて、練習さえすれば誰でもできる」

仕方なく、ヤムチャたちに“舞空術”の説明をするカイジ、しかし視線だけは常に武舞台に向けられている。

「多分あの天津飯という男も使えるだろうよ、あのチビより実力的に遥かに上だし」

武舞台上の天津飯を見ながら言うカイジに、自然ヤムチャたちも武舞台へと視線を戻す。

しかしクリリンだけは頭を抱え何やら考え込んでいる。

「くそ〜……、ということは奴らには場外負けはないってことか……」

先のクジ引きの時といい、クリリンは自分の対戦相手ひいては闘いに臨むこと自体に考えすぎる傾向がある。

「悪くはないことだが、考えすぎて逆に自分を見失っては身も蓋もない。」

「地力で勝つてりゃ問題ねえよ、考えても仕方ねえし、それよりじいちゃんの試合見ようぜ」

あっけらかんと言う悟空に促されたクリリンは、悟空の言つとおり考えても仕方ないと割り切り、ジャッキーたちの試合へと意識を傾けるのだった。

「ちやつ！……！！」

最初に仕掛けたのは天津飯、顔を狙って放たれた拳をジャッキーは左手を上げて防ぐ。

お返しとばかりに即座に放たれた膝蹴りを左手で上手くいなした天津飯は、左の蹴りで再びジャッキーの顔を狙うが、これも躲かれ逆にその足を掴まれて放り投げられてしまう。

ここまでどちらの様子見と言った感じの闘いだが、審判や観客はそのあまりの速さに唖然として言葉を発すことも出来ない。

その間にも試合は進む。投げ飛ばされた天津飯は空中で一回転して受け身を取り、着地と同時に地面を蹴ってジャッキーへと迫る。

「はっ！！！」

地面を滑空しながら迫る天津飯は、顔の前で腕を交差させて×字を作りジャツキーの首を狙う。

その攻撃を飛んで躲したジャツキーは逆立ちするように二本の腕だけで地面に着地し、その腕の力だけで再び宙に舞い天津飯へと迫る。対する天津飯もジャツキーが飛び上がるのとはほぼ同じタイミングで地面を蹴り空中で迎え撃つ。

決して長くはない滞空時間の間に2合3合と、手足が増えていくつにも見えるほどのスピードでぶつかり合う両者、互いに決定打は生まれず、すれ違うように着地しすぐさま振り返る。

「とおっ！！！」

次に仕掛けたのはジャツキー、気合いの声と共に駆けだした途端その姿はノイズが走ったかのようにブレ、次の瞬間天津飯の周囲を取り囲むようにその残像が現れる。

「多重残像拳かつ！！！！！」

現れた残像の数は、以前悟空がカリン塔で出した数と同等かそれ以上。しかしそんな数の残像に囲まれた天津飯はまるで焦らずに素早く周囲を見渡す。

「 つ！！ そこだっ！！！！」

一瞬で本物を見極めた天津飯は、真後ろにいたその本体に振り返り様に強烈な回し蹴りを浴びせた。

激しく壁に叩きつけられたジャッキーに、観戦していたカイジたちは息を呑む、そして蹴りを放った天津飯は得意げに自分の額を指しながら喉を鳴らすように笑う。

「俺の三つの目に誤魔化しは効かんぞ……」

天津飯あ額に持つ第三の目、それにより彼の動体視力は常識の上の更に上の領域まで達している。

不敵に笑う天津飯に、ジャッキーは口の端からにじんだ血を拭いながら、こちらにもニヤリと笑う。

「なるほど、大したもんじゃわい……。このわしもマジにならざるをえんようじゃの……」

そう言つとジャッキーは上着を脱ぎ捨て、老人とは思えないほど鍛え抜かれた無駄のない肉体をさらした。

「来い!!」

敵を見据える目は先程よりも鋭く、威圧感も増している。しかしそれに怯むような天津飯ではない。

「老人だとして遠慮はせんぞっ!!!!」

戸惑い無くジャッキーへと突進する天津飯、武舞台上を駆けながら両手をかざし凄まじい速度で動かし始める。

「この手の動きが見えるかなっ!?!」

天津飯の手は悟空が予選で倒したチャパ王よりも数段早い動きで見者を攪乱した。しかし集中したジャッキーの目を欺くには少々動きが足りなかった。

「っ!?!」

ジャッキーの目の前まで迫ったところで、天津飯の両手はガツシりとジャッキーに掴まれてしまった。

驚いた天津飯は咄嗟に自由な足を出すことも出来ず、その無防備

な腹部に渾身の膝蹴りを食らってしまった。

声にならない悲鳴を上げる天津飯を、ジャッキーは追い打ちとばかりに上空に蹴り上げた。その顔には獰猛な笑みを浮かべていた。

「やったあ!!」

笑顔が漏れるクリリン、ヤムチャとは対照的に悟空とカイジは依然厳しい表情のままだ。

上空に蹴り飛ばされた天津飯、何とか体勢を立て直して地面に片膝をつく形で着地した。その表情は憎々しげに歪んでいる。

「お…のれえ……!!!!」

歯を食いしばりながら絞り出すような声でジャッキーへの怒りを露わにする天津飯、強烈な2連撃を食らっておきながら、それほど消耗した様子はない。

直ぐに駆けだした天津飯、その動きはダメージ直後だというのに鈍くなるどころかそれまで以上の鋭さを持っていた。

「なにっ!？」



さすがのジャッキーもこれには虚を突かれた、攻撃に手応えがあった分、その驚きも大きい。

天津飯が振り上げた膝はジャッキーの胸を一瞬で2回打った、たまらず仰け反るジャッキーに、間髪入れず振り下ろし気味の右拳を叩き込む天津飯。

地面へと叩きつけられるか、という一撃だったが、そう易々とやられるジャッキーではない、殴られた瞬間上体を反らして地面に手を付き、倒れかけた身体を全身のバネを使って跳ね上げる。そして拳を振るった直後の隙だらけの天津飯の顔に、思わず後退するほどの鋭いパンチを入れた。

試合が始まって既に数分、その間中ずっと続いていた超ハイレベルな攻防に、結局審判も観客も一言も発することが出来なかった。

一瞬止まった闘い、武舞台上の2人は互いの予想以上の強さに心中で驚きを露わにしていた。

そしてジャッキーは武術の世界に新たな時代が来ていることをその身をもってひしひしと感じ、冷や汗を垂らしながらも、そのうれしさからほくそ笑んでいた。

鶴仙流の実力（後書き）

1話で終わらすつもりだったのに終わらなかった…無念。

時代の波（前書き）

最後以外は殆ど原作通り、読み飛ばしてもいいレベルかも……

## 時代の波

『非常に激しい闘いが繰り広げられております、ジャッキー・チ  
ユン天津飯戦！！』

勝敗の行方は全くもって分かりません！！！！』

世界有数の使い手2人による闘いは、互いに一步も譲らない激戦  
となっていた。

そして世界有数の使い手であるが故に、互いに相手が全力を出し  
て闘っていないことにも気が付いていた。

既に人知を超えたレベルでの闘いを演じているのに、未だ余力を  
残している。それだけこの2人の実力は高かった。

そして数百年単位で磨き上げられたジャッキーの武に、弱冠20  
歳で迫る天津飯は凄まじい逸材であった。

故にジャッキーは、いや武天老師は思う、惜しい、と。

「お主、それほどの実力を持ちながら、何故いつまでも鶴仙人な  
どにくつついておるのじゃ」

武天老師こと亀仙人と鶴仙人は、かつて武泰斗という偉大な武術  
家の下で腕を競い合った同門の士である。

そして武泰斗の死後、弟子の中でも突出した実力を持っていた人は、それぞれ独立して門派を開いた。

しかし、鶴仙人は道を誤った。

鶴仙人は武術を人殺しの道具として扱い、弟子たちにもそれを伝えた。

結果、鶴仙流を修めた者のほとんどが殺し屋やマフィアといった裏稼業に手を染めていった。

目の前の才能溢れ未来ある若者が、そんな道を歩もうとしていることに、武天老師は我慢がならなかった。

しかし、師と仰ぐ者に対する侮辱に天津飯は眉間に皺を寄せる。

「貴様の知ったことではない！ 俺の師匠を悪く言つとタダではすまんぞ！」

怒気を孕んだ口調でそう言う天津飯に、ジャッキーは片眉を上げて笑い、挑発する。

「ほう、どうタダではすまんと言つのじゃ？」

言外に見せてみる、と誘うジャッキーに今度は天津飯が不適な笑みを浮かべた。

「よかろう、ほんの少しだけ本気で相手をしてやるぜ……………」

「はったりだ！　ずーっと本気でやってたくせによ！」

天津飯の物言いにすかさず茶々を入れるクリリン、しかしその額には冷や汗が浮かんでいる。

内心では彼も天津飯が全力を出し切っていないのではないかと、という不安を感じているのだ。

徐に、極自然な動作で、天津飯が己の額に両手を翳した。

一見間抜けに見えるポーズだが、彼が醸し出す雰囲気、その威圧感から、それを笑う者は皆無で、それどころかその場に言い知れない緊張感のようなものが生まれていた。

一瞬会場全体がしんと静まり、直後にその技は放たれた。

「新鶴仙流・太陽拳！！！！」

天津飯が叫んだ瞬間、彼を中心に強烈な光が発生した。

名前の通り太陽のような輝きがジャッキーの目に飛び込んでいき、

刺すような痛みとともにその視力を一時的に奪った。

その光はジャッキーだけではなく、2人の試合を固唾を飲んで見ている悟空たち、観客たちをも襲った。

そして試合は、全ての人が視界を暗闇に閉ざすなか、動いた。

「ぐっ…！ め、目がっ…！！ どこじゃ…！？」

予想だにしない視覚への攻撃には、さすがのジャッキーも防ぐ術を持っていなかった。

目の痛みに苦しむジャッキー、天津飯はそんな彼の背後に現れた。

ズンツという鈍く重い音が会場に響いた、そして続けざまに誰かが倒れる音がした、誰がとは言うまでもない。

「なっなんだ！？ どうなった！？」

目を押さえながら必死に試合の様子を探る悟空たち、しかし彼らにその術はない。

「殺しはせん、死なせてしまうと、この後試合をさせてもらえんからな。ただしこの先じじいの意識が戻ることはない…」

残酷な言葉を口にする天津飯、その口角はつり上がり、歪んだ笑みを浮かべている。

『これはもの凄い攻撃です!!!』

強烈な閃光を放って目を眩ませ、後頭部に凄まじい膝蹴りーっ！  
！！！！！』

サングラスを掛けていたお陰で難を逃れた審判が、実況を続ける。  
それ以外の人々は未だ皆苦しんでいる。

『ジャッキー選手たまらずダウン!!!! 一応カウントをとります!!!』

ワン… ツー… スリ…』

「なんだって!!! じ、じいちゃん!!!」

審判の実況に驚く悟空、その視力は未だ戻らず、正確な状況が掴めていない。

『フォー… ファイブ………』



決して目覚めることはない、そう言った天津飯の言葉が現実味を帯びようとした時、倒れ臥すジャッキーの体がピクリと動いた。

「うっ……くくく……っ」

ジャッキーは立ち上がった、蹴られた後頭部を押さえ、よろよるとだが、10カウント以内に自力で立ち上がってみせたのだ。

「……………な…なんと……」

さしもの天津飯もこれには驚きを隠せず、口を開け、冷や汗を浮かべながら啞然としている。

「い……今のは効いたわい…！　もうちょっと老人を労らんかい…！」

『立った！！　立ち上がりましたジャッキー選手！！』

さすがにただの爺さんではありませんっ！！』

表情は苦しげだが、軽口を叩く余裕がある。試合続行に関しては何ら支障はないようだった。

驚異的なタフネスを見せた老人に会場からは惜しみない拍手と歓声を送られる。

「あ……あいつ……………」

観客席にいる鶴仙人も驚きを露わにしていた、そして同時に何となくジャッキー・チュンの正体に気付き始めてもいた。

「き……貴様、いったい何者なんだ……!!!」

一方の天津飯は、ジャッキーの正体に感づけるほどの余裕がなくなっていた。若干の焦りを浮かべた表情や口調からもそれが伺える。

「お主、それほどの技をなぜ正しき道に使わぬのじゃ！」

なぜ悪に走る……、技が泣いておるぞ！ 鶴仙人とは縁を切るのじや！」

天津飯の動揺はジャッキーの強さに驚いたから、という理由だけではない。ジャッキーから投げかけられる言葉が、少なからず彼の心を揺り動かしているからでもあった。

「安易な影の道から抜け出せ！！ 陽の光に満ちた世界を走ってみよー！！」

「クサイことばかり言いやがって！！ その減らず口を叩けなくしてやるぜー！！」

内心の動揺を悟らせないように、ジャッキーの言葉を振り払うように攻撃を仕掛ける天津飯。

2合3合と拳を交えた末、天津飯の蹴りがジャッキーの顔を捉えるが、そこに先程までの力はなかった。

いくら隠そうとしても、心の迷いは彼の技に如実に現れていた。

「ほう、どうしたのじゃ？ 先程のような技の切れがなくなったな。迷っておるのか？」

他ならぬジャッキーにそれを指摘され、苦虫を噛み潰したような顔をする天津飯。彼自身、自分が動揺しているのに気付いており、そんな感情を抱く自分に、また動揺していた。

「なっ…なんだと！！ まだ言うかつ！？」

「わしは別に大したことを言っておるわけではない。明るく笑っ

て、のんびり暮らした方がこの世は楽しいと言っておるだけじゃよ。……それとも鶴仙人のように、人に嫌われながら過ごするのが好きか？」

粘り強く諭すジャッキーに狼狽える天津飯、しかしジャッキーが最後に放った言葉で彼の正体に気付いた者がいた。

「わかった！！！　そうか、そうじゃったのか！！！」

観客席にいた鶴仙人である、突然騒ぎ始めた彼に周りの観客たちが驚いている中、鶴仙人は武舞台の天津飯にテレパシーを送る。

天よ！！　そのじじいは亀仙人じゃ！！　亀仙人が変身しておるのじゃ！！！！

テレパシーを聞いて天津飯がハツとした顔をする、混乱する頭の中でそれはまたとない逃げ道となった。

「そうか……　そういうことだったのか……」

「ばれちゃったみたいね、でもみんなには内緒よ」

どことなく安堵の表情を見せる天津飯、それが何に対する安堵なのか、現実と自分の真の望みを直視する恐怖から抜け出せたことに對する安堵なのか。

「しかしわしは鶴仙人と仲が悪いから忠告したわけではないぞよ。お主とお主の技のことをもつたいたいと思つてじゃ……」

それは心からの言葉だつた、亀仙人にとって若く才能ある者たちの出現は長らく待ち望んでいたことだ。自分が天下一と呼ばれるようになって、既に百年以上の時が過ぎた。鶴仙人との対立関係は抜きにして、次の世を担う若者を見すみす潰したくはなかつた。

しかし、一度心の平静を取り戻した天津飯にその言葉は届いていないようだつた。少なくとも表面的には動揺は現れなかつた。

「大層なご託並べやがつて……、お返しに面白いものを見せてやるぜ……」

天津飯がゆつくりと両手を前に翳す、さきほどの太陽拳のこともあり警戒するジャッキー、しかし次に見せた天津飯の構えは予想外だつた。

「か……め……は……」

「かめはめ波……!?!」

真つ先に気付いたのは悟空だった、次いでカイジ、ヤムチャ、クリリンと驚いた顔を見せる。

そしていわば自分のお株を奪われた形のジャッキーは、誰よりも驚きを露わにしていた。

「まつ、まさかつ……!?!」

「め……!?!」

天津飯はその顔に笑みを浮かべていた。

「波!?!?!?!?!?!?!?!」

天津飯の両手から凄まじい光が放たれた、それは紛う事なき“かめはめ波”だった。しかも、その大きさはかつて誰が放った“かめはめ波”よりも大きかった。

「でかい!?!?! 観客に死人が出るぞ!?!?!」

真つ直ぐジャッキーに迫るかめはめ波、避けることは出来るが彼の後ろに観客席がある以上、それは許されなかった。受け止めるしかない。

腰を落とし、足に力を込めてグツと踏ん張り両手を突き出す、間を置かず天津飯のかめはめ波がジャッキーを襲った。

「むっ……！！ ぐう……！！！」

ジャッキーは突きだした両手から伝わるあまりの衝撃に吹き飛ばされそうになる己の体を、踏みしめた足の指先にまで力を入れて耐えた。その甲斐あつてか、かめはめ波は何かが破裂するような鋭い音を立ててそのベクトルを斜め上の上空方面へと変えて、空の彼方へ消えていった。

「あわわわわ……」

「び…びっくりしたあ……」

「危なかった……」

ジャッキーの後ろの観客たちも自分たちがいかに危険だったかを理解していた。スリリングな試合を求めてやってくる観客たちもさすがに肝を冷やす出来事だった。

「……………」

ジャッキーは何も言わなかった。

彼はただ、ビリビリとした痺れの残る自分の手のひらを、じっと見ていた。

『こつ、こつ、これは驚きました！！ 何と鶴仙流の天津飯選手までかめはめ波を放ちました！！』

かつては亀仙人しか使えないと言われた“かめはめ波”も孫悟空、ヤムチャ、と彼の弟子が新たな使い手として現れていたのだが、まさか鶴仙流の天津飯が使うとは誰もが想像し得なかったことだった。口を開けて驚きを露わにする観客たちに、天津飯はしたり顔を浮かべる。

「あの程度の技は一度見れば直ぐに自分のものになる。もっと色んな技を見せてみる、オレはどんどん強くなる！！」

天津飯は第一試合でヤムチャが放った“かめはめ波”を一目で見切りコピーした、その天才的な戦闘センスこそ鶴仙人が彼を弟子とした理由だった。

グツと拳を握りしめほくそ笑む天津飯に対して、ジャッキーの顔には明らかに疲れの色が見える、しかしそんな劣勢の中、ジャッキ



「は何故か微笑んでみせた。」

「まさかこれほどの腕とは、まったく天晴れじゃよ。わしは嬉しいぞよ、ぞくぞくするわい、明るい道を歩んで大物になれよ」

「なに!?! まだ言うか!」

「こつこつ若者達が現れるのを楽しみに待っておったのじゃ」

尚も自分を改心させるような言葉を掛けてくるジャッキーに、天津飯は反論しようとするが、その前にジャッキーは天津飯に背を向けた。

「……?」

誰もがジャッキーの理解できない行動に疑問符を浮かべた。試合中の相手に背を向けることがいかに危険な行為であることを、誰よりも理解しているはずのジャッキー・チュンが取る行動とは思えなかった。

その対戦相手である天津飯も、背を向けた相手に対してどう対応するか決め兼ねていた。

常ならば問答無用に攻撃するのだが、この恐ろしいまでの実力を

持つ老兵がそう易々と不意打ちを許すとは思えなかった。

また同時に、彼がつい先程まで放っていた闘気がその背中からはまるで感じられず、すっかり霧散していることも、大いに天津飯を困惑させた。

ただ1人、いや2人、彼の正体を知るカイジと、この試合の最中鶴仙人と同じように彼の正体に感づいたヤムチャだけが、何となく次に彼が取る行動が分かった。

「これでわしはまたのんびりと暮らせるわい」

最後にそう言って、ジャッキーは軽い跳躍で武舞台から場外へ飛び降りた。

『あつ！！』

「なつ！？」

「えっ！？」

天津飯がかめはめ波を放った時とは、また別の意味で予想外の行動だった。

まさか前回覇者が試合の半ばで自ら負けを選ぶとは誰もが思えない。

「よつこらしょつと」

『じよ、場外…!! 天津飯選手の勝ちです…!!』

呑気な掛け声で武舞台によじ登り、鼻歌交じりに選手控え室へと戻るジャッキー、その背中を誰もが呆気に取られた顔で見送る。

「何故だっ!! 何故わざと負けるんだ!!」

天津飯には、いや会場中の誰もがジャッキーの行動が理解できなかった。

「なあに、まともに闘って負けるのが情けなくて嫌だっただけじゃない、卑怯者じゃ!!」

観客席から聞こえてきた師・鶴仙人の言葉でも天津飯は納得出来なかった。

実際に闘っていた彼だからこそ、ジャッキーが最後まで全力を出し切っていなかったことに気付いていた。

「さて、どんな時代がやってくるかの……………」

そんなことを呟きながら、ジャッキーは啞然とする悟空、クリリンの前を通り、選手控え室へと消えた。

第2試合 天津飯対ジャッキー・チュン

勝者 天津飯

勝ちにしたものの、天津飯にとっては、何ともモヤモヤとした感情の残る試合となった。

ジャッキーが選手控え室へ引つ込むと、そこにはカイジとヤムチャの姿があった。

「武天老師様……………」

「なんじゃ、ヤムチャにもバレてしもうたか、わしもまだまだじやおの」

楽しげに笑う武天老師に、掛けるべき言葉は何かと探っていた2人だったが、それを制するように武天老師が口を開いた。

「ヤムチャ、カイジ、お主らはいつらと比べて幾らか聡明じゃ、奴らが道を誤らんよう導いてやれ」

あいつら、悟空やクリリンは勿論として、もしかしたらそこには天津飯や餃子チャオスのことも入っているのかもしれない。ただ2人の答えは一つしかなかった。

「はい!!」

一分の迷いもなくはつきりと答えた2人に微笑みを浮かべ、武天老師は選手控え室を後にした。

「面白い時代になりそうじゃわい……」

この日、ジャッキー・チュンという名の武術家が武術の世界から姿を消した。来る新しい波に武の未来を託して。

ジャッキー・チュン

第21回天下一武道会で出場者中最高齢ながら、熟練された多彩な技を駆使し見事優勝。

続く第22回天下一武道会にも同じく最高齢として出場、1回戦にて惜しくも敗退するが、前回の決勝戦と負けず劣らずの名勝負を繰り広げた。

## 時代の波（後書き）

有名スポーツ選手の引退って凄く寂しい気持ちになりますよね。

最近だとサッカープレミアリーグのマンUのファンデルサールやスコルズ。

今はベツカムとギグス、後イタリアのラツィオに移籍したクローゼがいつ引退してしまうのかとビクビクしています。

あとこの前ドラゴンボールのテレビSPのDVDを買いました。

バーダックとトランクスの2本だてのやつ。

もしかしたらこの小説の中に組み込むかも。

では。

## 我が弟子たち（前書き）

主人公の影がどうにも薄いので、前半は主人公視点でお送りします。



## 我が弟子たち

オレ達が武天老師様を見送った直後、直ぐに天津飯が控え室に現れた。

天津飯は何かを探すように辺りを見渡し、ここにオレとヤムチャ以外の人間がいないことが分かるや否や、オレ達のことなど見えていないかの如く、武天老師様の後を追うように控え室を出て行った。

その様子からして、武天老師様を捜していたのだろうことは容易に分かる。天津飯に関しては武天老師様の口ぶりからして根っからの悪人ではないようだが、やはり少し気になった。

「……………ちよつと行ってくる」

「ん、ああ、そうだな」

一応ヤムチャに一声掛けてから、オレは天津飯の後を追った。

背中ごしに第3試合開始を告げる声が聞こえた。

天津飯に追い付くと、そこには“ジャッキー・チュン”の変装を解いた武天老師様の姿もあった。

「何故武天老師ともあるう者が、わざわざ変身までしてこんな大会に出たのだ……」

どうやら天津飯は自身の中に浮かんだ疑問を問いただしに来ただけのようで、2人の間に物騒な雰囲気はなかった。

あまり関係のないオレがそのまま出ていくのもどうかと思ったので、ひとまず気配を消して建物の影に隠れる。

「なあに、単純なことじゃ」

武天老師様は恐らくは変装に使っていたであろう荷物をトランクに纏め、立ち上がり言った。

「我が弟子たちのためじゃ。」

天下一武道会なんぞで奴らの誰かが優勝してみい、自分は世の中で一番強いんだ！などと調子づきおって向上心がめつきり失せおる……。

若い者にはありがちな罷じゃ……」

3年前に言っていた理由と同じだった。ただ、オレやヤムチャ、直接には言われていないが悟空とクリリンも、武天老師様に後を託されたのだ。少しは認めてもらえたということだろうか。

ただ、天津飯は全く別の答えに辿り着いたようである。

「なるほど、これで分かったぜ……。」

この俺のあまりの強さを知り、弟子の優勝は有り得ない、そう思っ  
てあんたはわざと俺に負けたんだ。

ただし、あのまま闘っていても俺は勝ったがな……………」

天津飯はそう言つと口元に微笑を浮かべた。

相変わらずの自信家ぶりだな、武術を志す者は皆少なからず自信家ではあるが、こいつはかなりのもんだ。相応の実力を備えている分、一概には否定できないが。

「それはちょっと違うな」

「なに?」

「わしの弟子には、この大会に優勝したくらいでダメになってしまふような愚か者はおらぬ、というのが分かったからじゃよ。

これでもうわしが出るまでもない、安心じゃ……」

去来する誇らしい気持ちと共に、不覚にも感動してしまった。

そのせいで抑えていた気が弛んだのか、武天老師様が顔をこちらに向けた。慌てて気を抑えたが、多分バレている。

「ほっほっほ……尤も、わしの正体を知った上に、こんな所に来てついでくる者もあるがの」

そう言いながら、武天老師様がこちらに向かって手招きしている、どうやら完全にバレているらしい。

「なっ……！」

潔く姿を現したら天津飯に驚かれた、多分オレの気配に気付いていなかったのだろう。

オレが武天老師様の傍まで行くと、武天老師様は話を続けた。

「このように師の話を立ち聞きするような弟子ではあるが、決し

て愚か者ではない。

それどころか、わしの身を案じ駆けつけてきた、善き弟子じゃ」

「ここまで直接的に言われると、何とも照れくさいものがある。

「勿論お主も愚か者ではない、お前さんは悪人にはなりきれやせんよっだし」

「なっ、なんだとっ!？」

「そうでなきや、こんな理由を聞きにわざわざ来やせんよ、じゃあな……」

武天老師様が天津飯に背を向けてその場を去ろうとしたので、オレもそれに追従する。

そんなオレたちに天津飯が放った言葉、その中になんとも聞き覚えのある名前が入っていた。

「けっ!! 良いことを教えてやろう、俺はあの桃白白タオバイバイさんのような世界一の殺し屋を目指しているんだ!!!!」

桃白白……さん？ 桃白白って……あの桃白白のことか？ それなら……

「桃白白なら死んだぞ」

「なにっ!?!? 出鱈目言うな!?!」

「出鱈目じゃない、3年前に弟子の灰茶々諸共悟空とオレで倒した。」

最後は自分の放った爆弾を弾き返されお陀仏さ、その弟子の灰茶々も身体の中に何者かによって爆弾を仕掛けられて爆死……。

悪人の死に様なんて碌なもんじゃないぜ……」

フラッシュバックする2人の死に様、特に灰茶々は敵ながら哀れな最期だった。

「そんな話……信じるものか!?!」

荒々しくそう言い放つと、天津飯は選手控え室の方に戻っていつてしまった。

これは、少し不味いことを言ってしまったかな……? ?

少し軽率だったか、と自戒していると、武天老師様が驚いた顔でこちらを見ていた。

「カイジよ、今の話は真か？ お主と悟空であの桃白白を倒したのか？」

「はい、と言ってもオレは弟子の方と闘っていたんで、桃白白を倒したのは悟空一人なんですけどね」

武天老師様はフム、と顎に手をやり目を閉じて考え込んだ。

数瞬考えた後、

「詳しい話が聞きたいの、ちよいと悟空の所まで行くか」

と閉じていた瞼を上げながら言った。

武天老師様が踵を返して、その足を選手控え室の方に向けたので、取り敢えずオレもそれに続いた。

控え室を抜けて、武舞台を一望できる場所に来ると、悟空とヤムチャ、そして少し離れたところにいる天津飯の3人がその場で試合を観戦していた。

天津飯は堅い顔で武舞台を見つめている。多分桃白白のことや、武天老師様に言われたことを考えているのだろうと思う。

試合はクリリンの劣勢で進んでいた。

というのも、対戦相手の鶴仙流の餃子チャオスが舞空術で宙に浮かんでい  
るため、クリリンは全く手を出せない状況なのだ。

一方の餃子には攻撃手段があった、餃子は指先から光線状に凝縮した気を放出して、地上のクリリンを攻撃していた。

その技を見て瞬によじ登って観戦していた悟空が、思い出したかのように叫んだ。

「桃白白って奴とおんなじ技だ!!」

今現在、彼にとって決して聞き逃せない名前を聞いて、天津飯が弾かれたようにこちらに顔を向けた。

「貴様、今誰と同じ技だと言った!？」

拳を固く握り締めて、怒気を隠そうともせず声を荒げる天津飯に、



さすがの悟空も眉を顰めた。

「何だよ、オラがやっつけた桃白白って殺し屋と同じだって言っただんだ！」

「やっつけただと!? 出鱈目言っな!!」

さっきオレとしたのと殆ど同じ会話をする天津飯。オレと悟空、2人の証言があってもまだ信じないというのか？

「出鱈目じゃねえ！ おめえ何だっっていうんだ!？」

天津飯の怒気に触発されたのか、段々と悟空も怒りを露わにしてきた。隣にいるヤムチャもまた同様に天津飯を睨んでいる。

「た…桃白白様が…まさか、本当に……」

天津飯は一瞬顔を青くして、その3つの目で悟空とオレを睨んだ後、再び控え室の方に消えていった。

「何だあの野郎、へーんな奴!!」

思えば、ここまで怒りや嫌悪感を露わにする悟空は初めて見た。

「ふむ、悟空よ」

武天老師様は天津飯と入れ替わるようにして、悟空たちに話しかけた。

「へ？ あつ、亀仙人のじっちゃん！ 何でここにいるんだ？」

「少しお主に聞きたいことがあっての。」

悟空、お主如何にして桃白白を破ったのじゃ？」

また疑われたのかと思ったのか、悟空は武天老師様の言葉に目をしかめた。

「なんだよ、じいちゃんまで……。」

やっつけたよ、苦勞したけどな。すげえつええ奴だったんだ」

少しふてくされた様子で答える悟空。

武天老師様は言葉の通り、どうやって桃白白を倒したのかを聞き  
たかっただけなのだ。

まあ、気持ちは分からないでもない。

直前に同じ話題で天津飯から疑いの声を掛けられているのだ、勘  
違いしても仕方ないだろう。

とは言え、訂正できる勘違いを放置しておく手はない。

「悟空、武天老師様はどうやって闘ったのかを聞いてるだけだ。  
お前のことを疑っているわけじゃない」

悟空はようやく質問の意図を察したようだったが、直ぐに頭を捻  
らせてしまい、明瞭な答えは返ってこなかった。

「うーん……オラあいつに一度負けちまってよ、でもじっちゃん  
が助けてくれたんだ。」

そこでカイジとカリン塔登って、修業して……えーと、そこで強  
くなって勝った」

悟空がうんうんと頭を悩ませながら語った記憶は、何とも穴だら  
けでお世辞にも分かりやすい説明ではなかったが、武天老師様は満  
足したようだ。

そもそも、悟空に3年前の闘いのことを詳細に語らせようなど、かなり無理があった。

ある程度話が聞けただけ良かったのではないだろうか。

ん？

「武天老師様、どうかしたのですか？」

「うむ……少々厄介な話になってきたのお……」

武天老師様は難しい顔をして、何事かを深く考え込んでいた。

「厄介な話……とは？」

「うむ……桃白白は鶴仙人の弟なんじゃ……」

「「えっ」「」

悟空とオレの呆けたような、驚いたような声が重なった。

「弟つて…兄弟つてやつだろ…?」

悟空はよく分かっていないようだが、武天老師様が言う通り、これは少々厄介な話だ。

この話が伝われば、天津飯や餃子は分らないが、鶴仙人は確実にオレたち亀仙流を殺しにくる。

そして先程の天津飯の様子からして、おそらく観客席の鶴仙人にこの話を伝えに言ったので間違いないだろう。

そして、今武舞台で闘っているのはクリリンと餃子。

つまり、クリリンが危ない?

その時、観客席からしゃがれた叫び声が上がった。

「餃子!!! お遊びはここまでだつ!!! やってしまえつ!!!」

鶴仙人の声だ、天津飯から桃白白の話が耳に入ってしまったのか。

「不味いぞ、奴ら、わしの弟子であるお前たちを試合で殺す気だぞい!」

「えっ！？ オラがあいつの弟を殺したからか！？」

「しかし、いくらあいつらでも殺すことはないんじゃない？……？」

ヤムチャの予想は正しい、鶴仙流の弟子たち、彼ら個人としては殺人に手を染めることはないだろう。

ただ、その師である鶴仙人からの指示があつたならば、過ちを犯すかもしれない。

事実、空に浮かぶ餃子の指先には、これまで以上に強力な気が集められていた。

そして、地上でそれを見上げるクリリンもまた、ある構えをとつた。

「あの構えは………」

「クリリン、あやつまさか………」

「かめはめ波か！？」

クリリンがとつた構えは紛う事なきかめはめ波の構えだった。こ

れでクリリンがかめはめ波を使えたら今日だけで3人の新たな使い手が増えたことになる。

しかし、不安は隠せない。現に元祖かめはめ波の使い手であり、クリリンの師匠でもある武天老師様はクリリンが取った構えに渋い顔をしている。

「無理じゃ……！ にわか仕込みのかめはめ波では、どどん波にはとても勝てん……！」

なるほど、確かにそうかも知れない。このままじゃクリリンは分が悪いのか。でもクリリンと3年間一緒に修業したヤムチャはそうは考えていないようだ、口元にも笑顔が見える。

「大丈夫ですよ武天老師様、あのクリリンが考えもナシにかめはめ波とどどん波をぶつけるとは思えない。きっと何か策がある筈です」

そして光は放たれた。

餃子の指先から地上のクリリンへと放たれた一筋の光は凄まじい速さで進み、やがて地面で凄まじい爆発を起こした。

武舞台一帯が爆煙に包まれる、つい先程まで餃子が連発していたどどん波とは比べものにならない威力だった。

しかし既にそこにクリリンの姿はなかった。

「え!?!」

上空の餃子から突然の出来事に呆気にとられたような声上がる。

その声に釣られて観客たちが空を見上げると、そこには両手を腰だめに構えたクリリンの姿があった。

「波つ!?!?!?!?!」

クリリンの手から気的光が放たれる、その光は空気を切り裂いて真っ直ぐと進み、渾身の攻撃直後で油断している餃子の身体を完璧に捉えた。

直撃時の轟音と共に弾き飛ばされた餃子の小さな体は、空中でぐるぐる回りながら観客席の方へ落下していった。

「やった!?!?!?!?!」



「場外に落ちるぞっ!!！」

両手を上げて喜ぶクリリン、悟空も身を乗り出して声を上げる、そして落下する餃子を見送る観客たち、その誰もが餃子の場外負けによるクリリンの勝利を確信した。

しかしこの鶴亀合戦、そう簡単に決着がつくことはなかった。

場外に落下するかと思われた餃子の身体は、地上から2m弱、ちよつど観客たちの頭上付近でピタリと静止した。

餃子が半分飛んでいた意識をギリギリで取り戻したのである。

そのままフラフラとした不安定な舞空術で武舞台へと戻ってくる餃子、それを見てクリリンは悔しそうな声を上げる。

「くっそ~~~~!! もうちよつとだったのにまた浮かびやがった……!!！」

本人は悔しがっていたが、悟空たちと共に観戦している武天老師は、予想以上の弟子の上達振りに誇らしげに頬をゆるめていた。

「はあ……はあ……」

やっとの事で武舞台へ戻ってきた餃子、再び向かい合う2人だったが、服もボロボロで肩で息をしている餃子が、既に満身創痍であることは誰の目から見ても明らかだった。

睨み合う両者、一瞬の沈黙の後攻勢に出たのは勿論クリリンだった。

「はあー！ー！っ！！！」

気合いの声と共に、右足で地面を強く蹴ったクリリンは、右下から上段の頭へと踵を振り上げるようにして左足を繰り出した。

頭への攻撃をしゃがんで避ける餃子、しかし蓄積されたダメージは隠せずその動きは精彩を欠いている。

間髪入れずに放たれた右足の蹴りに餃子は全く反応できず、しゃがんだことで沈んだ頭を問答無用に蹴り上げられる。

元々格闘戦ではクリリンの方が勝っていた、その上甚大なダメージを負った状態で餃子がクリリンに正攻法で敵うはずなかった。

故に、餃子は決して正攻法とは言えない手で、この劣勢を覆すことにした。

「たっ！！！！！！」

ここぞとばかりに攻めたてるクリリン、蹴り上げによって吹き飛んだ餃子の身体を軽快な動きで追う。

そんなクリリンに対して餃子は両手を翳し、決して正攻法とは言えない手、所謂超能力を仕掛けた。

「やっ！！！！！」

「うっ！！！！！」

餃子の気合いの声を上げたかと思うと、クリリンは苦しげな呻き声を上げてその動きをピタリと止めた。

何事かと思うまもなく、クリリンは自分の腹を押さえて苦しみだした。

「どうしたんだっ！？ クリリン！！！」

悟空が心配げな声を上げる横で、武天老師とカイジは餃子が超能力を使ったことに感じていた。

「またおかしな術を使いおったな！」

「試合前にクリリンに気をつけるよう言ったんですが……、実際に使われるまで対抗策など分からないか……」

厳しい面持ちで見守る亀仙流勢。

一方の鶴仙流の師・鶴仙人は観客席からテレパシーで餃子にクリリンを場外には落とさず蹴り殺すよう命じた。

そして餃子はこの命を受諾した、だがこの時両者の間に幸運とも言える認識の齟齬が生まれていた。

桃白白の死を知った鶴仙人は明確な殺意を持ってこの命令を下したのだが、餃子は蹴り殺すとはあくまで例えであり、本当に殺せと命じられたとは思っていなかった。

餃子はこんな大衆の面前で己に殺人者となれ、などという無茶な命令を尊敬する師が下すはずあるまい、そう思ったのである。

「て……てめえ……くそっ……ちょ、超能力か……!!」

まさか自分が命を狙われていたとは夢にも思っていないクリリンが、ここに来てようやく己を襲う腹痛の正体に思い当たった。

対戦相手の餃子が超能力の使い手であるとカイジから忠告されていたクリリンは、試合前にその対抗策を考えようと必死に頭を捻ったが、結局何の案も出なかった。

ただ十分に警戒して闘おう、それだけはしっかりと心に刻んでいた、にも拘わらずまんまと敵の術中に嵌ってしまった。クリリンの心は不甲斐ない思いと悔しさで一杯だった。

「けけけ」

超能力を発動させたまま餃子がクリリンに近づく、そのクリリンはあまりの腹痛に立っているのが精一杯の状態だった。

「ぎっ……！」

先程のお返しとばかりに、クリリンの頭を蹴り飛ばす餃子、何の備えもなくもろに食らったクリリンの身体は勢いよく吹き飛ばされた。

しかし幸か不幸かクリリンの身体は装飾によってゴツゴツとした壁に当たり、場外に落ちることはなかった。

天下一武道会の武舞台は真四角な形で、そのうち3辺は場外と繋がっているが、1辺のみ線種控え室と武舞台とを仕切る壁が面している。

クリリンはその1辺のみである壁に激突して場外を免れた。

いや餃子には元々場外にさせるつもりなど無かったので、これは餃子にとって狙い通りの結果、クリリンの幸不幸の問題ではなかった。

「ち……ちくしょう……!! き……き……汚ねえぞ……!!」

「死ぬまで蹴飛ばす」

何とか立ち上がり、苦しみながらも闘う意思は失わないクリリン、必死に打開策を探し、ふとあることに気付いた。

餃子が先程からずっと両の手のひらをこちらに向けていることである。そしてたった今餃子が放った発言からクリリンは確信に近い一つの仮説を導き出した。

餃子の超能力は手のひらから発せられる、故に常にこちらに手のひらを向けていなければならない、だから餃子はキックしかできない。

(ということとは……あの手さえ何とかすれば……!!)

クリリンは必死に頭を回転させた、あまり時間はない、短い時間で咄嗟に思いついた手は1つだけだった。

「さ、 $3 + 4$ は!？」

「えっ!？」

咄嗟に思いついた手だとしても、愚策中の愚策と言える手だった。

クリリンは餃子の顔を見て、コイツ馬鹿そんな顔出し簡単な計算でも指を使って数えるんじゃないか？ と、そんなことを思いついたのである。

この発想は、かつて悟空との修業時代、実際に悟空が簡単な足し算や引き算を指を使って数えていたのを見たことが少なからず影響していた。

いずれにしてもこんな簡単な計算を餃子が指を使って解くほど馬鹿である保証はないし。

そもそも餃子が馬鹿正直にこの問題に取り組むという保証もなかった。

しかし、餃子は、馬鹿で、かつ、馬鹿正直であった。

「え〜と、3…4…5…6…」

「しめたっ！……！」

餃子は計算のため指を使って数を数え始めた。

と、同時にクリリンを襲っていた凄まじい腹痛は嘘みたいに治った。

すかさずクリリンは目の前で数を数えている餃子に渾身の拳を鳩尾にお見舞いする。

重い一撃を食らった軽い餃子の身体は、その衝撃で舞空術を使わずとも浮き上がり、1 m程後方に着地した。

「ぐえええ……！！！」

目を見開き、打たれた鳩尾を押さえ苦しむ餃子。



クリリンはこのチャンスを活かそうと距離を詰める。

が、後一步というところで再び餃子が両手を翳し、クリリンは腹痛によってその動きを止められた。

「よ、よくもやったな……お返ししてやる」

止せばいいものを、この時餃子が取った行動はクリリンの作戦に対する意趣返し、即ち計算問題の出題である。

「 $16 + 27$ は!？」

「 $43$ !?!」

「!?!」

即答。

餃子が自分でも分からないほど大きな数字を使った足し算をクリリンは一瞬で解いた。

予想外の事態に途轍もない衝撃を受ける餃子、そこにクリリンの追い打ちがかかる。

「9 - 1は!？」

「あわわわ……!!!!」

またしても馬鹿正直に手の指を使って計算を始める餃子、そんな隙を腹痛が引いたクリリンが見逃すはずがなかった。

今までの恨みやら何やらの全てを込めた怒りの拳が放たれる。

計算に必死な餃子は為す術もなくその拳を食らい、場外へと弾き飛ばされた。

『場外っ!!!! クリリン選手の勝ち……っ!!!!!!』

「やった……クリリン……!!!!」

悟空の喜びの声と観客の歓声が会場に響き渡った。

終始一貫として格闘技の勝負とは言い難い試合ではあったが、最終的に地力、また知力で勝るクリリンが勝利を収めた。

「さ…算数の修業もさせておけばよかった…」

鶴仙人の悔しげな呟きはクリリンの勝利を称える歓声にかき消された。

## 我が弟子たち（後書き）

クリリンVS餃子は1話で終了です、その分ちよつと長くなってしまいました。

これedyouやく原作10巻が終了、現在40話、連載開始から5ヶ月経過。

セル編（人造人間編含めると原作28〜35巻）  
（ ） （ ） エッ  
・？ （ ） までいったいどれだけかかるんだ？

まあ、めげずに頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5821s/>

---

武の頂を目指して

2011年10月1日02時54分発行